

追悼

自然を愛した医師・寺島和光



寺島さんが登頂前で倒れたボリビアの秀峰ウトゥルンコ（6,008m）。双耳峰が美しい山だ。強い日差しを受けた砂が雪のようにみえる

横浜市立大学探査会・探検部 OB 会

刊行にあたって

私たちは、寺島和光さんがボリビアで登山中に急逝されたとの知らせに驚き、信じられない思いでした。彼はボリビアに行く前年、横浜市立大学探査会・探検部 OB 会に出席し、日本百名山の踏破やダーウィン進化論の原点であるガラパゴス諸島の生物観察、さらにネパールや天山山脈へのトレッキングの話をにこやかに語っていました。その時のいわば「寺島節」の独特な語り口や、歳の割にうらやましいほどの元気な姿が私たちの脳裏にあり、急逝の一報は驚愕しました。まだまだやりたいことがたくさんあったらうに、それを思うと私たちも無念でなりません。いまとなっては、彼の足跡をたどり、高い志を受け継いでいくほかありません。

彼がボリビアへ行く直前の 2015 年 4 月、探査会創立 60 周年の記念企画を大野が相談した際、自分史の一部を紹介したところ、その返信メールには次のように書かれていました。

「やはり知床や探査会などの記録が特におもしろかったです。私もそのうち自分史を書こうかなと思っていますが、まだ、手をつけていません。その代わりというわけではありませんが、私が単独で執筆した小児泌尿器科学の参考書 2 冊を昨年秋から今春にかけて相次いで改定しました。(1 冊は改訂第 3 版)。けっこう大変な作業で、今無事終えてほっとしております。ところで、自分史ではないのですが、先日、横浜市大の泌尿器科専門誌に添付のような小文をのせました(本書収蔵)。ご笑覧下さい。

5 月下旬から、南米のボリビアのアンデス山脈にトレッキングに出かけます。ペルーアンデスには以前に行ったことはありますが、この時は 4,700m まで登りました。今回は 6,008m の山頂を目指します。私にとってはヒマラヤの 5,545m 以来の高峰で、初めての 6,000m 峰です。といっても実際にはかなりの高度まで車で行けるので、歩く距離は少なさそうですが、なにしろ高齢ですので、高度順化がうまくいくか心配です。無事帰ってきたら、来年ぜひお会いしたいです」
(大野受信 2015.4.28)

寺島さんは 1958 年、横浜市立大学医学部に入学。学内サークルの生物部に入り、翌年、学術調査を目的とした探査会と山岳部・OB 会が中核となった知床半島先端部の夏季未踏査地域の調査隊に参加しました。調査後に探査会学生部の創立に加わり、多くの登山・調査・訓練に関わり、医学部 3 年の時には 15 人の部員を率いて、当時の秘境大雪山扇ヶ原を調査しています。後に学生部は探検

部と改名しましたが、その中核となって活躍しました。後年は、医師・医学者として活躍するとともに、学生時代と変わらない情熱をもって、野鳥や植物の愛好家、自然観察者として多方面に活動していました。

私たちは、自分史を書こうとしていた寺島さんの遺志を継ぎ、その足跡を記録することにしました。本書では学生時代の活動が主な内容になっていますが、初めて知る驚きや共感、感銘がきっとあるのではないかと思います。彼は学生時代に培ったナチュラルリストとしての生き方を、医者・医学者となられた後も貫き、大きな足跡を残しました。その足跡を紹介した本書が知人・友人・後輩ばかりでなく、多くの方々の心に残れば幸いです。私たちの学生時代は半世紀も前のことで、散逸した資料を集め、友人たちの記憶をたどるのも大変でした。多くの方々のご協力に改めて感謝申し上げます。

横浜市立大学探査会・探検部 OB 会
世話人代表：大野正夫・松橋隆司



バラ：切り絵（松橋三保子）

寺島和光の略歴と業績

- 1938年 福井県大野市南新在家にて生誕
- 1951年 福井県大野市下庄小学校卒業
- 1954年 福井県大野市下庄中学校卒業
- 1957年 福井県大野市大野高等学校卒業
- 1958年 横浜市立大学医学部入学
横浜市立大学生物部に入部
- 1959年 横浜市立大学探査会に入部
日本野鳥の会神奈川支部に入会
- 1964年 横浜市立大学医学部卒業
- 1965年 在日米軍病院でインターン修了（1年間）
- 1969年 横浜市立大学医学部大学院修了
- 1969年 聖路加国際病院外科勤務
- 1969年～1972年 米国ヒューストン市ベイラー医科大学に留学
（附属病院、泌尿器科レジデント、研修員）
- 1972年～2003年 神奈川県立こども医療センター
泌尿器科部長として勤務
- 1972年 この頃より日本百名山の踏破の実施
- 1982年 横浜植物会に入会
- 1987年 中国東北部・原始境長白山観察会参加（横浜植物会）
- 1996年 第5回日本小児泌尿器科学会会長
- 2001年 ワイルド・フラワー南西オーストラリア観察会参加（横浜植物会）
- 2003年 神奈川県立こども医療センター泌尿器科 定年退職
- 2003年 聖マリアンナ医科大学腎泌尿器外科の客員教授に就任
- 2003年 里見腎泌尿器科クリニック（横須賀）非常勤勤務
- 2004年 海外トレッキングツアーに参加を始める
- 2005年 小児泌尿器科ハンドブック（寺島和光著）南山堂刊行
- 2006年 小児泌尿器疾患マニュアル（寺島和光著）診断と治療社刊行
- 2015年 6月4日ボリビア ウトゥルンコ峰登頂中に急逝
- 2015年 10月 小児泌尿器疾患マニュアル（寺島和光著）改定3版
診断と治療社刊行

ボリビアの山並を背にしたフラミンゴの群集



コロラダ湖で寺島和光撮影





ボリビア最高峰 Mt.サハマ（6,645m）を背景に Mt.サハマ展望温泉にて、左端：寺島和光
（同行者撮影）



6月4日、Mt.ウトゥルンコ 5,700m付近（同行者撮影）

「藤の花—孫達へのメッセージ」寺島家編 冊子 272 頁、2010 年刊行
寺島和光のアルバム（172 頁）より



左：アメリカ・ヒューストンで臨床研修中、1971 年テキサスメディカルセンターで、（2 列、右より 2 人目）

右：40 年間の勤務医時代に約 6,000 例の手術を行った。神奈川県立こども医療センターに 30 年間勤務したので、大多数は小児患者であった。



左：ヒマラヤトレッキング中の和光、（背後は 6,542 m のタウツェ峰）。
2006 年（67 歳）のこの時は標高 5,645 m まで登った。

右：静岡県伊豆・浄蓮の滝にて（2005 年、ユキ子 61 歳、和光 66 歳）

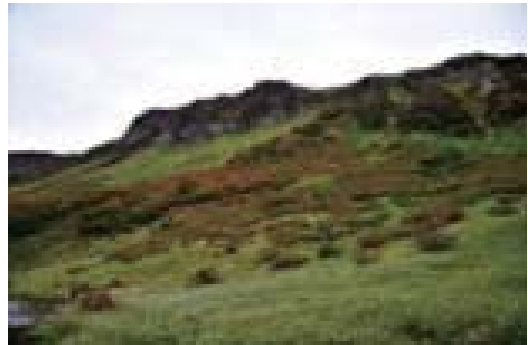
寺島和光が参加した横浜市立大学探査会の調査地



知床半島（医学部進学課程2年調査地） 知床岬の上陸した台地：ウィキペディア（フリー百科事典）より



北上川（北上市）（医学部2年調査地）
ウィキペディア（フリー百科事典）より



大雪山（医学部3年調査地）：大学沼 左下にテント場。大雪高原温泉沼：ヤマレコ・ホームページより



伊豆七島の無人島：鵜渡根島（医学部4年調査地）ウィキペディア（フリー百科事典）より



回想の旅ーヒマラヤ（エッセイは 81 頁に掲載）



カラパタール山頂（5,545m）
かつての同行の友と（写真）



エベレスト街道のホテル・エベレスト・
ビューで1980年



同じホテルにて 2006年

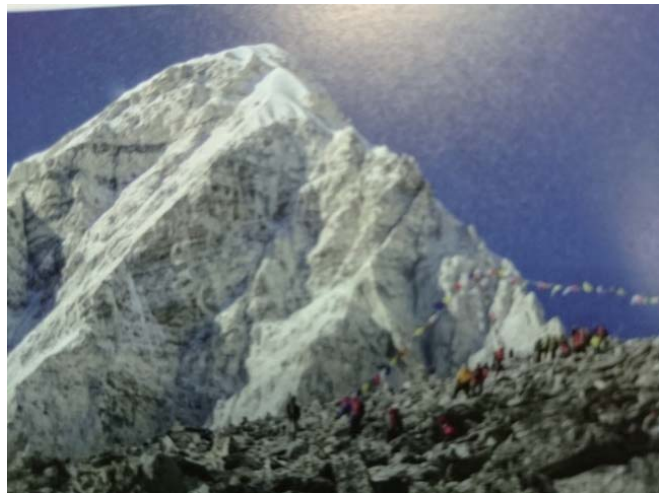


ロッジの外で
かつての同行の友と

海外トレッキング記録 (73 頁に掲載)



K2峰 展望



ネパール・エベレスト展望
カラパタール (5,545m) 登頂



中央アジア・キルギス草原を歩く



南米 ペルーアンデスの山を歩く

植物会や病院スタッフと



南西オーストラリア植物観察会（パース）3列目左から5人目：寺島和光



里見腎泌尿器科クリニックのスタッフと北海道の旅（クマザサの林のなかで）



寺島さんと里見佳昭先生



パースにて、寺島さんと右、青木清勝さん（本文掲載）



アジア太平洋小児泌尿器科学会懇親会 〈2014年、日光〉 (前列中央 寺島和光)



探査会・探検部 OB 会 (後列左端、寺島和光) (本文掲載)



福島先生を囲む会 (左より 3 人目、福島博先生) 左より、寺島和光、河合武臣、松橋隆司



目 次

ボリビアトレッキングの報告	本多直也	1
寺島和光の生い立ち	寺島節徳	6
自然を深くみる	寺島和光	1 2
寺島さんとトリキチ	飯島春雄	1 4
知床半島調査と紀行	寺島和光	1 5
知床半島縦走記	福島 博	2 1
八方尾根冬山と奥日光の訓練合宿		2 9
五月の尾瀬紀行	宮崎捷二	3 2
北上川調査報告・川下り調査記録報告	森下市朗	3 6
北上川の寄生虫調査報告	伊東芦一・寺島和光	3 8
大雪山学術調査一般報告	寺島和光	4 1
間歇（かんけつ）温泉と無数の湖沼・扇ヶ原	伊東芦一	4 6
鶺鴒渡根・地内無人島調査報告とエッセイ	松橋隆司	5 0
シンポジウムで、探査会に医学をいかに導入すべきか	寺島和光	5 4
活動提言（論文）自然保護と探査会	寺島和光	5 5
寺島さんを偲んで	松本芳樹	5 9
知床を楽しんだ寺島さん	吉野孝子	6 1
日本百名山踏破	刊行委員会	6 4
海外トレッキング報告	刊行委員会	7 3
K2 峰展望、エベレスト展望、中央アジア・キルギス天山、 ペルーアンデス、ブランカ山群		
エッセイ：ヒマラヤトレッキング 回想の旅—ヒマラヤ	寺島和光	8 1
寺島和光先生を悼む 日本野鳥の会神奈川支部・元支部長	村上司郎	8 3
寺島和光先生と横浜植物会の関わりについて 事務局長	渡邊重彦	8 5
横浜植物会における寺島先生 元会長	青木清勝	8 6
平成 13 年南西オーストラリア観察会報告	青木清勝	8 7
小児泌尿器科学会の記録 国際学会の設立に関わって	寺島和光	8 9
医師：寺島和光が刊行した専門書—解説—	里見佳昭	9 1
追悼文 里見腎泌尿器科クリニック	里見佳昭	9 2
寺島先生を偲ぶ		
神奈川県立こども医療センター 泌尿器科部長	山崎雄一郎	9 4
深く自然をみつめた寺島和光さん	大野正夫	9 6
最後の別れになった二つの会合で	松橋隆司・大野正夫	1 0 4
あとがき	大野正夫、松橋隆司、宮崎捷二、松本芳樹、名和裕美	1 0 8

ボリビア最高峰展望&ウユニ塩湖 6,000m 峰登頂と アタカマ高地 13 日間の同行ツアーリーダーとして

本多 直也

アルパインツアーサービス株式会社

2015 年 5 月 28 日午前 8:30、集合時間より少し早く成田空港にお越しになられた寺島様は、優しい笑顔と、静かで落ち着いた雰囲気印象的でありました。

自己紹介のあと、ボリビアの気候や飛行機の時間などについてご質問をいただき、その後は過去にご参加いただいたペルーやネパールの山についてお話をさせていただいたことが思い出されます。どちらかというところ「辺境」と呼ばれる地域にご興味がおありのようで、今回のボリビアの旅を大変楽しみにされている様子でした。

山だけでなく鳥に関しても大変ご興味をお持ちでした。特にツアー中、コロラダ湖でフラミンゴの大群や、沢の源頭部分でカワセミを見かけた際にはとりわけ楽しそうに、また熱心に観察されていたことが思い出されます。

初日のラパス到着時より体調もよく、ハイキングや観光、食事に至るまで、すべての日程を予定通りこなされ、他のご参加者とご一緒に終始明るく談笑されるなど、ツアーを大変楽しんでいらっしゃる様子でした。

私は皆様に、ツアーリーダーとして一般的な高山病対策のご説明をさせていただきましたが、寺島様に関しましては、お仕事柄、また豊富な高所でのご経験からご自身での体調管理をしっかりとされていたのではないかと存じます。

今回のツアー中、登山や食事、観光に関しまして、集合時間にはまず遅れることなく、また装備も不備の無いように準備をされており、とても几帳面でいらっしゃいました。

事故のあった 6 月 4 日の早朝も、私がドアをノックする、モーニング・ノックよりも先に部屋に明かりがつかっていたかと思えます。寺島様のことで、しっかりと、そして念入りにウトウルンコ登山の準備をされていたのだと思います。

このたび、大変残念な結果となり、私も寺島様をお助けすることができなかったことがとても悔しく、無念であります。

心より、寺島和光様のご冥福をお祈り申し上げます。

南米・ボリビア最高峰展望とウユニ塩湖・ウトウルンコ峰

(6,008m) 登頂とアタカマ高地のトレッキング報告

南米大陸の中央部に位置し、国土の約 1/3 をアンデス山脈が占めるボリビア。まずは円錐形の山容が美しいボリビア最高峰、Mt.サハマ(6,645 m)を展望するハイキングを楽しみ、その後は白い大地の広がるウユニ塩湖を縦断し、アタカマ高地へ。赤や緑に輝く湖や、蒸気が湧く大地を探索。高所に身体がなれた旅の後半には、6,008m峰、ウトウルンコの登頂を目指す。

ボリビア最高峰・Mt.サハマ(6,645 m)

ボリビアで6,000m峰が連なる山脈は、チチカカ湖畔のリアル山脈であるが、国内最高峰サハマ(6,645 m)は、ボリビア西部に独立峰としてそびえている。広大なアンデス高原に単独で堂々と鎮座する山容は最高峰に相応しく、ラパスからの道中、アンデイプラーノと呼ばれる高地の先に突如現れてくる円錐形の山容は息をのむ美しさである。山頂部には通年雪をいただき、かつ強風のために雲が湧くことも多く、アンデスの青い空とのコントラストが美しい幻想的な景色を作り出す。山脈には大地の割れ目から湯が沸いており、Mt.サハマを眺めながらの温泉は贅沢なひとときとなる。

絶景の宝庫・ウユニ塩湖の白い大地・荒涼したアタカマ高地にフラミンゴの生息

世界最大の塩の湖、ウユニ塩湖、乾期の季節には、見渡す限りの塩の大地が広がる絶景が現れる。このコースではウユニ塩湖を南北に縦断し、果てしなく広がる白い大陸を堪能する。ウユニ塩湖より南側には、チリ国境にかけてアタカマ高地が広がっている。荒涼とした大地には、多くのフラミンゴが生息する湖や、地熱湧く大地、緑の湖のバックにそびえる5,000m峰など、自然の創り出す驚きの光景が次々と展開する。

標高6,008mのウトウルンコ峰の登頂

ボリビア南部からチリにかけて広がるアタカマ高地には火山性である富士山型の山が多く、そのなかでも美しい山容を誇るのが、双耳峰の6,008m峰・Mt.ウトウルンコである。6,000mを超える高峰ですが、高所順応を考慮して旅の後半を目指す。山麓の村からかつての鉱山まで続く道を利用できるので、5,700mのコルまで車でアプローチすることが可能である。通常雪はなく、ゆっくりと、確実に標高差300mを登れば、6,000m峰の頂きに到達する。360度の展望が広がる頂上に立ち、6,000m峰登頂の達成を味わう。

行動記録

5月28日 成田発

5月29日 ボリビアの首都ラパス（3,632m）着。

5月30日 専用車で3時間、ワイナポトシ峰を映すトゥニ湖（4,425m）へ。コンドルが翼を広げたような山容のコンドリリ峰を望むハイキング徒歩3時間。ラパスに戻る。

5月31日 ラパス発。専用車でサハラ山麓の村（約4,200m）展望ハイキング

6月1日 専用車でMt.サハマを展望する温泉に立ち寄り、その後、ウユニ塩湖湖畔のタファアへ。（7時間の行程）

6月2日 専用車でタファア発、ウユニ塩湖を横断し、ビニャマルへ、途中、ウユニ塩湖の中央部に位置するインカ・ワシ島（インカの家という意味）を訪れる。

6月3日 朝、専用車でビリャマル発、アタカマ高地を南下し、温泉や地熱地帯もある荒涼とした大地を進み、途中、フラミンゴが生息するコロラダ湖や、湖面が緑色に輝くベレデ湖に立ち寄る。



6月3日フラミンゴ群集観察（右より2人目寺島さん）同行者撮影

午後、標高5,000m付近で、高所順応のために散策する（約1時間）。夕刻Mt.ウトゥルンコを望む村、クエテナチコ（4,200m）に到着。

6月4日 Mt.ウトゥルンコ登山報告

6月4日(木)の時系列のご報告となります。

◎天気：晴れ

◎場所：クエテナチコ(標高4,200m)～ウトゥルンコ登山(標高5,800mまで)～クエテナチコ

【メンバー】

◎ドライバーガイド1名(ペペMr.)

◎ローカル登山ガイド1名(マカリオMr.)

◎ツアーリーダー1名(本多)

◎お客様11名(男性8、女性3)

※ドライバー3名(セサMr. カルロスMr. ベロニカMs.)

05:00 皆様の部屋を本多がモーニングノックし、起床していただく。

06:00 朝食。日本から持参したフリーズドライの雑炊と味噌汁、クッキー、クラッカー、日本茶やコーヒ。また行動食用に、煎餅とチョコを配る。

06:30 日の出。ロッジより、Mt.ウトゥルンコも色がつき良く見えている。頂上付近の斜面には残雪が残っており、登山ガイドのマカリオMr.によると、1週間前に雪が降ったようだ。ただし車道や登山ルートである東斜面には無さそうである。

07:00 出発(ランドクルーザー4台)。かつての硫黄鉱山用につけられていた道(ダート)を進む。4,800m付近からところどころ残雪が出始める。

09:15 4台目のタイヤはうまく残雪を掴めない状態のため、この車(ドライバーはカルロスMr.)を残して他の3台に分乗して進む。人と荷物を移動させる。

09:30 5,500m付近にて残雪の一部が凍っているため車は危険と判断し、ここから歩き始めることにする。

09:40 登山開始。風は弱い冷たい。快晴。道沿いに歩く。道端に残雪が残るが歩く部分にはなく、雪を踏んで歩くことは終始なかった。緩やかな登りをゆっくりと進む。休憩2回。

11:00 5,700mのコル到着。風が強まるが快晴。休憩後、頂上に向けてジグザグに斜面を登る。砂と小石が混じった斜面で足がとられて歩きづらい。雪はない。スローペースで一団で登る。途中休憩一度。女性3名の足取りが悪い(足の置き方が悪く滑る)ため、本多がすぐ後ろに入って歩くことにする。

12:00 事故発生(約5,800m)。この時点での順番は次の通り。

【ローカル登山ガイドマカリオMr./女性3名/本多/男性1名/寺島Mr./男性6名/ドライバーガイドペペMr.】

突然、寺島様の後ろを歩かれていた男性の1人が本多に対し、寺島様のご様子がおかしいと叫ばれる。本多が振り替えると寺島様は崩れるように倒れたため、男性1

名を越えて戻り駆けつける。横を向いて横たわる形であったが背中を支えて上向きの形にし、声をかける。返事はない。目は閉じていらっしやる。再度声をかけ、頬を叩いても反応はない。呼吸も感じられず、頸動脈からも脈は感じられない。斜めの斜面であるが、人工呼吸と心臓マッサージの心肺蘇生を始める。マカリオとペペとで他のお客様を少し先の平坦な場所に集めてもらう。

呼吸も脈も戻らない。ペペ持参の酸素を口にあてるが自発呼吸はない。

ペペには無線(待機している車との交信が出来る)で緊急連絡を要請(車がある地点からは電話が通じ、マグリとの緊急連絡が取れたとのこと)。また車からはドライバーのセサにガモウバックと予備酸素を持って来させる。

- 12 : 15 他のお客様に状況を説明し、登頂を断念して下山することを了承いただく。
登山ガイドのマカリオとお客様で車まで下山開始。
- 12 : 50 心肺蘇生を続けるが自発呼吸も脈も戻らない。ドライバーのセサによって予備酸素とガモウバックが到着する。車から無線が入り、現地マグリ社から連絡を入れたドクター(クエテナチコにあるクリニック)が駆けつける準備をしており、間もなく出発することのこと。
- 13 : 00 ガモウバック(携帯型加圧装置)を使い3人で車まで搬出する判断をする。傾斜がきついため、まず約100m下のコル付近まで下ろし、ガモウバックに入っていた。酸素も中に入れて固定。運搬、心肺蘇生、運搬、心肺蘇生を繰り返すが、呼吸や脈は感じられない。体はまだ温かい。途中からはマカリオも戻って来たので4人で運搬。
- 14 : 40 車に帰着。寺島様は1台の車の2列目と3列目をフラットにして真横のまま乗っていただき、本多が横に乗り、心肺蘇生を続ける。待っていた他のお客様10名様には狭いが2台に分乗していただく。
- 15 : 15 往路にスタックした車1台の地点通過。お客様はこの車を含めた3台に分乗してもらう。寺島様を乗せた先頭の1台は先を急ぐ。
- 16 : 00 下から上がって来たドクター(グナールMr.)と合流。直ぐに診てもらうが、残念ながら既に息は無いとのこと、死亡を告げられる。(この後ドクターには日本での健康診断の結果と毎朝夕のパルスオキシメーターの数値を見せたが、健康状態は良好であったらうと言われる)。
- 18 : 00 クエテナチコのロッジ帰着。
その後、寺島様と本多、ドライバーは車でウユニの病院へ移動する。
- 23 : 45 ウユニの病院へ到着する。

寺島和光の生い立ち

寺島 節徳

1. 豊かな自然に育まれた少年期

寺島和光は農家の9人兄弟の8番目の子供として、1939年（昭和14年）3月20日に福井県大野市で誕生しました。

福井市から岐阜県側に40kmほど入ったあたりの市街地を中心として、小さな盆地があります。その大野盆地の北部に位置する南新在家という集落に和光は生を享け、少年時代を過ごしました。実家の門の正面からは、はるかに田畑が広がっている盆地の向こう側に、優美で気品のある姿をした山が眺められますが、この山は、後年、「荒島岳」として深田久弥の「日本百名山」の一つに挙げられることになりました。この「荒島岳」は、私たちが思い起こす「ふるさと」のもっとも象徴的な姿で、和光も17歳で上京するまで、この「荒島岳」を眺めて成長しました。

北陸の名峰「白山」も遠くはないのですが、手前の山にさえぎられて直接眺めることはできませんでした。



生家の門から眺める冬の荒島山

この大野盆地は、冬になると野も山もすっぽりと深い雪に覆われるのですが、その雪解け水が伏流水となって盆地のあちこちから湧き出し、どんな日照りの激しい夏でも枯れることのない泉があちこちに見られました。冬期に雪の深いことはつらいのですが、実家のすぐ裏を豊富な湧水を集めた小川が流れていて、初夏になると無数のホタルが飛び交うのを見られるという、まことに自然の豊かなところで私たちが育ったことは幸いなことでした。ホタルを取ってきて蚊帳の中に放ち、それを見ながら眠ったことも懐かしい思い出です。

実家は戦後の農地解放が実施されるまではいわゆる地主でありましたが、戦前から自分でもたくさんの農地を耕作する自作農でもありましたから、私たちは子供のころから農業を手伝いました。手伝いといっても水田の水の管理とか、収穫した稲のハサ掛け（稲を乾燥するために作った数段の棧に稲の束を掛ける作業）あるいは庭の草取りぐらいのものでしたけれど、物心つくとすぐに労働すること教え込まれて、働くことを厭う気持ちは持ち得なかったように思います。大人が朝早くからの仕事に疲れて昼寝をする間に、和光も、私や兄と交代で水田の見回り（必要な水が供給されているかどうかを見回る作業）をしたことをよく覚えています。すべての兄弟が、代々そのようにして育てられましたが、今にして思えば、これらは労働力として手伝わされたというよりも、むしろ子供に対する先祖代々の教育の一環だったのでしょう。

2. 動物と親しんだ日常

岐阜県との県境を水源地とする真名川（九頭竜川の支流）が実家の東側 2km ほどのところを流れていますが、大野のあたりでは川底は一面に小石で覆われていて清冽な水が豊富に流れておりました。

夏にはここでの水遊びが子供たちの最大の楽しみでありましたが、和光は泳ぐことよりも魚取りに熱中する珍しい子供でした。魚といっても「カジカ」（ゴリ。私たちは「ビシ」とも呼んでいた）というもので、小石に覆われた川底でじっとしているカジカを、「ヤス」という道具で突いてしとめるのですが、和光は抜群にこの技量がすぐれていて、毎日飽きもせずカジカを獲り、川辺に生えている楊の細い枝を折ったものにカジカを何匹も刺し連ねて家に持ち帰ったものです。食べればおいしい魚ですが、めったに家で食べることはなく、いつも家で飼っていた鶏のエサになっていました。私などは、2、3匹獲れば飽きてしまって泳ぐ方が楽しかったのですが、和光がなぜカジカ獲りにあんなに熱中できるのか、そしてあんなにたくさん獲ることができるのか、その頃も家族の話題になっておりました。それは今も謎のままです。



節徳と和光の着物姿

後年、探鳥や山歩きに熱中した和光の情熱の萌芽を敢えて少年時代に求めるとすれば、こんなことぐらいしか思い起こせません。荒島岳も実家にいるときには登っていませんし、そのころに登山に興味を持っていたという記憶はないのです。

ただ、農家であった実家では、私たちが子供の頃は、農耕馬のほかに、鶏、山羊、犬などを飼っており、後年は乳牛も飼っておりました。鶏は自宅で卵から孵化させて、その一羽一羽に名前を付けたりして子供たちが世話をしていましたし、山羊や牛の搾乳は自分たちでやっていましたから、知らず知らず動物に親しんだ少年期だったと言えましょう。大野盆地の豊かな自然と、家畜などに囲まれ、農業に親しんだ少年期の生活が、和光を含む私たち兄弟の人生に大きく影響しているだろうことは間違いありません。

3. 和光の将棋に私が勝てない理由

和光からみると、兄が6人、姉と妹がそれぞれ1人という兄弟の構成で、みなそれぞれに個性豊かな者ばかりでしたけれど、和光は比較的小となしい目立たない方だったと思います。男兄弟の最後ですから、和光だけは弟を従えて威張るようなことなどできなかったせいもあるでしょう。

私は2歳違いの兄ですが、高校を卒業するまでずっと同じ部屋で枕を並べて寝ておりました。

おそらく小学校の高学年のことだったでしょうが、夜、布団に入ってから、和光と私は一晩交代で、何でもいから「お話」をする、ということをやりました。その話す内容は、

その日の出来事の報告などでもいいのですが、一緒に遊んでいたので報告することはありませんから、そんな時は「物語」を創作するのです。毎晩のことで、創作する話の内容も尽きてくるのですが、だいたいは「お化け」がでてくるような場面を空想して「つくり話」をするわけです。そのうちにどちらかが眠ってしまい、気が付くと朝になっているという次第です。これは今でも強く印象に残っていますが、残念ながら二人とも作家の才能はなかったようです。

やはり小学校高学年の頃だったろうと思いますが、ある年の元旦から、和光と私の中で将棋の対戦成績を記録することを始めて、毎日毎日、何時間も将棋を指し続けました。初めのうちは、当然のことながら2歳も上の私が強かったのですが、100番、120番と対戦を重ねるにつれて、対戦成績は和光の方が徐々に上になってきました。そのわけは、直感的に次の一手を考えて素早く将棋を指す私に対し、和光はじっくりと時間をかけて先を読む、という指し方をやっていたからです。そうして対戦しているうちに、実力を付けていったに違いありません。

先の手までしっかり考えないで将棋を指す私は、すぐに「待った！」をするのですが、もちろんこれはルール違反。ところが私の負けが込んでくると、和光は気の毒がって私の「待った！」を容認するようなことになります。今度は、情けをかけられることが面白くない兄貴の私は、気が焦ってますます負けが込んでくるといふ悪循環に陥ったものです。

後年、このことを思い出したばに私は和光の性格についてこんなことを思います。

ひとつは、彼の慎重さと集中力の強さです。

子供の頃の和光は「じっくり型」の性格で、すべてに慎重でした。

これは、年齢を経ても変わることがなかったようで、例えば彼と山歩きした時に、山小屋で最初に起き出すのは和光、しかし旅装を整えて出てくるときに最後になるのはやはり和光、という経験を私は何回かありましたが、これはたぶんご友人の皆様も頷かれるのではありますまいか。

一方で、彼は子供のころは、どんなにうるさいところでも、本を読み始めるとそれに集中することができました。がやがやした部屋などでは、周りの気配が気になって落ち着いて読書などできない私にとっては、これは真にうらやましいことでした。

前に述べたとおり夏の河原で「カジカ」獲りに毎日熱中したことは不思議なことですが、一つのことに熱中できる、飽きもせずと同じことを続けることができるということは、和光が生涯持っていた大きな長所だったように思います。

その意味でいえば、彼が自分の性格を知って医者道に進んだのかどうか訊いたことはありませんけれども、私は正しい判断だったと思います。直感で判断して行動するような人間が医者だったら、患者はたまったものではありません。和光の趣味の一つであった「探鳥」もこんな彼の性格がもたらしたものだと思うと納得できます。

もう一つは彼の優しさと誠実さです。

将棋を指していて、私のルール違反の「待った！」を認めたことは、兄貴がへそを曲げ

て将棋をやめてしまうと困る、という打算も少しはあったかもしれませんが、長い間一緒に生活していて、彼に意地悪をされたり、反抗されたりしたことは、一つも記憶にないことを思うと、やはりそれは彼の優しさ、性格の穏やかさだったと思うのです。彼が妹をいじめたりしているのを見た記憶はありません。だいたいどの家族でも兄弟げんかは当たり前のことですから・・・。

後年、私は少しでも健康に不安があるとすぐに和光に電話して相談をしました。ところがそのうちにその心配ごとがなくなってしまうと、和光に相談したことはすっかり忘れてしまって何の報告もしないことがしばしばでした。するとある日、電話がかかってくる、「その後どうですか？」と訊かれる始末でした。彼のそういった心遣い、優しさ、それに物事を誤魔化したり適当に手抜きをするようなことのない誠実さを、私は終生忘れることがないと思っています。

4. 終わりに

この冊子を編集される大野様からご依頼があるので、和光の遺された家族のことを付記いたします。

和光の妻は、兵庫県神戸市の出身で、ある実業家の次女として育ちました。おなじ神戸出身の兄嫁の紹介で結婚しましたが、医者として過酷な勤務も多かった夫を支えて、家庭をよく守ってくれ、男女二人の子供を育てました。

息子夫婦、娘夫婦にはそれぞれ男女二人の子供があり、4人の孫がおります。最年長でもまだ10歳ほどで、まだまだ手のかかる年齢です。

和光も少なくとも孫が成人するころまでは生きていたつもりだったでしょうが、私たち兄弟もそのことがとてもかわいそうで心残りです。残された和光の家族を、温かく見守ってやっていただければ幸いです。

付記：刊行委員会

寺島さんのお兄さんに書いていただいた「生い立ち」には、和光さんの生家についてあまり書かれていませんので、寺島さんのご兄弟が「孫たちへのメッセージ」として編集された「藤の花」という冊子に従って、生家について簡単にご紹介します。

「藤の花」によると、寺島家には、290年くらい前からの先祖に関する記録が残っていて、江戸時代には農民でありながら苗字帯刀を許され、代々、村人たちの人望もあったということです。戦後の農地改革が実施される前までは、福井県では有数の大地主でありましたが、反面、熱心な自作農でもありました。そのため、和光さんご兄弟は、戦前に誕生した人間としては、比較的恵まれた家庭で育てられたと言えましょう。

父君は農民の地位向上に一生をささげられた人でした。地域の農業協同組合の経営では、

たびたび全国的な表彰を受けるなどの功績を挙げ、戦後は長いあいだ福井県の農業協同組合連合会の会長などを務められました。

また母君は、その父親（和光さんにとっては母方の祖父）が国会議員だったこともあり、大野市ではよく知られた家の出身です。母君は、自ら田畑に出て働きながら 9 人の子供を育てあげました。

ご兄弟はみな地元の旧制中学校、新制高校などでは、優秀な生徒でした。長兄は、戦前に稲の品種改良（雪国での水稻の 2 毛作の実験などを実施）や土地改良（湿地を水田に改造する）などに熱心取り組まれたということです。残念なことに、召集を受けて出征し、中国の戦場で亡くられました。次兄は、戦争から帰って、亡くなった長兄に代わって農家を継がれましたが、乞われて大野市長となり、約 12 年間市長を務めています。この方も市長現役のまま 56 歳で病没されました。

現在、和光さんのご兄弟は 87 歳を筆頭に 5 人が健在です。その意味では、和光さんにはまだまだ長い人生があったはずだと惜しまれます。



和光の生家、この門から荒島岳が正面に見えます

生物部での活動

自然を深く見る

寺島 和光

医学部進学課程 2年

昨年の春以来の部報ができあがった。昭和 34 年度は、残念ながら研究活動はあまりおこなわなかった。そのかわり、伊豆や美ヶ原へ、あるいは知床半島へと我々は、野外での活動を大いに楽しんだ。そして野外は、研究室と同様に自然を探ろうとする者のために、とても必要な場である。「花の真の美しさを知っているのは植物学者である」と言われる面は真理だと思う。

野や山を歩いていて、「ああ きれいだな」というだけでは、ちょっと淋しい気がしないだろうか。あの花はなんという名前で、いつごろ、どこで、多くの花が咲くのだろう。こういう類のことは、生物を専攻する人にとって最も初歩的な、欠くべからざる知識であり、そのほかの人にとっても必要である。些細なことかもしれないが、知っているのと、知らないのでは、生物への理解がずっと違うし、第一知っていれば野山を歩いても、ほかでは得られない大きな楽しみがあるというものである。特に現代のように机の上での研究が多くなった時においてはなおさらであろう。

生物部は、生物科の支部ではないのだし、文科、商学部、医学部の学生が入り混じっているのだから、このような野や山を歩き、名前を知り、その生態を知ることは結構意義があると思う。なお部報に載っていないが、夏休みに千葉、星野、寒河江君らは、ショウジョウバエの実験を行った。10 月には、役員も改選され、11 月に花火工場爆発の被害を受けた生物部の部室も元に戻った。大学祭も、まじかにせまっている。皆が努力して楽しい生物部にしようではありませんか。 (生物部・部報、8号、1960)



大学祭・生物部展示場風景



大学祭の生物部展示の前で
左：寺島和光（医学部1年）、右：大野正夫（生物学科2年）



大学祭終了後の卒業生交えた生物部懇親会。
前列右端：寺島和光、2列右端：飯島春雄

寺島和光さんとトリキチ

飯島 春雄

生物学科昭和 38 年卒業

寺島和光さんは、医学部医進課程 1 年生から生物部に所属され、生物部活動を熱心にされた。医学部の同級生には安達徳彦さん、千葉康洋さん、有田慎二さんや里見佳昭さんなど多く生物部にいた時であった。寺島さんは、生物部が企画した野や山を歩く生物観察会に参加した。2 年の時には生物部員で生物学科の加藤賢三さん、蒔田徳太郎さん、会沢勝夫さん、大野正夫さん等とともに、横浜市立大学探査会と山岳部の合同の知床半島調査に参加した。

私は生物学科で 1 年後輩であったが、部員には生物科同級生の星野郁子、横山宣夫、松橋隆司、小平晋二、岡本剛、文科では 2 年の島村知佐さん、1 年の寒河江京子さんがおり、部室がにぎやかな時代であった。

寺島さんから「トリキチ（鳥気違）誕生—生態映画製作者の回想」という本を借りて読んだ記憶を鮮明に覚えていて、この機会に古本をみつけ購入して 50 年ぶりに懐かしく読み返した。南洋に派遣された小隊長（川田潤）が野外演習と称して兵隊総動員で野鳥観察に出かけた。戦争で出兵した部隊が帰国後、のちに野鳥の会会員となるトリキチが誕生した、というような内容である。たぶん寺島さんの愛読書で、いろいろの学友に貸したのでしょう。医学部の部員は、それでなくても大変な内容の講義をこなしながら、いろいろの分野の趣味をこなせる余裕のある学生が多かったような気がする。

その頃から、彼は鳥に興味を持っていたのかもしれない。生物部の活動を通して、彼の自然に対する考えが、かたまってきたことが、生物部・部報の文章から伺える。



川田潤：「トリキチ誕生」の表紙

知床半島学術調査（1959 年）

北海道知床半島の夏季初縦走は羅臼より半島突端までをなすとげ、同時に同半島における動植物の調査、ポロモイ台地池沼の陸水学的調査、番屋を中心とした同半島の人文地理学的調査を行なった。

調査隊編成

隊長：福島 博 文理学部助教授、探査会
副隊長：大野迪郎 白い小屋、山岳部 OB
隊員：会沢勝夫 理科 2 年、探査会（生物部）
阿川良次 商学部 1 年、山岳部
浅見英紀 商学部 1 年、山岳部
石下裕子 文理学部 4 年、探査会
一戸正憲 東京都水道局 探査会（生物学科卒）
伊藤 宏 商学部 1 年 山岳部
伊吹明郎 文科 2 年 山岳部
入倉基一 文科 1 年 山岳部
大野 榎 白い小屋
大野正夫 理科 1 年 探査会（生物部）
加藤賢三 理科 2 年 探査会（生物部）
河野由夫 市大図書館 探査会
小池 敦 商学部 2 年 山岳部
児島端夫 市大医学部助手 医学部山岳部 OB
佐竹慶介 医学部 3 年 医学部山岳部
竹端節次 文科 3 年 山岳部
寺島和光 医進 2 年 探査会（生物部）
中林茂夫 文科 3 年 探査会
中村英之 商学部 1 年 山岳部
藤沢伸司 山岳部 OB
蒔田徳太郎 理科 2 年 探査会（生物部）
丸山 晃 市大研究生 探査会
宮崎博文 商学部 4 年 山岳部
森下市朗 商学部 2 年 山岳部

山岡貞夫 医進 2 年 探査会
山形裕昭 市大医学部インターン、医学部山岳部 OB
山岸俊彦 医学部 3 年 医学部山岳部
山田 勇 文科 4 年 山岳部
若林稜子 文科 3 年 探査会

特別参加隊員

高橋秀男 大町山岳博物館
本多勝一 朝日新聞社 北海道支社
松下 昭 フジテレビ

知床半島調査紀行

寺島 和光
医学部進学課程 2 年

横浜市立大学探査会では、昨年三宅島の湖沼調査を行なったが、今年度は知床半島の調査を行なった。それに私も参加したわけである。生物部・部員からは、ほかに生物学科の 2 年加藤賢三、会沢勝夫、蒔田徳太郎、1 年大野正夫の諸君が加わった。



知床半島調査地域図 (寺島和光作図)

知床半島は北海道の東北端に位置し、その長さは約 60 km で、そのなかに北から知床岳、硫黄山、羅臼岳（1,661m）、遺音別岳、海別岳の諸火山がそびえていて、特に西海岸は絶壁が多く、ひとが近づくのを拒んでいる。冬季には雪と風のため陸の交通はとだえ、それを取りまくオホーツク海は、氷が張って海からも近づくことができなくなり、“陸の孤島”と化す。それだけ私のもつ期待も大きかった。調査は生物学的なものを重点においたが、そのなかでも下等植物が中心となった。

日時は昭和 34 年 7 月 19 日から 7 月 30 日まで 12 日間、メンバーは探査会（生物部員を含む）16 名、山岳部（OB を含む）13 名、医学部 4 名、朝日新聞社 2 名（カメラマン 1 名、記者 1 名）の総計 35 名であった。そして A 隊～E 隊の 5 隊に分かれて調査を行なったが、私は B 隊に加わったので、一隊員としての “Terra Incognita” で、特に印象に残ったことをここに述べる。



知床半島突端の岬の台地上陸（本多勝一撮影）

（1）天候 場所が場所だけに、雨天がほとんどでないかと心配したが、1 日中雨が降ったのは、たった 1 日で残りの 11 日間はたいいて晴天であった。おかげで調査はずっと楽に行うことができた。正午の気温は大体 20℃～25℃で、まことに快適であった。

（2）衣食住 12 日間のテント暮らし。着替えはもっていかず、着のみ着のまま寝る時はそのままごそごそと寝袋にもぐり込み、朝は顔など、むろん洗わず昨日と同じ格好で行動し、約 2 週間過ごしたのだから、調査が終わって、いよいよ帰りに川湯温泉で初めてお湯につかった時は、アカの出ること出ることに！ シャツなどはアカと汗で何とも言いようのない臭いがしたものだ。食費は主食を入れて 1 日、120 円也で、おまけに昼食はフランスパンだから、大体どんなものか見当がつくと思うが、ともかくいつも飢えていた。パンは 5 日になるとカビが生えて、ひどいものは菌糸がパン全体に広がり普通ならとても食べたシロモノではないが、死ぬよりましだと思って、目をつぶって胃に詰め込んだ。病気になるらなかったのが不思議なくらいであった。

（3）地形 我々が歩いた半島の国後（クナシリ）島側は、石ころの多い狭い海岸が羅臼

から知床岬まで続き、海岸からすぐに約 1,000m の山がせまり、半島全体が山脈のようになっている。ウナキベツ川口上流で、山の一角が地震のために大きく崩壊して土砂が海岸まで流れてその谷の一部が、ところどころ、伏流になって流れている。またこの土砂崩れのために、堰きとめられて出来たいくつかの池があったが、青く静まりかえって、これらを密林のなかにみることは、何とも神秘的な気持がするものであった。ウナキベツの谷では、700m くらいまで傾斜は緩やかであるが、1,000m の稜線までは、かなり急で谷も狭くザイルをフィックスして登った。

(4) 植物 日本 の最北端にあるため、本州の高山しか見られないような高山植物がこの半島では、いたるところに見られた。なにしろ人間がめったに入りこまない所であるから、自然が文字通り自然である。採集した種子植物は、大町博物館の高橋さんが持ち帰り、来年の夏頃にわかる。今は詳しくはわからないが、少しばかりあげてみると、木本ではハイマツ、ダケカンバ、シラビソ、ミヤマハンノキ、クマザサ、草本ではチシマギキョウ、オオイタドリ、オオブキ、イワシモツケ、ハクサンチドリ、ホタルサイコ、イワブクロ、エゾノシシウド、キバナノカワラマツバ、チングルマ、コマクサ、トリカブト、ホソバクルマユリ、シオガマガキク、エゾカンゾウ、チシマワレモコウ、ツルコケモモ、ヒメミズニラ、リンネソウなど、なかなかにぎやかであった。

ハイマツが途切れているところでは、方々にこれらのお花畑が出現していた。こういうところでは、我々がいかにも、侵入者という気がした。知床岳の少し北に位置するボロモイ台地にある大小 5 つからなる知床池の周りは、かなり広い湿原が展開していて、モウセンゴケなどの湿地性の植物がびっしりと生えていて靴で踏みつけるのがもったいない気がした。

(5) 動物 採集したのは、ネズミ類 42 点、爬虫類・両生類 41 点、昆虫類 744 点、クモ類 42 点、マイマイ・ミミズ類 27 点であった。ネズミはエゾヤネズミがほとんどだそう。そのほか、見聞した動物は、リス類、キツネ類、イワツバメ、アマツバメ、ハシブトガラス、オジロワシ、エゾセンニウ、キビタキ、ウグイス、コマドリなどである。

(6) ヒグマ 我々が今度の調査で一番心配したものと言え、やはりヒグマである。ヒグマはしばしば人間や家畜を襲うと聞いているし、おまけに知床半島は、北海道全部の三分の一が集まっていると聞かされたので、呼子や鈴をヒグマよけにもっていった。そして歩きながら、盛んにピーピーと吹き鳴らしたものである。呼子のない者は、まるでアメリカインディアンのごとく、“ホーホー”などと奇声をあげたが、知らない者がみたら吹き出したに違いない。しかし、当人達は真剣そのものだったのである。私は二度ばかり二人だけで山を降りたり登ったりしたことがあったが、一面笹の斜面をキスリングを背負って歩く時などは、妙な武者ぶるいがとまらなかったのを覚えている。しかも、すぐ近くの谷には、大きなヒグマの糞がいくつもあり、池畔の砂地には足跡が点々とついていたのだから、決して笑えない。呼子、鈴と奇声をあげた効果か、とうとう知床では、“おやじ (ヒグマ)”にはお目にかからなかった。帰りに北海道のいろいろな観光地で生きたヒグマを見、北海

道大学の博物館には、ひとを食って、ついに射殺された物凄い大きなヒグマの標本があったが、これらをあらかじめ見てから、知床に行ったとしたら、とても怖く歩けなかったと思う。なお知床半島からはソ連領の国後島がすぐ近くに見えるが、ここのヒグマは北海道のものより、しばしば、ひとを襲うと聞いた。別にソ連領だからというわけでもなからうが。

(7) ハイマツ 今度の調査の別の大きい障害は、ハイマツであった。800mくらいから上はほとんどハイマツの密林である。それが半島をほとんどびっしりと覆っている。太さ20cm、長さ3mくらいのが文字通り這っていてそれでも身の丈以上の高さがあり、ザックを背おって、この中を歩くのはまず不可能であった。B隊はあらかじめハイマツを切り開いて道を作ったが、C隊はそんな余裕がなかったので、知床池であった時は、C隊一行は、服がぼろぼろになっていた。稜線上から眺めると山の斜面は、まるで灌木の一本もない広々とした草原のように見えるが、どうしてどうして、実は頑固として人を拒むハイマツ林である。知床池の近くで、近道をしようと横着気を起こして、ハイマツの中に入ったら、道がわからなくなり、行けども、行けども林から抜けられず、ほどほど困ったことがあった。知床の帰りに大雪山に登ったが、そのハイマツは小さく、知床半島のハイマツはずっと太くて高い林のように思われた。ちなみにハイマツは *Pinus pumila* Regel で5葉である。

(8) 蚊(カ) 蚊も我々を終始苦しめ通しであった。蚊は北方の地には多いということをかねがね聞いていたが、今回行ってみて驚いた。物凄い数の蚊(種類はわからないが)が、手や顔に群がる。休んでいる時は、防虫網をかぶり、手袋でどうにか防げるが荷を背負って歩いている時はどうにもならない。こういう時に、蚊よけの薬は有難かった。ここでは、朝から夜まで蚊の群がり絶えない。朝、テントからでると蚊が待ち構えている。食事の時、ボールのなかに蚊が見つかる。汚い話で失礼だが、キジを打つ時はうちわを持っていったものだ。山へ入ると蚊が多いが、いったん、海岸にでると、蚊がいなくなるのはどういうわけであろうか。かわりにブヨなどがいるのは、どういうわけであろうか。このような原始林にいる蚊は、おそらく何十代、何百代にわたって人間や動物の生血など吸わず、生き続けたはずであるが、それが人間の姿(くさい臭い、炭酸ガス!)をみるや否や襲いかかって来るのも面白い。もう少しさらに何千年代にもわたって動物の血を全然吸わなかったら、ついには動物の血を吸えない蚊が出現するだろうか。

(9) コンブ 知床半島の東側はコンブの宝庫で、7月末から8月中ごろまでは、海岸はコンブ採りの漁師で急ににぎやかになる。半島全部で700~1,000戸の番屋(コンブ採り漁師の寝起き場・作業・倉庫)があり、この期間5,000石のコンブを採る。1石6万円とか秋のイカ漁業とともに大きな収入である。コンブは小船の上から箱眼鏡で水中をのぞきながら、カギに巻き付けて採るのだが、コンブは幅1尺、長さ10尺もあるのもあるという。海岸にはこんなコンブの切れ端(といっても大きい)が落ちていたので、ともかく飢えていた我々はよく拾って食べた。生のやつは歯ざわりがよく適当な塩気がついてなかなかのいかす味であった。コンブが良く繁殖するように海中に石を投げたりしていろいろ保護を

企てているが年ごとに少なくなるので、遂にはソ連領国後島の近くへ密漁に行く者もいるが、国後島はまだ半島沿岸よりずっと豊富だそうで、しばしばソ連監視船に捕まるにもかかわらず、なかなか後を絶たないと番屋のひとが語ってくれた。

最後に知床半島で、12日間暮らしてみても思ったことは、自然がそのままの形でのこされているということである。羅臼岳付近は、山道がついていたり温泉があつたりしてかなり開けているが、それ以北になると人間の手は全く加えられていない。太古のままである。原始林である。冬になれば海岸はアザラシやオットセイなどの海獣、それに珍奇なケイマフリやエトピリカなどの海鳥の楽園となる。こんなところは広い北海道といえどもほかにあるまい。確かに北海道内を歩いてみると蒼々たる密林ばかりである。しかしこれらはほとんど人間の手が入り、伐採され植林されたもので自然林は非常に少ないと聞いた。

ところが最近の観光ブームの波にのって知床半島もどんどん開発が進んでいる。西側はウトロまで、東側はモセカルベツまで、バスが通っている。この調子でゆけば2~3年後には、おそらく岬まで人は陸路を歩かずに行けるようになるであろう。

次に山道がつけば頂上には、休憩所なるものができて、木々はどんどん切られ、山はキャラメルやチュウインガムの紙で汚れ、人がふえたおかげで、高山植物は乱獲され、動物たちもだんだん少なくなり北から渡ってくる鳥や海獣も減っていく。こういうことは間違いないことである。しかし、こうなってよいことだろうか。断じてそうあるべきではない。日本でただ一つの“秘境”がなくなることは何とも悲しいし、単に感傷的な理由からだけでなく、現在では残り少なくなった珍しい動植物を保護するために、是非観光開発をしてもらいたくないと思う。最近のように科学が発達してくると、人々は余計、自然、それも太古のままの自然にあこがれるのは、当然であろう。そんな人のためにここをそのままにしておきたいものだ。たった60kmくらいの小さな半島を開発してみたところでたいして儲けにもならないであろうから。

皆さんもぜひ、一度知床半島に行かれるとよい。それもあまり開発が進まないうちに。山自身は、低いのだからさほど困難ではないと思う。私も金と暇があつたら、何回も訪れたい。知床半島を征服するというのでなく、そこの動植物のありのままの生活をみせて戴くという謙虚な気持ちである。（横浜市立大学 生物部・部報、8巻1号、1960年）

付記：寺島さんからの便りによると、後日、百名山踏破のために、再度、羅臼岳に登頂している。その時に見た寂しかった羅臼の町はきれいになり、調査隊基地としていたお寺は、記憶では薄暗い境内であったが、明るい境内になっており、思い出と違っていたと書かれていた。

知床半島縦走記

福島 博

調査隊隊長横浜市立大学助教授

知床半島の学術調査と縦走

横浜市立大学に探査会という会が、昨年（1958年）結成された。この会は未知の自然や文化を調査しようという会で、今年には本学の山岳部と合同調査を行うことになり知床半島が、選ばれた。知床半島の植物は、古くは原忠平氏（昭和5年）や、館脇操博士（昭和29年）の報告があってよく調査されていて、海岸線には千島に近い植物があって森林帯には案外暖かい地方のものが点在し、山の奥にゆくとまた千島と同じものがあるというようなことがわかっているが、海岸線以外は未調査部分がかかなりあることと、コケ類、地衣類、藻類などの下等植物はほとんど手がつけられていないので、特に下等植物の調査をしたい。動物では犬飼哲夫博士のオホーツク海岸の大型動物の調査が一番大きいもので、陸上の動物の調査はあまり進んでいないので、動物もできるだけ採集しようという目的でこの調査隊が結成された。

調査隊のもう一つの大きな目的は、半島の縦走であった。冬の縦走は昭和28年に京都大学山岳部が成功し、また昭和32年には北海道大学学芸学部が成功したのであるが、夏の縦走は早稲田大学、日本大学、高千穂大学、庶路山岳会などで何回か試みられたが、いずれも成功していない。

隊員は、7月18日午後ベースハウスの羅臼の誠諦寺に勢揃いした。羅臼山岳会会長西井誠誘氏が住職としておられる寺である。総員35名が5つの隊に分かれた。一つは知床半島の先端より知床池畔にくる隊（C隊）、一つはウナキベツ川を逆行し、知床池畔でC隊と合流し知床岳付近通ってルサ乗越に達してルサ川を下る隊（B隊）、一つは羅臼から羅臼岳、硫黄山を縦走して、ルサ乗越に達しルサ川を下る隊（A隊）、一つは羅臼から羅臼岳を通り岩尾別に出て大地にある地沼を調査してさらに半島の先端から根室海峡側の海岸線を調査採集する隊（D隊）であった。それから、選抜された少人数で、A、B、C隊が付けた尾根の目印を頼り、半島先端部より尾根を縦走する（E）隊が編成された。A、B、Cの隊は以下に記すような努力をしながらいずれも目的を達成した。

知床岬より知床半島縦走

チャーターした15トンの海運丸は、19日朝6時半小雨の羅臼港を出発して中番屋でウナキベツ川を逆行するB隊11名をおろし、10時半頃文吉湾にC隊5名と私とカメラマン、記者の本多勝一氏の8名が降りた。羅臼港から中番屋まで、霧で半島の様子はほとんどわからなかったが、知床岬に近づくにつれて霧が薄くなって半島の様子がわかるようになってきた。脊梁山脈から緑の斜面がまるやかに海岸にせまり、海岸には山の斜面にへばりつ

くように番屋が点々と並んでいる。想像していたより番屋の数が多いのに驚いた。知床岬は、海蝕面が隆起した段丘なっていて青々と草が生えている。海から見ると芝生のように、いともロマンチックに見える。船は大きく廻って静かな湾に横付けになった。湾の奥には番屋が一軒廃屋のように静かに立っていた。海の色は全く青く碧玉を溶かしたとは、このような場合に使う言葉だろう。海藻が海底の岩石上に緑に褐色に所せましと生え茂っている。

海岸の岸壁に白い花卉のシコタンハコベの可憐な花がむらがって咲いていた。大町博物館の種子植物担当の高橋隊員は、もう目の色をかえて採集し始めた。台地の上はオニカサモチ、アザミ、ヨブスマソウ、ヤナギラン、オニシモツケなどが私達の背丈に達するくらい、すき間もないくらい茂って白に黄色にピンク色にと様々な色に咲きみだれていた。緑の芝生のようにいともロマンチックにみえた草原は、憎らしいくらいに伸びきった草原だったのだ。この草をかきわけて大きなキスリングを背負って今日のキャンプ地を求めて歩いた。

知床岬に近いアブラコ湾に湧水があったのでここをキャンプ地に決めたが、結局田河氏の番屋に全員泊めてもらった。

7月19日午後と20日、C隊員は偵察を兼ねて道開きと物資のデポに行った。私は知床岬一帯台地の採集をして歩いた。アブラコ湾付近の台地の一部にはガンコウランが緑の絨毯のように生い茂り、ところどころにシロヤワレモコウが数10cmにひよろひよろと伸び、頂きに白い花をつけ斜面には、エゾキスグがたくさん咲いていて夕日に映えた黄色い花、特に逆光で見た美しい姿は今も眼底にありありと思い出せる。チシマセンブリの紫の花も大変きれいで夢中で何枚もシャッターを切ったくらいであった。台地上の礫地には、10cmほどに伸びて紫色がかかった線香花火のような花をつけているチシマラッキョウがペロペロと疎生していた。こんな僻地の陰で風雪に痛めつけられてあまり伸びないのか、10cmくらいの丈の低いハマナスの花が情熱の花さながらの目に痛いくらいの赤紫色の美しい花をつけていた。ハマナスの花は随分方々で見たがこんな美しい色を見たのは初めてだ。ツリガネニンジン可憐な花、ハクサンチドリのかわいい花、オニシモツケの雄大な群落等々とあげていくと、きりが無い。この辺一帯は高山植物の宝庫なのだ。さまざまな高山植物が海岸近くに咲き乱れているさまはさすがに北の国だ。

知床岬の台地の上で眺めると丸味をおびた楔状の石が海の中に浮かんでいる。これが有名な風船岩だ。この辺は波が荒く小舟はよほど注意をしなければならないそうだ。右の方に目を転ざると真新しい番屋が数軒、のきを連ねている。これらの番屋には終戦まで、国後島や樺太で漁業に従事していた人が多いそうだ。さらに向こうには海岸に突っ立ったローソク岩がわずかに見え、海を隔てた国後島が横たわっている。中腹に雲をたなびかせたチャチャヌプリのすばらしい姿が私達の登山心をかきたてるが、今は登ることができない外国の山なのだ。

台地の草をながめているとほのぼのと心が暖まり時間の経つのさえ忘れてしまうが、知

床岬の海岸の眺めは天気がこんなによい穏やかな日なのに何となくうら寂しい。どんより曇った日、雨の日、海のシケタ日の眺めはどんなだろう。

ローソク岩から根室海峡側を約2km、半島の元の方へ行くと海岸に赤っぽい岩が立っている。これが赤岩である。羅臼港からここまで毎日定期船が通っている。ローソク岩からこの赤岩までが知床で番屋が一番密集している所である。この付近の海にコンブが一番たくさん生えているからであろう。船から海底を眺めると褐色の色の濃いのやら淡いのやら、まっすぐなものから、ちぢんだものなど不気味なくらい一面にコンブが生えている。

このコンブは羅臼コンブと称して上等のコンブとして大阪方面に大量に送り出されているそうだ。

20日夕方、C 隊員達は顔をはらしてほうほうのていで、もどってきた。通路を切り開いている時、あやまって蜂の巣にふれたらしい。猛烈な蜂の攻撃に会って全員逃げたが間に合わず、5人中3人がさされてしまった。

21日の朝は飯ごうやコップでできるだけご飯を炊き、植物採集用の胴乱まで水を詰め込んだ。生物採集用の大型ポリエチレンの袋を二重にして水を入れこれらを胴乱に入れたのだ。水入りのポリエチレンの袋は、さらにキスリングのサイドポケットにまで入れて18リットルあまりの水をもって、いよいよ縦走に出発した。

赤紫色に美しく咲いているヤナギランの群落、シコタンザサの群落を通過して、トドマツ、イチイ、イタヤカエデ、ミズナラ、センノキ、ダケカンバなどが、なお暗いまで生い茂った林へ入った。この林には、ツルアジサイ、ツタウルシなどの蔓植物が多く、下草としてはシラネウラボ、ハンゴンソウ、エゾウバユリ、ツバメオモト、マイヅルソウ、オオバタケシマランなどがみられた。特にマイヅルソウは内地でみるよりはるかに大きく雄大であった。

苦心して運びあげた水も3日目にはなくなってきたので、アウルルイ川をめぐらせたかったら約40分くらいで、この水の補給が案外簡単に出来たことが、今回の縦走の成功に大きい役割を果たしているはずである。その後も水の不足と戦いながらハイマツその他の藪こぎを来る日も来る日も続けた。一番苦しかったのは、水不足のようで全員が水の夢をみたそうだ。A 隊も同じであった。ある時はツユをコップで集めたこともあり、雨の折は、ビニールの布などで雨水を集めたし、またある時は、雨だと喜んでテントを出てみたら、月がこうこうと照っていて、テントに落ちた枯葉の音と間違えたこともあったそうだ。

中番屋から知床池畔、知床乗越へのB 隊

観音岩と称する岩礁が海中に突っ立っている所をちょっと先端にゆくと、狭い入江になった浜があって、4、5軒の番屋がひっそりと立っている。この入江の隅に流れているウナキベツ川を私達は逆行した。

このウナキベツ川は終戦直後の頃、広大な山崩れがあつて地形が一変したと羅臼村の人が教えてくれたが、なるほど海岸まで、層石が押しよせており、この沢はゴロゴロしてい

て所々に大きな石が転がっており、何カ所かは堰止められて池ができ、池の中に枯れた立木が何本も立っている池さえあった。ヒグマと命名した付近には大崩壊地があった。磐梯山を檜原湖側から眺めた景観のように山の一侧が崩壊してしまっているのだ。爆裂火山のように見えるが、素人の私にはどちらとも判断できないのが残念だ。

ウナキベツ川の川口付近には、細いミヤマハンノキ林があって、右に左に何回か川を横切って登った。川辺にはオオブキの群落が発達していた。いつのまにかミヤマハンノキの林がなくなり、所々に生えているだけである。なだらかな斜面と急な斜面が入り乱れた複雑な地形の斜面をあえぎながら約3時間登ると崩壊地点を右上に眺める地点で川辺にちょっとした平らなキャンプ地に最適な地点があった。ここを横浜平と名づけて中間テントを3張はった。

7月20日、大野副隊長と山田B隊リーダーが、さらに登高路の偵察に行き大崩壊地の右側を登ったが、これよりもウナキベツ沢をつめる方が良いという結論に達した。

横浜平から先はしばらくの間、谷は破壊された石ばかりからなりたっている。この石は貝殻状に割れたもので、ナイフの刃のように尖っているので、歩きづらいことおびたしい。このナイフの刃のような石の上を重い荷をボッカして何回も登り降りしたので、新品の登山靴さえ、いたむ始末。満足な靴で山を下ったものがない状態であった。このような道を一時間くらいも登ると丸味をおびた岩石の普通の川床にでる。凸凹の激しいきゅうな沢道をさらに右へ左へと登ってゆく。高度はドンドン増してゆく。最後の登りは大変であった。ザイルを3本、200mにわたってフィックスした急な沢を登りつめると知床乗越であった。眼下に根室海峡が横たわり、そのむこうに細長い国後島が指呼の間に青々と浮かんでいるのが見渡せる。心地よい風がたえずふきぬけている。横浜平の中間テントからここまで、ボッカすると7時間近くかかることがあった。この歩きづらい嫌な道を多い者は、6回もボッカした者がいた。隊員達は不平一つ言わずよく働いたものだ。

知床乗越、ポロモイ台地間は数人の隊員が4日かかりで切り開いた道をしばらく歩き、稜線に到達し、一息にポロモイ台地に降りるのだ。この辺のハイマツはよく伸びて背丈が高い。本州で私達がいつも見ているハイマツと同じ種でありながら、よくもこんなに成長したものと驚かされた。幹の直径が20cm、枝は長さが8mから10mにおよび、背丈は3mに達すると考えられるくらいの大きいものによく出会う。これを切り開いていなかったら、大きい重い荷を背負っての歩行はさぞ大変だったろう。稜線のハイマツは丈が低くたいたことがないが、稜線をはずれた所には、このような巨大なのがあり、このハイマツこぎには多大の時間とエネルギーを消耗させられる。早稲田大学山岳部員の記録にもハイマツこぎの苦しさをこまごまと記録してある。このハイマツ林こそが知床の縦走をはばんできた大きな要素となっていたのだ。

知床乗越から約1時間でポロモイ台地に達することができる。最新版の5万分の1の地図ではヒョウタン状の池（知床池）があることになっているが、実は大きい池が3個あって、いわゆる「神のたんぼぼ」状の小さい池は東西隅に多数散在している。知床池の周縁

にはミズゴケが生育していてミズゴケ湿原を形成し、この周囲にハイマツが侵入してきている。湿原にはキレバハクサンボウフウや、チシマワレモコウ、エゾキスゲ、タチボウシ、ハクサンチドリ、コバノイチャクソウ、ニッコウシャクナゲ、ツルコケモモなどが咲き乱れていた。静寂そのもので夕日の入る知床岳をバックに眺めた時の美しさは忘れることができない。

今まで、誰かここを訪れた人がいたら水の少ない知床のことだから池畔のどこかで炊事をしたりして焚き火をしているに違いないと周囲を念入りに調べたがそのような形跡はない。今まで誰ひとりとしてこの神秘的な池畔におりたった者はいないらしい。この美しい景色を眺めたのは、我々が最初なのだと思うと今までの苦労も一度にふっ飛んでしまった。知床池にプランクトンネットを入れるとケンミジンコがたくさん入ってきた。赤い色をしている。この赤い色素はカロチノイドで太陽熱を吸収するのに役立っているらしい。

湿原中の小池には、ミズゴケ湿原に多いツツミモ類をおびただしく見出すことができた。

夕方、発煙筒の音を耳にし、煙を認めることができた。C 隊はすぐ近くに来ているらしい。翌 26 日午前 4 時に、数人の者がテルモスに温かい紅茶を入れて昨日の煙の見える方向に向かった。8 時頃、縦走隊の C 隊、5 人は元気で知床池畔に着いた。高橋隊員はウルシにかぶれて顔がはれて、カサカサになっていた。シャツはボロボロだ。破れていないところの方が、少ないくらい。如何に苦労したかがこの姿を見ただけで、想像することができた。19 日に知床岬に上陸してからポロモイ台地まで、実に 7 日間かかっている。1 日の歩行距離は 2 km だ。如何にひどい藪こぎだったかがわかる。

知床池畔からルサ乗越まで縦走

C 隊 2 名、B 隊 2 名と本多勝一記者を加えた E 隊、5 名が、A 隊の待つルサ乗越に向かって、27 日、未明に出発した。今までの縦走記録で縦走を中断したのは、重装備での行動であったので、知床程度の夏山ではどの程度やれるかというテストケースとして、極端に軽装にした。テントを持たず、ツェルトと食料と採集用具だけ、平均 10kg をもって 1 日でルサ川上流まで、道のない尾根を突っ走る予定であった。

縦走隊は、風が強くなり時々雨が降り、霧が出るという悪い天気になって心配したが、予定通りルサ川上流に達しそこでビバークした。

羅臼よりルサ川乗越へ A 隊目的地到達

7 月 19 日、羅臼村から出発した A 隊は、羅臼川沿いに羅臼岳へ向かった。このコースは、羅臼岳までは、立派な山道があり、さらに硫黄岳までは踏み跡がある。残雪が豊富で、所々にお花畑があり、羅臼岳、硫黄山の頂上には岩場もあって、高山に来たことを十分に味わえるので知床の山に行ってきたという人には、羅臼岳、硫黄山まで足を伸ばした人も多い。

A 隊も荷物が大変多かったので、サシルイ岳付近にテント 3 張りを置いて、ビニールの布をもって縦走したが、やはり水不足に大変悩まされて、羅臼のベースハウス（誠諦寺）を

出てから 10 日目の 27 日に目的地のルサ川乗越に達し、3 隊による知床半島夏期縦走は、たいした事故もなく成功した。多くの山岳会が涙をのんだ縦走は、荷物を持ちハイマツと水不足によることが原因であった。われわれの調査は縦走の成功とともに、生物標本を 3,500 点あまりを持ち帰って、専門家に配分して研究をしてもらっている。

観光地としての知床半島

私達が知床へ行くのに一番心配したのは、蚊、ブヨなどの害虫とヒグマであった。文献によると先輩の多くが蚊に悩まされている。知床へ来てみるとなるほどものすごい蚊であった。海岸には少ないが、山に入ると大変多い。味噌汁を椀につけると、たちまち数匹が飛び込む始末で、シャツの上からでも平気で刺すのには驚いた。何もしないでいると、顔はお岩さんのように、たちまち膨れ上がってしまう。私達は蚊の対策として、防虫ズキンをつくり防虫剤として塗り薬、液体 BHC を持参した。露出部に塗り薬を塗り、シャツには液体 BHC を噴霧器で吹き付けた。私達の防虫対策はいずれも役立ったが、どのいずれも充分とは言えないくらい蚊が多いのだ。誰かが知床から、この蚊を追放しない限り、観光地として失格だといったくらいだ。

ヒグマは北海道の全体の三分の一が知床半島にいていられると言われているが知床のヒグマは大変おとなしいそうだ。ほとんど害はないと言われているが、各人鈴や呼子や、豆腐屋のラッパを鳴らして歩いたので、隊員でヒグマの姿を見た者はいなかった。

私の滞在中は、定期便で赤岩で降りて船の停泊の合間に 30 分くらいの知床岬へ見物に行く客が毎日数人いた。ほとんどが内地からの観光客であった。この定期便は朝 6 時には、羅臼港を出るので、前日に羅臼に来て泊まっている必要がある。また定期便が羅臼にもどったら最終バスがでてしまった後なので、また泊まらなければならないというように知床岬は交通の面から観光地としての資格を失っているように考えられるのに、毎日何人かが知床岬へ、また羅臼岳へと観光客が入っている。今後どんどん増えてくるのではなかろうか。そして、今の荷物定期便がスマートな観光船に代わって知床岬にバンガローが、はては安っぽい観光施設が立ち並ぶようになるかもしれない。

知床のよさは「景観の雄大さ」と「原始性」にあると思う。「景観の雄大さ」は船で味わうことができる。知床岬の眺めも雄大だが岩宇別から文吉湾あたりまでの岸壁の雄大さには全く圧倒されてしまう。岸壁の凸凹が朝や夕方には、斜めの光でくっきり浮かび、洞窟が黒々と不気味に並び、海鳥の糞が白くアクセントをつけており、50m も 100m もの岸壁の上から滝が静かにおちている。この岸壁の上に緑のカーペットがおおいかぶさっているのだ。このような雄大な景観を眺められるのは、狭い島国日本にもこんなところに残っていたのかと驚いてしまうだろう。それくらい今の日本では観光開発が着々と進んで、いや進み過ぎているのだ。観光開発といえばやたらに道路をつけ、山にはロープウェイをつけ、センスのないバンガローを場所を考えずに建てるなど、景観を壊すことが観光開発と考えているのではないかと思うくらいだ。なるほど老人に喜ばれる観光開発もよいが、そこに

行けば原始そのものというような観光地があつてよいだろう。大自然の景観や動物や植物の自然の姿を見たいものは、私達のように、藪こぎをすればよいのだ。

知床はこのように開発はしないでそっとしておいてほしいものだ。日本には数少ない「原始の姿」の観光地として景観は人の力で変えることは比較的容易だが、元の姿に変えることは大変難しい。

知床のもうひとつの良さの「原始性」は、船の上からも味わえることができるが、海岸と山を歩いてみてひしひしと味わうことができる。番屋の人々の人情も厚い。この原始性はきわめて簡単に破壊されてしまう。そして一度破壊されたら絶対にもとへはもどらないのだ。文化はこの原始性をどんどん破壊してゆく。原始性を保つのにむしろ保護をしなければならぬくらいだ。

知床の山には道路もいない。ヒュッテもいない。バンガローなど、もつてのほかだ。もし、ヒュッテを建てるのなら、景観を壊さないようなところに建ててほしい。

開発庁では日高、積丹、知床を特殊地帯として知床は今年から3年計画で徹底的に調査することになっているそうだ。なるべくそっとしておいてほしいが、決まったことは致し方ない。知床半島の基部だけにしてほしいものだ。知床で一番有望なのは硫黄だ。以前硫黄を採掘したことがあるが、たとえ有望な鉱床が発見されてもなるべく採掘しないでほしい。館脇教授は「鉱物資源がなくなり、これが最後だという時に掘ったらいいと思う。日本は資源が少ないのだから、掘っていけないというのではない」とおっしゃたが、私も同感である。採掘によって景観が害されるだけでなく鉱山排水が海に流れ込む。知床のように流域の短いところでは水産資源に大きな鉱害を及ぼすようになる可能性も大きい。

繰り返して記しておきたい。知床はこのままそっとしておきたい。いやこのままの姿を長く保存するための対策をねるべきであろう。

今度の調査を実施するにあたって後援して下さった朝日新聞北海道支社、また援助を下さった半井横浜市長をはじめ多くの方々に末文ながら御礼申し上げます。

—「僻地の旅」修道者・1960、転載—

付記：知床半島縦走に同行した本多勝一氏は、朝日新聞・北海道版に同行記を連載したが、その後、北海道支社に勤務していた時の記事をまとめて、「北海道探検記」（ずさわ書店1979、集英社文庫本1981）として単行本として刊行した。現在でもアマゾンで購入できる。この記事の末尾に「北海道探検記」から写真を引用させていただいた。

なお、知床半島の夏季縦走に参加した熊谷樞（大野樞）さんのエッセイ、山の画文集「晴れのち曇り 曇りのち晴れ」、（平凡社ライブラリー310頁、2001年）のなかで、“知床のハイマツこぎ”の題で掲載されている。



写真説明

上左：防蚊帽子をかぶってテント設営 上右：ウナキベツ谷でテント設営

下左：ポロモイ台地の池沼

下右：ハイマツ林の中を歩いてやぶけた服

(本多勝一撮影：「北海道探検記」より)



知床五湖より望む。右端に聳える羅臼岳より知床半島調査で縦走した硫黄山、ウナキベツ乗越、平坦なポロモイ台地などの峰が連なる。(石塚正雄 提供)

八方尾根雪上訓練

昭和35年(1960)1月13日から18日の期間、北アルプス、八方尾根で雪上訓練を行った。この訓練は天山山脈学術踏査プロジェクトのために、厳寒期の八方尾根で山岳部と探査会の合同の雪上訓練として、雪上露営、雪上登山技術(八方尾根登頂)、軽装備登頂訓練、気象観測技術、天測技術、測地技術などを実施した。

大野迪朗リーダー、山田勇・丸山晃サブリーダーで、伊東芦一(医学部本科1年)、寺島和光(医進2年)の探査会会員、森下市朗山岳部部員(商学部2年)らが参加した。



左より伊東芦一、寺島和光、森下市朗、山岳部部員

奥日光湖沼と雪上訓練調査

探査会学生部が、1959年10月に発足して初めての湖沼・雪山訓練であった。訓練は、1960年2月に行われた。湖沼調査は奥湯本温泉の湯の湖で実施した。

参加者は伊東芦一、寺島和光、横山宣雄、松橋隆司、大野正夫の5人で、湖沼調査に福島博助教授が3日間参加した。

湯ノ湖（ゆのこ）は栃木県日光市の西部にある湖。北東にある三岳火山の噴火によってつくられた堰止湖である。日光白根山からの水に加え、湖畔にある日光湯元温泉からの湯が流れ込んでいる。まだ、雪が一面にあり、厳しい寒さのなかで、ボートを借りて、プランクトン調査、測深、採水などの調査方法を福島先生が指導した。

湖沼調査訓練の後、湯ノ湖の背景にある白根山で登山訓練を行った。白根山の山頂に至る登山道は、雪がかなりあり湯元温泉から外山尾根・天狗平・前白根山を經由し雪上訓練をしながら登頂した。白根山は、関東以北の最高峰、2,578mで日本百名山のひとつである。

白根山から下山した夜は、食糧が枯渇して、小麦粉と調味料程度しかなく、皆でスイートとは、こんな味だったのかと、言いながら食べた。



荷が重そうだ。これまでで最大の重量だ。

左より、松橋隆司、大野正夫、横山宣雄、伊東芦一、寺島和光。



湖沼調査に向かう左より松橋隆司、寺島和光、大野正夫、横山宣雄



雪の湯ノ湖



湖沼調査で採水器を持つ寺島和光

五月の尾瀬訓練合宿

伊東芦一（蘆一）と寺島和光は、探査会・山岳部主催の中国天山山脈遠征計画に沿って 1960 年 1 月に山岳部と合同の八方尾根雪上訓練、福島博先生がリーダーの奥日光白根山雪上訓練・湖沼調査訓練には、伊東、寺島、横山宣夫、松橋隆司、大野正夫が参加した経験がある。

尾瀬訓練は、現役学生だけの初の雪上訓練・氷上徒歩訓練で、リーダー：伊東、サブリーダー：寺島、現地で伊東・松橋（サブ）隊と寺島・大野（サブ）隊に分かれて燧岳において、雪上訓練、尾瀬沼の地図の読み方・氷上徒歩訓練が行われた。

参加者は、伊東芦一（医学部 4 年）、寺島和光（医学部 3 年）、松橋隆司（生物科 4 年）、大野正夫（生物科 4 年）大貫紀男（地理科 3 年）木村努（生物科 2 年）、河合武臣（生物科 2 年）、宮崎捷二（生物科 2 年）、松本芳樹（商学部 1 年）、山口由則（商学部 1 年）、篠原道雄（商学部 1 年）、奥田耕造（商学部 1 年）、吉野（旧姓三橋）孝子（生物科 1 年）、白井浩子（生物科 1 年）、矢島孝昭（生物科 1 年）の 15 名であった。宮崎は、伊東・松橋隊の行動記録を担当した。

宮崎 捷二
生物学科 2 年

1962 年 5 月 2 日（水）22 時、上野駅集合。ホームで丸山さん、横山さんに見送られて、列車は動き出す。上野の空は曇り、ネオンの色がいやににじんで見える。空気はかなり湿っているようだ。

5 月 3 日（木）夜中の 2 時に沼田駅到着、かなり涼しい。大清水 6 時 35 分到着。初夏とは言え、山の空気は寒さを感じる。休憩所で朝飯を広げる。ここ大清水は、以前とほとんど変わっていない。初めて経験する雪山である。皆元気に出発する。雲の間に、かすかに陽が射しこむ。雪が木の間に見え始め、次第に大きく目につき出す。うぐいすの音が、遠くあるいは、近くに聞こえる。沢の音がアクセントを添える。茶色の湿った道は、白い縞模様入りの道となる。雪どけ水は、土をも溶かして我々の足を奪う。やがて我々の足跡は真っ白になり始める。一の瀬の吊り橋はゆれ、背のキスリングがそれに合わせる。雲量は 10 であるが薄日がさし、風力 3 位であろうか、小枝が揺れている。赤い布の目印は、我々を導きシラカンバ、ダケカンバ、ヒノキが単調さに趣を変える。いくつかのパーティーに抜かれる。三平峠を 9 時 55 分に通過。どこを向いても黒い土は見えない。峠から 5 分くらい歩いたのだろうか。尾瀬沼が見え始め、かなりの下り坂になる。背中の荷物に調子をあわせて足が埋まり、膝の下まで雪のなかにしずむ。一步一步、歩くのがもどかしい。

尾瀬沼は白く静かであった。長蔵小屋へ向かう途中、奥田が腿に痙攣を起こしたので、大貫、伊東が残って、寺島を先頭にほかの者が続いて進む。長蔵小屋着、10時30分。直ちに昼食をとる。風が冷たいので、夏季の休息小屋に入り寒さをしのぐ。小屋には木造船などがおいてあった。寒さが身にしみる。夏の尾瀬の清々しさと比べた時に、雪の尾瀬の厳しさが対照的である。長蔵小屋の東北部の低地に、冬用テントを2つ張り、我々の住処とした。エアーマットが不足しており、段ボールを持参したことは、良い発案であった。何しろ寒い。

5月4日（金）訓練第1日目である。今日の訓練は二隊に分かれて行う。テントを7時5分に出発。沼の上の氷上を沼岸沿いに歩く。薄日が射していたが次第に曇り、西方の山脈の上に黒い雲が漂っている。歩きながら夏の尾瀬の花の景色を想い浮かべる。風のせいか沼面の雪はうろこ状に波打っている。7時45分。寺島・大野隊は、治衛門沼方面の氷上徒歩訓練に出発。我々、伊東・松橋隊は、燧岳方面、雪上訓練と別れる。我々は燧岳の途中まで登り、ワカン、グリセード、滑落停止訓練を行う。ブレードが鎖骨をうつ。コーチャーの音が響く。汗をかきかき、一応の訓練を終えて下山する途中で、サルノコシカケという大きなキノコを発見。山口がぶら下がったが採取できず。11時35分、2隊は合流し行動が入れ替わって、寺島・大野隊が燧岳、雪上訓練に出発。我々は治右衛門沼へ向かうべく沼岸に沿って氷上を歩く。かなりの起伏がある雪の上を歩く。寺島隊の足跡を探したが、どこにも足跡がみつからなくなった。道を間違えたのだろうか。とにかく、地図と目測で目的地に向かった。沼地は雪が凍りついていた。13時に地図の上の目標地点に到達し、沼を離れて途中直径50cmあまりのサルノコシカケを採取し、帰路に着いた。沼尻小屋の一寸手前で山口が帽子の紛失に気付き、松橋と引き返す。二人を残してテントに向かう。沼は厚い氷が張っておりその上に雪が積もっている。その雪道を歩く。腹はすくし、雪は凍っており摩擦が少ないので大いに疲れる。燧岳に曇りが下がりはじめた。夕食が終わり、寝袋に入ったがテントに雨音がし、枕元まで聞こえる。

5月5日（土）朝方もまだ、雨がのこっていた。今日は晴れそうにもない天気である。午後になってもやまないので日程を一日遅らすことに決定した。午後2時になって陽が雪の上に輝き始めた。テントのすぐ近くの斜面に雪洞を掘ってみようとひとりで掘りはじめた。最初は面白半分であったが、調子が出てきたので、食当の合間にも食事を終えても掘った。テントの中の薄暗さに比べて、1本の懐中電灯でも極めて明るい。一種の不安と好奇心が混ざって面白い気分である。快晴の西空に宵の明星が見える。2等星くらいの明るさだ。だんだん暗さを増し、星の数も増えてきた。わずかながらも春の星座の醍醐味を味わうことができた。北斗七星、うしかい、おとめ、しし、小熊の星座をはっきりと。ラジウスの熱が天井の氷を溶かし、水滴が垂れてくる。背中の下で水の音が聞こえる。氷の上にテントを張ったのか。寒さのために、たびたび目が覚める。

5月6日（日）食当なので、3時に起きた。かなりの寒さだ。昨夜の空の醍醐味は、夏の星座へとバトン・タッチをしている。白鳥、琴、ワシが天を覆い、北斗は西に傾き、カ

シオペアが背伸びをしている。銀河も新鮮な乳をながしている。6時30分、再び、燧岳と尾瀬沼に向けて、2隊に分かれて出発。出発時の気温は、マイナス4度。尾瀬沼の上は、ひとかけらの雪もない。沼面は凍りついて非常に歩きやすい。初夏の陽射しが細かく照りかえり、空の青、木々の緑、雪の白がくっきりと対照的で何ともいえないすばらしさだ。我が隊は、尾瀬沼をわたり、燧岳登頂をめざして行動開始。小さい起伏ある木立の間をぬって次第に標高が高まる。かなりの傾斜だ。キック・ステップの足も疲れて止まる。降りることはできない。登るのみだ。頂上の上方の空の紺碧と白とではり合って、なんの微塵もなく静まっている。頂上直前に到達して止まった瞬間！素晴らしい眺めだ。日光白根をなかにおいて、右に富士山、左に男体山、眼下に尾瀬沼が控えている。付近の斜面でグリセードの練習だ。すごいスピードで息をつまされんばかりである。雪の裂け目に身体をもたせ、呼吸を整えてスタート。重心がはずれて、あっという間に、雪しぶき。ピッケルにしがみつき止まった姿をみると、絶対に助からないような恰好をしている。風もなく小鳥の音が響くのみ。上空では、種々の雲がベールをかけている。

練習を終えて、最高峰を目指す。福島、群馬、栃木、新潟が白く見えた。背伸びをしても、日本海はみえなかった。西側のピークにも立ち寄る。アマツバメが舞っている。下山の際はナデツクボ道を選ばずに新道に行く。どんな小さな斜面でもグリセードをしたくなる。帰って来た道を、沼畔の湿原から双眼鏡でみかえすとシュプールが輝いている。テント到着、14時30分。寝袋、ザックを乾かしたり、靴の手入れをする。顔面がひりひりとし雪焼けを知る。テントの夜は、寒くて眠れぬほどである。下半身が寒く、夜明けが待ち遠しいばかりである。

5月7日(月)4時30分全員起床。直ちに帰りの荷造りの準備をし、朝食を5時40分に済ませ、跡かたづけをする。上空の薄い雲は東に流れ、小鳥が楽しそうに鳴き、沢の音も気持ちが良い。出発7時5分。もと来た道に戻る。歩きだして5分して氷のゆるい割れ目に落ち込んだ奥田が腰までつかって、ぶるぶる震えている。彼は行きも帰りも災難である。

20分ほどして再び、隊列をつくって動きだす。ゆっくりと止まって燧岳を眺めるのもこれが最後だろう。なだらかな登り道を進む。なかなか、三平峠にでないと思ってストップ。地図で現在位置を調べたら、峠をそれて、相当西に来すぎたようであった。方向を変えて前進。下りに下って沢にぶつかり谷の斜面に沿って登り、コースを正す。三平峠着、9時30分。木の間から燧岳がうかがえる。まさか三平峠の標識のてっぺんに腰掛けられるとは思わなかった。まだ、雪は深い。風力1くらい。薄い雲がかかっている。9時45分、三平峠をあとにしてくだり始める。かなりの気温の上昇で、雪は湿っている。道は、来る時の道とわずかな期間であったが、かなり様子が変わっており、雪が消えていた。雪どけの水が、道の縁に沿って流れている。背の荷が重く肩にくいこみ痛い。一の瀬の三平吊り橋通過が10時20分。

ノンストップで大清水へ向かう。平地にでると余計にキスリングの重さがひびく。大き

なサルノコシカケを入れたせいだ。もうふもとは、初夏だ。道端に白、紫のルリイチゲソウが風に揺れている。沢の音が何とも言えない心地よさだ。雪の上、水の道、土の道を歩くが極めて歩きにくい。11時5分、大清水に着く。休憩所で乾パン、ピーナッツ、ジュースを買う。その辺の湿地帯に水芭蕉が可憐なすがたをして現れて我々を迎えてくれた。だが、今日はもう送られる日である。小型トラックが動きだし、われわれの思い出となるべく遠ざかっていった。—完—

(横浜市立大学探査会会報、14号、1963年)



丹沢従走の訓練合宿で

前列左より伊東芦一、大野正夫 後列左より宮崎捷二、松橋隆司、大岡忠正

付記：この頃のザックは、キスリングと言われて、両側に大きなサイドポケットがついていた、そこに、燃料用の灯油の入れたポリタンクを詰めた。よくこぼれて、キスリングの匂いとなった。キスリングは満杯で20kgになり、新人は、この重いキスリングを背負い、登り道を歩き鍛えられた。

北上川水系調査 (1961 年)

北上川は流程 249 km で、日本では流域面積では第 4 の大河である。源流は七時雨山 (青森県) から流れ出し松尾鉦山が支流にあり、多くの支流が合流して盛岡から、船の往来が昔から続けられている。

7 月 15~31 日の期間に北上川水系の水棲昆虫、付着藻類、魚類については、当時日本最大の硫黄の産出を誇っていた松尾鉦山の廃水との関連について調査し、また、北上川流域の地形および土地利用についての調査、流域各地で採取したサワガニについて肺吸虫メタセルカリアを検索した。同時に好摩より河口の石巻までゴムボートによる川下りに成功した。

隊長	伊東芦一	医学部 3 年
副隊長	大野正夫	理科 3 年
	松橋隆司	理科 3 年
隊員	一戸正憲	OB:東京都水道局 (上流のみ)
	丸山 晃	OB:国立自然教育園 (上流のみ)
	蒔田徳太郎	理科 4 年
	森下市朗	商学部 4 年
	寺島和光	医学部 2 年
	横山宣雄	理科 3 年
	大貫紀雄	文科 2 年
	伊藤新一	文科 2 年
	河合武臣	理科 1 年
	宮崎捷二	理科 1 年

ゴムボートによる川下り

ボート下り隊長 森下 市朗
商学部 4 年

ボートによる川下りは、ボートで下れる石川啄木の故郷である好摩より河口の石巻まで、ほぼ流れに任せて下り、4 人乗り大型ゴムボートに二人乗り、荷物を積んだ小さいボートを引いて川下りを行った。森下は全行程を乗り、もう一人は、各担当の調査と日程をあわせて、一人、1 日づつ、交代で乗り継いだ。ほぼ、1 日の川の流れに合うように、大きな町 (波止場) があった。

7月24日 9:00 好摩付近の北上川本流よりボート下りを開始した。夕方、盛岡。
7月25日 雨天のため。天候待ち。川下り中止。
7月26日 盛岡出発 花巻着
7月27日 花巻出発 水沢着
7月28日 水沢出発 薄衣着
7月29日 薄衣着 登米着
7月30日 登米出発 石巻着

成果と反省

トラブルもなく、全行程をゴムボートで下る事ができたが、ゴムボートを川下りに用いたのは、探査会にとっては初めてのことであり、多くの反省点がある。準備期間が短かったために、河川の状況、ゴムボートの性能に関する資料も少なく、予定していた予備訓練も行われないうちに、ゴムボートを河川調査に十分に活用できなかったのは残念であった。そのような関係から北上川では、ゴムボートの性能、河川調査における実用性の検討に主眼をおいて大型ボート（住友電気工業株式会社提供、4人乗り）と小型（一人乗り）の二つを使用し、常時二人で川下りを試みた。その結果次のような結論を得た。

- (1) 浅瀬を下る際、ボートが傾いたり、岩石によって破損したりするため、上流域では浸水がはなはだしかった。
- (2) 流速の遅い下流地域では、漕いだが速度が遅く、下降に極端に時間を要した。
- (3) 4人乗りのボートでは、二人で組むのが限度で、調査用機材が多ければ、かなり活動が制約される。
- (4) 浸水と雨に対する対策を完全に行えば、適当な水量と流速を持つ河川では、ゴムボートで、安全かつ快適な航行が可能である。

私は知床半島縦走調査の時、山岳部部員として寺島さんと同期で参加し、山岳部と探査会学生部に所属した。訓練合宿と一緒に参加したが、主に山岳部の装備を貸すパイプ役であった。北上川調査で探査会学生部のボート下りに参加し、寺島さんと行動を共にしたことがなつかしい。

私は横浜に住み、寺島さんが県立こども医療センターの泌尿器科に在籍していた時に、20年ほどライオンズクラブ会員として、毎年2回医療センターのイベントでお会いしていた。寺島さんが「小児腎センター」設立で尽力されていた時に、私も少しお手伝いしたことを懐かしく思います。ご冥福をお祈りします。（森下市朗）



ボート下り（森下市朗、河合武臣）



北上川の生物調査（左より宮崎捷二、松橋隆司、大野正夫、横山宣雄）

北上川水系調査報告（岩手南方新聞）

横浜市立大学探査会学生部は、昭和36年7月16日より同20日にわたって隊長医学部3年伊東芦一君（23歳）ほか、OBおよび会員など一行12名が、北上川がある岩手郡の水源

地から、宮城県石巻市まで流程 243 k m に涉って、北上川水系の大きかりな探査を行った。本社は新年号の読み物として、報道すべく企画し交渉したところ、同会より本社に回答とともに、中間情報を寄せられた。回答によれば北上上流地域のデータが非常に多く、最も力を入れた生物相の結果は、標本が多いので未整理で、今なおサンプルを調べているが、現在まで判明した結果は次のようである。(岩手南報、昭和 37 年 1 月 1 日)

北上川水系調査報告にあたって

横浜市立大学探査会学生部

川の流程において、日本で 4 番目に位置する北上川は、東北地方の発展に大きな役割を果たしてきた。川のある処に文化あるいは産業が発達することは、我々が知るところである。

川の利用による交通、飲料水、灌漑用水、漁業資源としての川の利用、そのほか川を利用する面は非常に多い。我々横浜市立大学探査会では川に棲む種々の生物に関して、学生の手で研究し得る範囲の問題をとりあげて調査したのである。何故、北上川水系を取り上げたかの理由を少し述べよう。北上川は誰でも知るように本流上流に日本最大の硫黄鉱山があり、そこから出される種々の物質を含んだ水が下流まで影響をおよぼし、それによって北上川の生物分布に大きな変化をもたらしている。ほかの川でも、一時的な大雨、その他に事象によって生物分布が一時的に変化することは、往々見ることである。しかし、北上川の場合、先に述べたように、一時的なものでなく、長い間の鉱山廃水によって生物の分布も、一応安定していると考えられる。以上のような理由によって、ほかの川では見られない条件をもっていると考えたので、調査対象とした訳である。

計画などの準備が不十分で、はじめに計画した通りに思うように進まず残念であった。現在までに整理されたデータならびに整理中のデータで判明した結果を報告する。この調査にご指導とご協力を得た地元の方々にご報告したい。

岩手県下、数ヶ所において採取したサワガニについての肺吸虫メタセルカリア検索

伊東 芦一 ・ 寺島 和光
医学部 3 年 医学部 2 年

1. はじめに

肺吸虫症は、我が国においては広く風土病的に分布し、その患者は全国で 30 万人以上とされている。本症はウエステルマン肺吸虫の寄生により引き起こされて、その病状、並びに X 線所見から、しばしば肺結核症と間違えられ、時には肺臓以外の臓器、特に中枢神経に迷入して重篤な病状を引き起こすこともある。

本症の感染は、その第二中間宿主であるモクズガニ、サワガニなどの体内メタセルカリア

アの摂取によって起こるが、岩手県下のある地域にはサワガニを摂食する習慣があり、かつ現在までに岩手県下においても肺吸虫患者が発見されていることから、我々は県下においてできる限り多数のサワガニを採取し、メタセルカリアの寄生の有無を検査することにした。

季節的關係から、多数の個体を採取することができなかったが、以下にその結果を述べる。肺吸虫の卵は患者の痰とともに、排出され、これが水に入ると孵化して、ミラシジウムが流出し、カリネナという巻貝に侵入する。ミラシジウムはこの貝の体内で、スポロシストー母レジャー娘レジャという三段階の發育をして最後に多数のセルカリアを産み排出される。淡水産のカニは、ニナ貝ともにセルカリアを摂取し、かくしてカニの腸内に入ったセルカリアは血管中に移って終宿主（人間もその一つ）に摂取されるのを待つ。このようなことで、カニを不完全な調理で食するために肺吸虫が感染するのである。

調査地域とカニ採集個体数

我々は、昨年7月20日から8月4日にわたって岩手郡中沢で7匹、中台で3匹、中田で8匹、天満で4匹、荒木田で1匹、蟹沢で5匹、南川目で5匹、総計33匹のサワガニを採取した。そして、採取した地域で住民にサワガニを摂食する習慣があるかどうかを質問した。

かつては摂食したが現在は食べない地域は、中台、天満、現在でも摂食する地域は、中沢、中田、荒木田、蟹沢であった。このことから、へき地と思われる地域が今でも食べていることがわかった。このようにカニを食べる習慣は徐々になくなっているが、現在でも、子供達が好奇心で摂食するという地域もあった。

検査方法と同成績

採取したサワガニはホルマリン浸液標本で持ち帰り、従来の方法で、直ちに甲羅をはがし、エラ、体部筋肉を、解剖針で細かく開きつつ顕鏡しメタセルカリアの有無を精査した。その結果、すべてのカニから、メタセルカリアの個体を発見できなかった。

考察と結論

我々の検査によってメタセルカリアが寄生するサワガニを発見し得なかったが、このことで、これらの地域における肺吸虫症の存在を否定する根拠にならない。検査されたサワガニの個体数が少なかったことと、ホルマリン液浸標本であったことで肺吸虫が排出された可能性もある。患者の聞き取り検索が充分でなかったことなどである。

岩手県下において、肺吸虫患者の記録があり、現在でもサワガニを食べる習慣が残っていることから、なお一層の精密な検索が行われる必要があるだろう。

付記：この他、蒔田徳太郎・河合武臣：北上川水系の魚類相、大野正夫・横山宣雄：特に藻類・水棲昆虫についての報告がなされた。

大雪山学術調査隊一般報告（1962年）

調査隊隊長 寺島 和光

今回の学術調査は、探査会として第5回目、学生部として第3回目のものであり、北海道は、知床半島学術調査（1959年）に次いで、二度目である。扇ヶ原を選ぶきっかけになったのは、毎日新聞の“日本の秘境”という連載記事の中で、このことが書かれていたのを、伊東芦一さんが見つけていろいろ調べた結果、なかなか面白そうだとということがわかった。このようにして調査地域を選んだのは、今まで例がないことである。

扇ヶ原は、北海道のほぼ中央部に位置する大雪山国立公園の中にあり、旭川から近い上川町から登る白雲岳と忠別岳に挟まれた台地である。

扇ヶ原は我々が想像していたよりも、もっとすばらしいところで、70あまりを超える大小の湖沼群は、太古のままの神秘をたたえて我々を迎え入れてくれたのである。蚊、ブヨそれにヒグマというあまり有難くないものからも歓迎されたが…。

また、本会が以前より取り組んでいる山岳湖沼の調査という点から見ても、ここは最も適当な対象といえよう。しかし、今回の調査の最も大きな特色は、調査隊が、生物班、地理班及び商学班の3班から成り立っていることである。すなわち、生物班と地理班は、主として扇ヶ原一帯の調査を、商学班は北海道の道内の各観光地の市場調査を行なった。高根ヶ原の高原温泉は扇ヶ原をバックとして、今後大いに観光地として売り出そうとしているところであった。こういう点を考えると3班はいずれも不可欠の要素であって、今後も何か調査をなす場合“総合的”に行うということが常に必要なことである。

今回の調査では、北海道となると同じ日本国内でも輸送方法・食糧計画、現地との連絡などの面でも、非常に面倒なことが多かった。しかし、それらを学生の手でなし得たことは貴重な経験といえよう。

今回の調査にあたっては、大学内外の多くの方から物心両面にわたり、多くの支援を戴いた。学内では三枝学長、松尾文理学部長、原商学部長、中山文理学部事務長、湯浅電池（株）富士フィルム（株）、日本石油（株）住友電気（株）、朝日新聞社、神奈川新聞社、北海タイムズ社、北海道営林局、上川町役場、上川公民館、このほか多くの方々が、我々のために、こころよく、情報、資材、宿舎などを提供して下さり、調査にも協力下さった。また、本学福島博助教授には、調査の指導から器具の拝借まで、大変お世話になった。

今回、探査会の先輩からも多額の寄付を賜った。紙上をかりて皆様に厚く御礼申しあげ次第です。我々一同、このご恩に報いるべく一層努力するつもりであります。



写真説明

上段左：扇ヶ原の大学沼、上部にテント場

上段右：テント場、探査会の旗が張られた

中段左：荷揚げした資材・食料

中段右：蚊防止帽をかぶって作業

下段左：池沼の形態測量：伊東芦一（中央）

下段右：寺島隊長（左後姿）と打ち合わせ

ボート乗員：左、寺島隊長、右、大貫紀男

1. 調査隊編成

生物班 (8名)

宮崎捷二 (生物科 2年)、河合武臣 (生物科 2年)、木村努 (生物科 2年)、矢島孝昭 (生物科 1年)、白井浩子 (生物科 1年)、三橋孝子 (生物科 1年)、伊東芦一 (医学部 4年)、寺島和光 (医学部 3年)

地理班 (4名)

佐藤俊雄 (地理科 3年)、大貫紀男 (地理科 3年)、田辺勵生 (地理科 3年) 奥田耕造 (商学部 1年)

商学班 (5名)

松岡徳治 (商学部 4年)、鈴木泰次 (数学科 2年)、篠原道雄 (商学部 1年)、松本芳樹 (商学部 1年)、山口由則 (商学部 1年)

2. 調査隊組織

隊長：寺島、副隊長：大貫

渉外・記録部：部長、木村、(部員：白井、三橋、松本、矢島)

技術部：部長、河合 (部員：伊東、鈴木、山口、篠原)

学術部：部長、佐藤 (部員：宮崎、佐藤、田辺、松岡)

3. 行動記録

先発隊

7月12日 木村、三橋が上野発

13日 函館にて地図購入

14日 朝日新聞社札幌支社へ渉外、食糧調達の手配

15日 旭川気象台にて十勝岳地域の危険地域の問合せ

16日 食糧予約、商学班の宿舎の手配

17日 食糧を上川に発送

18日 宮崎、山口ら、上川に到着、資材点検

19日 寺島、伊東ら上川に到着、資材点検

20日 全員上川町に到着。寺島ら営林署と最終打ち合わせ

生物・地理班行動記録

7月21日 全員、荷上げ及びテント設営

22日 2度目の荷上げに伊東、寺島、木村下山、3度目の荷上げに大貫、田辺下山
他の隊員は大学沼 (今回活動を記念した新名称を上川町で大学沼と決めた)
の測深調査

- 23日 地理班は、高原温泉方面の地理調査、生物班は大学沼の生物採集、天通沼、蝦夷沼の調査、ほかに付近の陸上植物、昆虫の調査
- 24日 高原沼の調査、北海タイムズの佐藤記者取材
- 25日 空沼、ふちなし沼、鴨沼の調査
- 26～28日 生物班は緑沼、瀧見沼、芭蕉沼、涙沼の調査、地理班はこれらの付近の地理調査
- 27日 寺島、大貫は商学班と上川町にて合流して打ち合わせ
- 28日 地理班は、扇ヶ原から出て、付近の山の地理調査をして、30日に上川に下山
- 29日 生物班全員、忠別岳に登頂
- 30日 黒沼調査、木村、矢島は資材発送打ち合わせのために下山
- 31日 全員、扇ヶ原を撤収作業、下山、上川に到着
- 8月1日 上川公民館で、荷物の発送を終えて、現地解散

商学班行動記録

- 7月19日 商学班全員上野発
- 20日 函館着
- 21日 函館市内調査、函館発
- 22日 札幌着、市内観光調査、北大泊
- 23日 稚内着、市内観光調査
- 24日 旭川着、市内観光調査、天人峡調査
- 25日 旭川発 上川着、上川公民館泊
- 26日 層雲峡、高原温泉調査、上川公民館泊
- 27日 寺島隊長、大貫副隊長らに調査経過報告、上川発、網走着
- 28日 阿寒湖観光調査
- 29日 川湯付近観光調査
- 30日 帯広着、帯広観光調査
- 31日 帯広駅にて解散

調査結果

生物班

扇ヶ原湖沼群においては、湖沼形態に関しては、航空写真があるだけで、陸水学的にも生物学的にもほとんど調査されておらずの状態であった。今回の調査で、31湖沼群を確認した。そのほとんどは未調査（未確認）の湖沼であった。そのうち7湖沼群について、詳細に湖盆形態、湖水の主な物理化学的な性状、菌類、藻類、水棲昆虫を採取し、湖沼周辺の下等植物、高等植物、昆虫を採集した。これらの調査結果から、陸水学の知見と生物相の特色が明らかになるであろう。また、これらの結果は、1959

年に本会が行った知床半島の調査結果と比較することによって、これらの湖沼群の比較ができる資料となるであろう。調査項目は一つの湖沼について、湖盆形態、測深、水温、透明度、pH、プランクトン、藻類、付近の下等植物、高等植物を調査した。調査した湖沼群は31湖沼であった。詳しい調査を行なったのは、そのうち7湖沼であった。我々がテント場にした沼は、大学沼と改名された。今回の成果は、一般雑誌や学術雑誌に報告されるだろう。

地理班

緑池、滝見池の湖沼について、生物班と共同で湖沼形態の平板測量を行い、湖底をボーリングして火山灰と思われる堆積物を採取した。どの湖沼もそれほど深くなく、湖底は砂であった。水温が低く、季節により水深の増減が数mあることが推測された。そのほか、確認されていない湖沼を探しもとめて、記録されていない湖沼を数多く確認にした。特に埋もれた小さい沼が点々と東部の湿原に連なっていた。高根ヶ原にみられる風化作用、白雲山の氷蝕地形が特徴的であった。湖沼調査の堆積物で湖沼群の発達史が解明できるのではと思われた。数回にわたる高根ヶ原の崩壊は、東側斜面を階段状に発達させ、融雪やその他の浸食で、末端に凹地が形成されていた。それらが発達して多くの湖沼群になったと推測された。火山斜面にしては、めずらしく地下水の露頭（湧水）が発見された。

商学班

大雪山周辺を中心に、道内にある主要な観光地の市場調査を実施した。主な観光地にある代表的な宿泊施設を抽出し、そこに宿泊する客を対象にして、アンケート調査を行なった。各々旅館やホテルの協力を得て、事前にアンケート用紙を送付しておき、後日訪問した際、回収する方式としたほか、一部では、直接面談も行った。設問には、観光客の移動に関するもの、印象、意見を問うものを多く入れ、その動向をつかもうとした。資料のとりまとめに当たって、今後、市場調査の手法について、さらに研究していく必要性を感じた。今回調査した観光地は10ヶ所あまり、そのなかで大雪山周辺では3ヶ所実施した。どこも山麓深く入ったところにあり、着くまでかなり時間を要したが、それにも勝って、雄大で圧倒されるほどの大雪山系を背景に、湖、川など、魅力的な観光資源に恵まれていた。この地域は有力な観光拠点の一つとして発展してゆくことは間違いない。他の地域もおなじく、スケールの大きい、豊かな自然環境と温泉にも恵まれた観光地が広大な地に点在していた。アンケートのなかにも同様な感想が多く記されていたが、道内の観光市場の規模は、さらに大きく拡大していくと予測され、将来性に富んでいると言える。

エッセイ

間歇（かんけつ）温泉と無数の湖沼・扇ヶ原

伊東 芦一
医学部 4年

宝石のような沼の連続！

「これが空沼です…」

案内の立松さんの声にふと見ると、目の前がすっかりひらけて大きな沼が横たわっていた。空沼。そうだ、あの沼だ。我々はもうよく知っている。航空写真のあそこに写っていた例の大きな沼だ。あのでっぱり、このへっこみ、みなもうおなじみだ。調査計画をたてながら航空写真とにらめっこした数ヶ月の間に沼の形は我々の頭の中にすっかり焼きついてしまっている。しかし、この色彩の豊かさはどうだ。沼を取り囲む木々の緑、空をうつす水の青、残雪の白、そして沼に続く緑の湿原には細く冷たい流れに揺れるリュウキンカの目もさめるばかりの黄色。白と黒だけの航空写真からとうてい想像もできなかった美しさではないか。

大雪山扇ヶ原。この地名をご記憶の方もあろうかと思う。ここは昨年夏、M紙に連載された「日本の秘境」に取り上げられた場所のひとつである。当時、日本の山岳湖沼の陸水学的調査を主な目標においていた我々のグループ（横浜市立大学探査会）は、この記事に目をつけた。まだほとんど人の入ったことのない高原にちりばめられた未知の沼の数々。我々の調査目標として大いに魅力ある地域ではないか。そしてほぼ一年に近い煩雑な準備を終えて我々は、いまここにはじめて目的の沼のひとつを眼前にしているのだ。

扇ヶ原というのは、大雪山国立公園の北部白雲岳と忠別岳にはさまれた熔岩台地、高根ヶ原の東岸の岩壁直下に横たわる、標高 1,500 メートルの小さい高原である。ヤンベタツ川上流とその支流忠別沢にはさまれ、ちょうど扇型をしていることからこう名づけられたという。上川からトラックにゆられて 2 時間で高原温泉、そこからさらに徒歩 1 時間半の登りでこの空沼のほとりに立つことができる。扇ヶ原には主な沼が七つ。水たまりのようなものも含めれば、おそらく百を超す沼がこの高原に宝石のようにちりばめられている。我々は 7 月下旬の二週間をこの美しい高原で過ごすこととなった。

92 度の青空温泉

トラックが林道の最後の急坂をたびたびのスリップにあえぎながら登りつめたところ、そこが我々の調査の根拠地となった高原温泉である。温泉特有の臭気が鼻につき、植物もろくにはえていない荒れ果てた地面のあちこちから白い湯気が噴き出している。直径 10 メートルほどの湯つぼがあって底で灰色の液体がブツブツと音をたてて、煮えたぎるさまは

すさまじい。造材小屋が一棟あり、ここに付近の山林で働く人々のために温泉がひかれています。温度 92 度湧出量毎秒 0.3 立方メートルの間歇温泉で、層雲峡をはるかにしのぎ、硫化水素臭があるとはいえ無色透明で将来大いに有望であるという。

湯殿には澄んだ湯をたたえた木製の四角い湯舟がすえられて、そこに熱湯に近い温泉の湯と、沢からの手の切れるような水が引かれてある。自分の好みに応じてこの二つを混ぜ合わせ、適当な温度にして、調査に疲れた身体をドップリと湯船に横たえる気分はなんともいえない。昼下がりの造材小屋は、ほとんど外に働きにでているので静寂そのもの。開けっ放した窓から青空を眺めていると、すがすがしい小鳥のさえずりが飛び込んできたりする。

ヤンベ温泉見ゆ

我々が入山したのは、ときおり強い雨がトラックの幌を激しくたたくと思えば、しばらくすると太陽が顔を出すといった変な天候の日であった。高原温泉からキャンプ・サイトまで案内に立ってくれたのは立松さん。例の造材小屋の持ち主である。

温泉からしばらくは、大きな水芭蕉の茂ったぬかるみの道で、ところどころ丸太を切って横たえてはあるものの足首までズブズブともぐりこんでしまうようなところが多い。いよいよゆるい登りにさしかかるところから道の両側に大きな落（ふき）があらわれる。葉の直径が 1 メートルに近く、荷上げのときなど雨に降られたりすると、我々はよくこれを傘がわりにかぶったものである。

丸木橋で水量の豊富なヤンベタップ川を渡りヤンベ温泉と呼ばれるところに出ると、ここにもかわいらしい湯つぼがいくつかあってぼこぼこ音をたてながら湯気を噴き出している。そこからしばらくヤンベタップ川にそった樹林帯の登りだが、たまたま大雨が降って川が増水すると道が完全にながれの下になってしまうようなところもある。七福沼への分岐を左手にみて、なおしばらく登れば例の空沼に達し、はじめて視界がひらける。

沼、また沼のお花畑

この空沼から、立松さん達が昨年つけた切り開いた道（この多くは熊の通り路を利用したものという）が主な沼を巡っている。かすかな踏み跡に紺碧の空が映える。

高根ヶ原の岩壁を右手に仰ぎつつ進めば、雪溪あり、お花畑あり、小さな丘を越すと真っ青な水を湛えた大きな沼が不意にあらわれたりして快い驚きをさそう。高原沼、大学沼、天通沼、蝦夷沼を経て道はふたてに分かれる。左手の道をたどればふちなし沼、七福沼を経て空沼とヤンベ温泉の間の道へ出ることができる。右に行けば湯の沼、緑の沼を経てヤンベタップ川を渡る丸木橋のすぐ近くへひょっこりとびだす。

どの沼もそれぞれ捨てがたい味わいを持っているが、何といても忘れがたいのは、そのほりで我々が二週間近くキャンプ生活を送った大学沼だろう。かつて、この沼は藤見沼と呼ばれていたが、我々の調査を記念して地元の人々が大学沼と改称してくれたのであ

る。扇ヶ原の平地はこの沼のほり以外はほとんどが湿地なので、ここが唯一のキャンプ・サイトといえそうだ。

我々の四張りのテントはこの沼の西側、ちょうど黄色い花が真っ盛りのウコンウツギの木々の間に張られた。テントの裏側はタカネナナカマド、キバナシャクナゲ、エゾノツガザクラあるいはシナノキンバイ、ミヤマキンポウゲなどが美しく咲きみだれるお花畑を経て、高根ヶ原の岩壁に続いている。岩壁の高さは100メートルもあろうか。いたるところに豊富な残雪を残し、朝夕に見せる色彩の変化は、その迫力と相まってまことに見事であり、あきずにながめたものだ。岩壁の右手、高原沼の上あたりには巨大な雪渓がかかり、クレパスを避けつつこれをつめれば30分ほどで高根ヶ原に達することができる。

湿性のお花畑で美しく装われた沼といえば空沼を第一にあげなければなるまい。ここは最も面積が大きい（直径200メートル）、最も浅い沼で、沼に注ぐ小川の源となる残雪が消えると沼の水もいつしかなくなってしまうのでこう呼ばれている。ダケカンバの純白の肌を水面にうつし、リュウキンカやシナノキンバイの咲き乱れるお花畑を西岸にしたがえるさまは明るくはなやかで、さながら扇ヶ原の女王といったところだが、みかけによらずその水はたいへん冷たく、調査のためにしばらく足でもつけていようものなら足首から下を喰いちぎられたような気がしてくるほど冷たい。

しかし扇ヶ原の沼はこのように、はなやかなものばかりではない。なかには周囲をすっかり木立に囲まれ寂しく横たわるふちなし沼のような沼もある。また、モウセンゴケで敷きつめられた湿原にかこまれた沼もあれば、お湯の沼のようにイワナが群れをなして泳ぎまわっている沼もある。

扇ヶ原の南の端にある緑の沼から東側にもまだいくつかの沼があるが、切り開けなくいづれもひどいクマザサのやぶをこいでゆかねばならない。この沼のさらに東に、我々がかげろう平と名付けた広い湿原がある。周囲をエゾマツ、トドマツのうっそうたる原始林に囲まれ、はなやかな色彩こそないが、ここは扇ヶ原の「ぬし」立松さんさえ知らない場所で本当に奥深い神秘的な印象を与える。

恐ろしいヒグマの宝庫

扇ヶ原の動物のことを書くとなれば、どうしてもまずヒグマに登場してもらわねばなるまい。我々がここを調査の対象として選んだ時からヒグマ対策は最大の問題であった。われわれはヒグマに対するさきやかな道具をもっていった。おのおのが首から下げた小さいホイッスルである。調査中にはいたるところで、大きなヒグマの糞にお目にかかったし、ミヤマバイケイを食い荒らしたあとなどもあった。ときには強烈な獣の臭気を嗅いだこともある。そんなとき我々は必死になってホイッスルを吹き鳴らしたが、ヒグマの方はきっと意外に近いところで我々の様子をじっとうかがっていたのだろうと思う。ある二名の隊員が熊に出くわし、よほど恐ろしかったとみえて例の雪渓をピッケルなしに逃げ下ってきた。

ヤンベタツ川でも忠別沢でもイワナはよく釣れるらしい。造材小屋の台所へ行くとい

つでもイワナがごっそりぶら下がっているのが見られた。お湯ノ沼で群れをなして泳ぐイワナをみたときには塩焼きのこともすぐに頭に浮かんだけれども、我々は標本に3匹以上は決して釣り上げなかった。動物であれ植物であれ科学的な調査に必要なもの以外は絶対にとらない。大学沼のそばの岩場にはナキウサギが棲んでいたし、樹林帯ではときおりエゾリスやシマリスの姿を目にする。

すべて太古のまま

地元の人々は、いまこの扇ヶ原を一大観光地として開発しようと熱意をもやしている。我々がここを去る直前に町役場の人々によって要所・要所に道標が立てられた。しかしわれわれがここで生活した二週間というもの、いわゆるハイカーとか登山者とかいうものには一度も出会わなかった。扇ヶ原は、ヒグマとカモシカの天国の「秘境」であった。

我々の隊長は熱烈なナチュラルリストである。次に彼の手記の一部。

「以前見立沼と呼ばれていた沼のほとりに『高原沼』という真新しい立札がたった。たった一枚の立札だが、いかに甚大な影響をこの自然の景観にあたえることか！昨日まで山道以外には全く人工的な産物はみられず、すべて太古のままの姿をとどめてここにあった」というのに。この一枚の立札は素晴らしい自然に対して何と不釣合で俗っぽいことか。」

おそらくこの一節は全隊員の心を率直に表している。それほど扇ヶ原の自然は清らかであったのだ。

(「旅」日本交通公社、1962年、11月号より転載)



大学沼の湖沼調査に向かうボート

探査会学生部での活動 医学部 4 年（鵜渡根島隊員）

鵜渡根（うとね）・地内（じない）無人島調査（1963 年）

伊豆七島新島北方に存在する鵜渡根、地内の無人島において 7 月 21 日～31 日の間、鳥類、昆虫、ネズミなどの動物に関する調査、高等・下等植物の採集を行い、島内を踏査してその利用価値について検討した。

編成： 総括隊長 木村 努 理科 3 年

鵜渡根島隊： 隊長 松橋隆司 理科(数学科)3 年

隊員 木村 努 理科 3 年

寺島和光 医学部 4 年 奥田耕造 商学部 2 年

森谷常生 理科 2 年 高橋 敬 理科 1 年

地内島隊： 隊長 宮崎捷二 理科 3 年

隊員 三橋孝子 理科 2 年 日野絢子 理科 2 年

菅田 弦 文科 1 年 高松康夫 文科 1 年

伊東芦一 OB 医学部インターン、大野正夫 OB 大学院

探査会シンポジウムで

鵜渡根、江川の頃

鵜渡根島調査隊長 松橋 隆司

数学科 3 年

昭和 38（1963）年の夏の探査は、鵜渡根島・地内島、江川として部で 2 隊を編成、鵜渡根島は神津島の経験を、他方は北上川の総合調査を土台として計画が進められました。私は鵜渡根島の隊長でしたので、総括隊長の木村君にかわってその当時の様子を述べることにいたします。

卒業生と職員を含む探査会から独立して学生部ができ、学生が主体になって活動を始めたのは、神津島の調査からです。その当時、学生のクラブ活動として探検をとりあげていたのは、京都大学だけで競争相手がいないから何をやってもオリジナルでありえたわけです。そういう点では、やることなすこと全く新しい経験であったので苦労も多かったわりには幸せな時代でした。北上川では源流から河口まで、日本第四の長流を踏破することは、今までの調査形態になかったことでしょうし、ゴムボートで下ることも日本ではじめての記録だったと思います。

また、大雪山、扇ヶ原は学生部の主要な活動方針とされた高山湖の連続調査を中心にすえて、計画が実行に移されていったわけですが、この高山湖の調査はほかの大学にはない

調査目標でした。

私達は鵜渡根島をねらう以前にそういう経験をもっていました。しかしこの頃になると各大学にも探検部が増えて、どこをねらって何をするかということ、私達の活動がオリジナルであるかどうか、一番問題になってきました。他方、昭和 36 年頃、同志社大学がヒマラヤ、明治大学と慶応大学がマッキンレー、京都大学探検部はトンガ島というふうに海外遠征がブームになってくる、そういうときでした。できる限りオリジナルなものと考えて、伊豆七島の無人島を選びました。

水のない無人島でどう生活するかということが、神津島の経験と違った新しい経験でした。またその当時は各大学探検部は沖縄の諸島に目を向けていたのですが、無人島の調査はまだやられておりませんでした。

これが、「鵜渡根・地内調査隊」の基本的特徴です。従って新しい経験は船の便がないこと、細かくいうと船がつけるかどうか、その船をどう調達するか、つまり足をどう確保するかという問題、水をどのくらいあげたらいいかという問題、テントがはれるような適当な場所があるかどうかということなどでした。

そういうふうに、新しい経験を付け加えることができ、それが後の男女群島の調査へと結びついていくのですけれども、新しい探検技術の開発とまではいきませんでした。水のないところで生活をするのだから、たとえば海水を飲料水にする新しい器具を考え出したというわけではありませんでした。せいぜい、海水で米をといでいたくらいのものでした。ちょっと塩気があってなかなかいい味でした。この点はコーサ号で、海水に米を一晩つけておくと、水があまりいらなかったという報告をしておりますけれども、私達はそこまでさえも研究しませんでした。

一方、調査の方では、オオミズナギドリの大棲息地があると報告しましたら、朝日新聞社がこれを発見と報道しました。発見かどうかはともあれ報告らしい報告活動は私が横浜市立大学新聞に紀行文を書いたくらいで、調査報告についてはなにもあきらかにされませんでした。従って、この調査活動の活動と欠陥をあきらかにされないまま、翌年学生部は探検部と名を変えていきました。これは一つの問題点だったと思います。

それから、鵜渡根の話からそれますが、高山湖の調査は学生部の基本方針として採用されました。これは部員の専門が広がってくると、その立場からいかに活動するかが大切になりますから、“湖沼グループ”というようなものをいくつか作ろうという方針でしたが、学生部から探検部への移行のときに、奥日光でその技術訓練をしたのが、最後となりました。我が探検部の活動がほかの大学探検部と区別されるべき特長はなにか、この点も現役の学生には深く考えていただきたい点です。

(探査会創立 10 周年記念シンポジウム原稿、1967 年)

付記：寺島さんは、医学部 4 年の多忙な時期に、この調査に参加されているのは興味深い。無人島で、後輩達と海鳥の生態観察に励まれたが、その詳しい成果を伺う機会を失った。

エッセイ

下記の手記は「横浜市立大学新聞」に求められて、1963年9月、10月に上下2回、135号、136号に分けて掲載されている(筆者は松橋隆司)。ここに2回をまとめて転載する。

探査会・鵜渡根島に行く(上)

探査会学生部では、今夏も「鵜渡根島・地内両島」と「江川水系」の探査を行った。

そこでまず「オオミズナギドリ」の群れを発見したという「鵜渡根島無人島調査隊」のルポを紹介しよう。

オオミズナギドリの島

新島の北方にある鵜渡根島、西方の地内島(ともに無人島)が目的の探査地点で、ともに長径1キロ、短径0・5キロ程度の海蝕崖に囲まれた小島だ。新島での宿舎と交通ルート確立の任務をもった2名の先発隊が7月19日に出発し、22日に新島で9名の本隊と合流した。鵜渡根島隊は、23日午前4時全員元気に起床し、すぐさま準備を整え漁船を待った。

ようやく6時に漁船に乗り組み鵜渡根島へ向かった。島に近づくと周りは険しい崖に囲まれ、上陸した地点もわずか1教室くらいの広さの岩だらけの波うち際である。ここの上陸は隊員にとって忘れられないものである。船は岩に近づくと波とともに押し返される。波が来ると上陸したひとりが綱を力一杯引き寄せる。そこで、ひとりが飛び降りる。それを何回か繰り返し、ようやく全員上陸を完了した。

われわれ全員が上陸すると船は、危険な岩礁をサーと離れていった。夢中で漁夫に手をふる。感謝と無人島に5人だけ取り残される寂しさから一。

午前9時。次の難点はテント場作りだった。岩を掘り起こし、砂をまいて何とかテント場を造った。真っ白だったシャツが茶色になっている。汗が光る。テント場を造ってみると、上の崖が気になる。今にも落ちそうな岩がごろごろしている。みんな平気な顔でテントを張っている。落石ノイローゼは隊長ただひとり。試しに一つ押してみたら2回バウンドしてテント場の真ん中に落ちて穴をあけて下に転がっていった。幕営完了。午後4時。苦しい作業だったが、明日からの調査に全員ファイトを燃やす。(つづく)

探査会・鵜渡根島に行く(下)

ようやく鵜渡根島に上陸した隊員たちは、不安と期待に胸おどらせながら活動を開始するわけである。さて、この無人島で、オオミズナギドリの群れを発見するのだが。

海の幸満杯の石卓

われわれの影が長く尾を引く頃になると、「メシダゾォ！」標本の整理もそそくさすとまして、石の食卓を囲む。このときから、われわれの最もたのしい時が始まるのだ。食器が

やっとおさまる傾きで並ぶ程度の石卓ではあるが、カサガイ、マツバガイ、アワビ、トコブシ、時には豪勢な伊勢エビなどが食卓に並び、にぎやかな夕食となる。ひとしきり食器をひっかく箸の音が続いて、腹の虫がおさまると、皆んな思いおもいの大きさの岩のベッドにきゅうくつそうになった腹をかかえて横たわる。もうそのころになると、海藻で赤く色づいた岩礁が、しだいに、波をかぶるようになり、黒々としてくる。まさにエメラルドだった海も不気味な海に変わる。岩にぶつかって砕ける波のとどろきは、いやでもわれわれに旅愁を感じさせる。イカ釣りの灯が浪間に一つ二つ点滅しはじめた。ちょうどそんな時分に、「帰ってきた！帰ってきた！」の声。「ピー、ピー」とかん高い声の方を見ると群がるように飛ぶオオミズナギドリだ。見える。見える。一羽、二羽…。望遠鏡で黒々した山肌にそって空をみると、うすぐらい丸い視野の中に無数に鳥たちが行きちがう。ただちに論議がはじまった。なんとか、数をつかみたい。

数万か十万か、捕えて標識し判断するしか方法がないが、しかし、この暗さでは、はっきりとした数を決めることはできない。星はわれわれの気持ちを穏やかにいやしてくれる。オオミズナギドリは、我々の空の上を現れては消える。誰かが言う。「そうだ、星の数を目安にしたら」。目に見える星の数は3,000程度。それよりはるかに多い。1万、3万…あるいは5万かもしれない。

昼間、この島を歩いていると、いたるところに巣があり、50cm歩く間に鳥の巣に落ちこむ。この鳥の巣が鵜渡根島の大半を優占し、頂上付近はがれきでなだらかになり、そこはムンムンするような草木種が繁茂し、ツツジ、ネブトコ、ツバキにとって代わるいくつか植物の臭いを感じる。われわれは木々の代わり目で一息いれる。汗でぐっしょりとなったシャツをしぼると、ポタポタと白茶けた地面をぬらす。アリが慌てて逃げていった。さすがに、波の音もここまではとどかず、ミンミンゼミが静かに鳴いて、木々の間をしみ通るようだ。ときどき、アマツバメが、「ツイー、ツイー」と尾を引いて飛ぶ。メジロ、ホホジロが椿の間からのぞく。

これはなんとどのどかで、なんと平和なことか、それなのに、隣の島ではなんでミサイルが必要なのだろうか。(了)



左：オオミズナギドリ（ウィキペディア、フリー百科事典）

右：新聞写真説明：今日の収穫だ！ピンピンはねる大エビ。……どう料理しよう？……思わずみんなのニンマリする顔がちらつく（新聞写真の中央：奥田耕造：横浜市立大学新聞136号）

探査会シンポジウムで

探査会に医学をいかに導入すべきか

寺島 和光

医学部 2 年

このシンポジウムで与えられた話題のテーマは、「探査会に医学を如何に導入すべきか」であります。漠然としているので、3つに分けられると思います。

まず一つは、医師として探査会活動中の会員の健康を保持し、病気を治療することです。これは、医師となった者が、探査会の会員になれば解決しますが、できれば内科医や外科医が会員になることが、望ましいかもしれません。

第二は、探査会の調査・研究目的の一つとして研究分野があります。本会の設立目的は、「未知の地域を踏査し未知を知らしめることですから、私としては、医学生は必ずしも研究目的をもっていなくとも、その人が探査に参加することで、本人が満足し、他人もそれを認めるのであれば、専門外の研究の手伝いをするということであっても、決して会の目的から外れていないと思います。もちろん、医学生であるからには、理想的形態としては、医学分野の研究目的をもって参加できればよいと思います。その場合は学生だけで行う場合と医師や医学者と一緒に行う場合があります。しかし医学生である我々が、医学的に研究対象にできるようなものはあまりないので、探査会会員として私の一番の悩みであります。

一人前の医師・医学者がいて、我々がその手伝いをするというならやることもありますが、学生だけとなりますと、なかなか難しい問題であります。そこで、学生だけでもできるようなものを挙げてみると、一つは、探査会会員自身を対象とした衛生学的研究。例えば高山に登った時、人間の生理状態がどのようになるかなどです。二つはある地域の住民やある種の動物についての研究、すなわち寄生虫病学、公衆衛生学、衛生学的研究などがあります。

これは、昨年探査会学生部が伊豆七島の神津島で行った公衆衛生学的な調査も該当することです。またある種の生物、例えば寄生虫の中間宿主となる獣や貝などについての研究です。私は具体的にこれから何をするかはまだきまっておりませんが、専門の先生に伺ったりして何か適当な目標を見つけたいと思います。医学生はやがて卒業して専門の医者や研究者になるわけですが、その時になってもやはり探査会会員として活躍できるテーマをもっていることが望ましいと思います。

第三、最後に、これは医学と言いかねるものではないかもしれませんが、簡単な傷の手当や医薬品の取り扱いについて、医学生は知っておくべきです。これは医学生が当然知るべきであり、会員のアドバイザーになることです。まだまだ医者の卵でありますので、無理であっても大学の先生に、教わるようにしたいと思います。

(探査会会報 No.10 号、シンポジウム原稿 1961 年 3 月)

自然保護と探査会

寺島 和光

医学部 4年

1. はじめに

「自然保護」ということは、文明が進み、地球上の人口が増加するにつれて、ますます重大問題となってきた。特に狭い国土に一億近い人間がひしめいている我国では、人口問題と並んで非常に重要な問題であるにもかかわらず、全く軽視されているように思われているのは、はなはだ遺憾なことである。

さて、自然保護の問題は、直接人間の利益に関することが多いため、その解釈の仕方はその人その人の立場によってかなり異なるようである。そこで、私は私なりの考えでこの問題を取り上げてみようと思う。

自然保護とは、「自然を人間生活に最も役立つ状態にしておくこと」だと言える。自然とは、生物はもちろん、空気、水、土をも含めた広い意味であり、人間とは、現在いている我々のみならず、将来この世に生まれてくる我々の子孫すべてについて言っているのである。

2. 自然保護は、何故必要か

言うまでもなく、自然保護が必要なことは明らかなわけだが、さらに次の二つに分けて説明してみよう。

(1) まず、自然のなかにあるすべてのものは自然のほかのものへは影響を与えずに、あるいはほかのものからの影響をうけずには決して存在しえない。そこで、日本ではいたる所でみかけるブナの生えた山を例にとって説明してみる。

この山も大昔からブナが生えていたわけではなく、はじめは苔のような下等植物から始まり、草、さらにカシワやユリノキがこれにかわり、それらも結局最後にはめばえが日光の少ない陰地でも育つブナに山を占領されてしまったと想像される。

ブナは、人類に対しては、材木として役立つところ大であるわけだが、一方ではたえずキクイムシなどの昆虫に生命をおびやかされている。逆にキクイムシはキツツキによって捕食され、キツツキはタカなどのえじきになる。そこでブナーキクイムシーキツツキータカという一連の生態系が成り立っている。特別の事情のない限りお互いのバランスが保たれているはずである。

ところが、例えばハンターのためにキツツキの数が減少した場合を考えると、当然キクイムシの数は増加し、このためブナの木は食い荒らされ、ひどい時には何ヘクタールもが禿山になることさえある。そうなると材木の損失だけでなく、それまでは網の目のように張りめぐらされていた根や腐植土により、降った雨や雪を天然の貯水池として蓄え、平地

に住む者に雨のない時にもきれいな水をたえず補給してくれた同じ山が、今度は一旦大雨が降れば、それを少しも溜めることなく土砂とともに一時にどっと流して下流で洪水を起したりするのである。

次に何かの事情でキツツキの数が増えた場合を考えると、少しぐらいなら問題はないが、増加が、はなはだしい時には、キクイムシはどんどん食べられ、しまいにはキツツキの餌がとてま少なくなり、翌年生まれたヒナは飢えのために生き残るものが激減する。その年はキクイムシが急増するので、やはりブナ林は激減していく。

以上はキツツキについてだけ述べたが、同じことはキクイムシやタカについても言えるし、実際の自然界は、もちろん、こんな単純な関係で成り立っているのではなくて、ある生物の個体数を左右する因子はそれこそ無数にあると言ってよい。

要するに自然界は互に極めて複雑にからみあっていて、しかもたえず平衡状態を保っている。そしてこのバランスを崩さないようにすることこそ、人間生活を豊かにする上に最も必要なことであり、すなわち自然保護なのである。万物の霊長たる人間がこのバランスを保つうえの生殺与奪の権利をもっていることはいうまでもないことである。その文明力をもってすれば広いブナ林を丸裸にするぐらいは全く容易なことである。

しかし、うかつに自然に手を加えるならば、たちまち自然界のバランスがくずれて、その結果は自然から手ひどいしっぺ返しをくわされることは必至である。

具体的な例をあげると、足尾銅山の周囲の山は精錬所からの煙害で広大な面積にかけて樹木が枯れてしまい、そのため雨が降ると多量の土砂が流出し、川は洪水を起こしたりしてすっかり変わってしまったこと、マツクイムシやクリタマバチの大発生で、たくさんの木が枯れてしまった話、無理な宅地造成のため台風シーズンになると崖くずれの騒ぎを繰り返している横浜や横須賀、魚を獲り過ぎて沿岸漁業が成り立たなくなっている漁師などきりが無い。松尾鉦山と北上川の関係も似た例だろう。

ここで注意したいのは、自然保護とは何も現在ある状態には、絶対に手を加えてはいけないというのではなく、現在がベストでなければ、もちろん、ベストにもっていくべきである。例えば丹沢のシカは現在禁猟になっているが、もし、数があまりにも増加し、植物への被害が甚だしくなればバランスのとれた数になるまで減らすべきであろう。

また自然保護は幅広い、世界的視野から眺めるべきで、日本国内の問題だからといって決して外国と無関係であり得ない。ソ連との間に行われているサケ、マス漁業高の交渉や南米洋の捕鯨の問題など、自国の利益ばかり主張しないで、もっと自然保護の考えを取り入れて大所高所から検討してもらいたいものである。あるいはまた、ツバメのような渡り鳥は、冬季東南アジアで過ごすのだから、毎年のツバメの個体数を左右する地域は日本を含めた非常に広い範囲にわたるわけで、この保護についてこれらすべての国々の協力が必要なのである。

(2) 自然保護のもう一つ重要なことは、「自然は人類の共有財産である」ということである。丹沢を例に取ろう。ここはまだ人手の加わっていない自然がかなり豊富に残ってい

る。それは学術的には生態学そのほかの研究の材料としてだけでなく、観光的および文化財的な価値もある。

近年登山人口は急増しているが、それは、高度に機械化された文明生活において精神的な慰安を与えてくれる場を求めるために人々は山にゆくのであろう。そして登る山が自然の本来の姿をとどめていなければいほど、人々は安らぎを覚えるのは当然で、もし蛭ヶ岳のてっぺんまでバス道路が走り、周囲の木は切り倒され、観光ホテルや展望台が建ったりしていたのでは、おそらくがっかりするだろう。こういうことが方々で行われると、将来、我々の子孫は、本当の自然を見ることができなくなり、従って学術的研究の場も精神的な憩いの場もなくなる恐れが生じてくる。古い時代の建造物や絵画などに対しては、学術的文化財ないし観光価値を認めている日本人が、全く同じ価値を持つ「自然」に対しては冷淡であるのはどういうわけだろうか。

日本は狭い山国で、しかも地下資源の乏しい国ではあるが、四季変転きわまりない美しい自然は、世界に広く知られているところであり、多くの外人観光客が訪れるのもいわゆる名所旧跡とともにこの「自然」を見るためであって、すっかり人工化された自然というもの、厚化粧をした女性のようなもので、はなはだ魅力がないという事は多くの外国人が指摘している点である。外国人観光客からの収入がばかにならない我国では切実な問題である。言いたいことは、自然に手を加える時は非常に慎重でなければならないということで、一旦破壊された自然をもとに戻すのはほとんど不可能に近いことなのである。

3. 自然保護に対する認識

探査会の活動目的が自然、それも未知の自然を対象にしている以上、会員は当然自然保護については充分認識し理解しておかねばならない。自然保護は、いわば一種の生態学であり社会科学であり、応用の学問であるわけだから、生物学はむろん地理学や経済学を学ぶ者は知らないではすまされないし、また知っていると会の活動においてだけでなくいろいろな機会に大変役立つものである。

さらに欲を言えば、会員は自然保護については指導的な立場にたてるようになりたいものである。それは、我々は過去の何回かの活動を通じて、原始の自然が如何に少ないか、また貴重なものかということを一一般の人達よりずっと多くみてきているからである。

4. 自然保護と探査会の活動

会の活動のなかで、自然保護ということを中心に考える必要のない場合、いくらかでも考慮する場合、および自然保護を目的とする場合の三通りが考えられる。例えば、「大雪山扇ヶ原の大学沼のプランクトン」と「自然保護」はほとんど無関係のようだが、「北上川水系のプランクトン」と「自然保護」ということになると漁業などの点からみれば関係は濃厚である。さらに、一步進んで、「ある地域の自然保護」という目的の調査を探査会が行うことも可能であろう。

また一見自然保護と無関係に見えることがらもさらに検討してみると、ある点では深い関係を見出すこともあり得る。大学沼のプランクトンでさえ、何年か後にはどういうことで、実際に役立つようになるかは誰も予測できまい。

さて、探査会の本来の目的からすると、日本国内で活動できるような地域はもうほとんどなくなつたように思われる。というのも活動が生物学、それも分類学の段階を抜けきっていないからではないか。そこで、自然保護ということ活動を目標に強く、打ち出せば、まだ結構やることがあると思う。

例えば、丹沢山塊に関しての分類学的な調査はほとんどし尽くされているが、丹沢の自然保護ということになると、登山道路や山小屋はこれ以上増やした方が良いのか悪いのか、あるいは虫害による樹木の立ち枯れが目立つが、どうい昆虫によるものが多いのか、それを防ぐにはどうすればよいのか、あるいはノネズミ、ノウサギやシカが、最近増えて被害が甚だしいとなれば、実情はどうなのか、また予防はどうすべきか、あるいは広い面積の木を一度に切り倒したため、相模川や酒匂川のプランクトン、ひいては魚類がどんな影響を受けているかなど。これらはあまり良い例ではないが、いろいろの角度から研究すればもっと立派な活動目標ができると思う。

次に海外に目を向けてみよう。広大な未知の自然があふれている海外の諸地域でさえも現代文明の手は急速に伸びていて、やがては今の日本のように悪い方向に変化してしまうのもそう遠い将来のことではあるまい。こういう観点から、探査会が自然保護を目的にするか、ないしはこれを背景にもったところの調査を行うことは大変有意義なことだと思われる。あるいは先進国の自然保護の実態を実際に見てくることによってそれを日本およびそのほかの国々に応用することも必要である。これまで海外に行った我国の調査隊は自然保護ということにあまり関心がなかったようで、ガラパゴス調査のごときは、自然保護に反した行動をとった人もいと聞くが、誠に残念なことである。

具体的にどうい活動をしたら良いかという案は持ち合わせていないが、海外遠征の場合なら、材料は事欠かぬのではなからうか。

5. おわりに

自然保護の問題は、私には荷が重すぎる課題で、これだけのまづい文を作るのに随分苦労した。かんじんの「探査会の活動のなかに如何に生かすべきか」については、正直なところ、具体的な良い案は何もない。皆さんとともに、研究してみたいと思っている。いづれにしろ自然保護は、結局「自然への愛情」につながるのだから、探査会会員である以上決して忘れてならない問題である。

この文については、皆さんがめいめい意見や批判をお持ちのことと思う。またそれを期待するものである。

(横浜市立大学探査会会報 14 号、1963 年)

寺島和光さんを偲んで

松本 芳樹

商学部昭和 41 年卒業

寺島さんと初めてお会いしたのは、1962 年寺島さんが医学部 3 年生、私が商学部に入り探査会学生部に入部して間もない頃、部室に来られた時だった。挨拶だけであったが、温和な方との印象とともに、その言葉使いも少し関西風、柔らかく聞こえたことを覚えている。部室にはそれが標準語なのかどうか、テンポの速い、ちょっときつく感じる言葉が飛び交っていて、四国・高松から来た私には、少々戸惑いがあったためか、何かほっとしたような気がした。そんなこともあってか、寺島さんには最初から親しみを感じていた。医学部とはキャンパスが別だったため、普段顔を合わすことが少なかったものの、合宿の前にはよく部室に来られていたし、部の集まりには常に参加されていた。そんな折々に、お話を聞く機会も多くなり、何度も鳥や植物などの活動分野の広さと、その豊富な知識には驚かされていた。寺島さんと部活動をともにしたのは二年間の短い期間であったが、その間、個人的なことながら、忘れることのできない思い出を作ってしまった。

それは 2 年生の秋のことであった。ある朝起きた時、胃の周りが妙に重苦しく、おかしいことに気がついた。昨夜、風呂帰りに食べたラーメンのせいかと思って、そのうち治るだろうと軽く考えていたが、日を追うごとに悪化していることは自分なりにわかった。一度、近くの医院で診てもらった。単なる胃炎で心配ないとの事だったが、その後も一向によくなる気配がなく、むしろ悪くなっている感じであった。とにかく胃の中に重たい玉が入っているようで、苦しくて自然に前屈みの姿勢になるほどだった。辛抱できず、ほかの医院を訪れたが、同じ結果であった。途方にくれて、ある晩寺島さんの下宿を訪ねた。当時、寺島さんが自分と同じ六角橋に下宿していることを知っていた。突然の訪問であったが、部屋がきれいだったことと本棚にたくさんの本が並んでいたのを憶えている。寺島さんは勉強中であった手をとめて、これまでの経過やにわか勉強で仕入れた胃に関する疑問点などすべてを聞いて下さった。

そして、「二カ所で診てもらったなら、そう心配することはない。心配する時、胃がいたむとか言うだろう。胃はストレスに弱いと言うだろう。悩み過ぎると本当に病気になってしまうぞ！」と言い、「それにしてもよく勉強しているなあ。そんな暇があったら、ジャガイモでもしっかり食っている。その方がよっぽど良い。」などと優しく話して下さった。帰り道、寺島さんの都合も聞かずに突然訪れたことを後悔したが、それ以上に気持ちが楽になった。

しばらくして、寺島さんから医学部に来るようにと連絡があった。どんな会話をしたか思い出せないが、医学部に行くと会うなり先生を紹介されて、すぐに診察をしていただくことになった。寺島さんは授業に出ていかれ、その場で別れたが、思いもよらない事で

あった。すべて手配をして下さっていたのだ。4年生の学生の身で、ここまでしてくれるのは、容易でなかったはず。寺島さんの心くばりがうれしく胸が熱くなったのを憶えている。その後、帰省してしばらく養生することにした。時間を要したが、年末にはあれほど苦しんだ胃がどこに在るのか気にならなくなるまでに回復した。すぐに大学にもどって来たもののその後は、冬休み、春休みと休暇が続き、いつでも会えると思っていた寺島さんも3月には卒業されてしまった。卒業式当日、会場に行き、寺島さんを探したが、大勢の卒業生で混雑していて、式が始まる前も、終了後も寺島さんを見つけることができなかった。その気さえあれば、お礼をいうことくらい、いつでもできたのに。申し訳ない以上に自分がなさげなかった。とうとう、きちんと報告し、お礼を言わないままお別れすることになってしまった。ごく当たり前のことができなかつたことが、その後、頭から離れず常に胸の奥にあった。

以来、あっという間に50年が過ぎた。1 昨年12月に卒業後、初めて探検部OB会に出席し、懐かしい面々と再会した。そのなかに、温和で昔と変わらない寺島さんがおられた。感動でつい体がふるえる思いがした。少しの時間であったが、永年の非礼を詫びることができた。「そんな事があったかなあ」と笑顔をみせられたが、それも不出来な後輩を思っただけの言葉だったと思う。そこで、自分が糖尿を患っていることを話し、「糖尿は四人に一人はなると聞いていますが、それでも病気なのでしょうか？」と尋ねると、「癌は二人に一人は罹るが病気と言うから、糖尿も病気と言うことになるだろうな！」と、学生にもどつた会話をして微笑まれた。

突然の悲報に接した時に、がくぜんとして言葉もなかった。今はただ、合掌し、ご冥福を祈るばかりである。



男女群島調査、無線連絡（中央：松本芳樹隊長）

知床を楽しんだ寺島さん

吉野（三橋）孝子

生物学科昭和41年卒業

1962年、大雪山調査を終えて、上川町で解散した2日後の朝、寺島さんと私は、知床の玄関口になる斜里駅で落ち合い、釧路から来る北海道学芸大学釧路分校（当時）の生物学教室の一行を待ち受けました。

それは、大雪山調査に入る前に、釧路で暮らしている姉一家のところで、調査隊の食料調達を手伝ってもらうために、私は先発隊として釧路に行っていたのです。その際に義兄（釧路湖陵高校定時制の生物学教師）が、私達が大雪山を下りて数日後に、大学の野外実習があり、義兄はOBとして参加する話を聞き、私も参加させてもらうことにした事を大雪山調査準備の時、寺島さんに話したら、寺島さんも行きたいということになり、知床への野外実習に参加しました。

今でこそ、世界遺産として賑わっている知床ですが、50数年前は、知床は海から崖や海に落ち込む滝を船で見る場所で、陸路は岩尾別までバスが走っているだけで、人間がヒグマの暮らす場所へ御邪魔させてもらう感じでした。

最初の宿泊地の岩尾別温泉は、川の横に、何も無い露天風呂があるだけで「女子は暗くなって入ればいいよ！」と言われ、懐中電灯の明かりで、学芸大の女子学生と入りました。

羅臼岳の山頂が見える羅臼平にテントを張りました。羅臼岳の頂上を全員で登った後、さらに、硫黄岳を目指して男子学生と寺島さん達は、出かけてゆきました。女子学生、私、教授と義兄は残りました。教授と義兄はこんな会話を交わしていました。

「ここに来る前に、大雪山に入ってたんだってエ！」

「ええ、学術調査をしてきたそうです。」

「彼が隊長を務めたんだってエ！」

「ええ！ よくやりましたね」

「そうですねエ！」

硫黄岳から戻ってきた学生が、「先生、国境って、バカらしいね」と言った。硫黄岳の山頂から北方領土の島々が、どの位置に見えたか分かりませんが、羅臼平のテントの位置からも国後島がみえて、夜になると、島で生活している人々の灯りがチラチラしているのが、みえました。

教授は、「硫黄岳の頂上に立った人は、まだ200人もいないよ」と話していました。寺島さんは、大雪山調査隊・隊長の任務から離れて、のんびりと楽しそうでした。関西（福井県大野市）出身の寺島さんは、物腰もやわらかく、「ごめんなさい！」でなく、「すみません！」と言われたのが、印象に残っています。



知床・羅臼山の山頂にて（左：筆者、右：寺島和光）

下山予定の前日、ラジオのニュースで、めったにこない台風が、道東を目指してやって来て、雨や風の勢力が、まだ強いとの情報がでました。そこで翌朝はなるべく早く下山することになりました。「自分は濡れても、荷物は濡らさないように」「キスリングの中身はちゃんとポリ袋などに詰めるように」と指示されました。

羅臼町へ下山している間に、本格的な雨風になり、登山道はまわりより低いので、もう川のように水が流れているところを歩きました。雨がめがねに当たったり、汗をかくと内側から、レンズが曇って困りました。「ワイパーがあるといいね」とからかわれました。

民家のある所まで、ビショビショの一行が下りた後、「体がひえているから！」と、一升瓶を数本持ってきた教授は、コップ酒をみんなに飲ませました。こんな量のお酒を飲んだことはありませんでしたが、飲んでも、どこに消えたかわかりませんでした。羅臼町の中心の宿まで、トラックの荷台に乗って到着しました。

翌朝、学芸大の一行と別れて、寺島さん、義兄と私は、尾岱沼（おだいとう）に向かいました。義兄の教え子の実家であるお寺にクラスの生徒達がやってきました。そこで、2泊3日のクラス合宿が行われました。高校生と言っても定時制なので、ほとんどが働いていて、なかには年かさの人もいました。郵便局員、パルプ会社の社長の代理（俺の会社というのが口癖なので）など。

海では、帆かけ船が「ホッカイシマエビ」を捕っていました。これは缶詰にして、アメリカへ輸出しているとか。生徒さん、寺島さんと一緒に船に乗せてもらい、野付半島に遊びに行き、アサリを取ったり、皆と夜中までトランプをしたりして遊びました。寺島さんも仲間に入りました。

釧路へもどって、義兄の「おなかに教養を付ける！」というセリフで、今まで食べた事のない海や山の珍味を、寺島さんと私はごちそうになりました。

台風からだいぶ経ったのに、札幌と釧路を結ぶ路線は、狩勝峠付近が土砂崩れで不通で、札幌に出るのに大回りをして網走廻りで行かねばなりませんでした。いつもは、夜出発する急行「まりも」が午後に釧路を出発して、札幌に着きました。

札幌で、寺島さんの先輩にご挨拶をして青函連絡船に乗り3日目に上野駅で、寺島さんとお別れしました。

義兄一家は、その後浦和の叔父の会社に呼ばれて、今は世田谷で暮らしております。義兄は、寺島さんとその後も、連絡を取り合って交流が続いていたそうです。寺島さんが神奈川県立こども医療センターに勤務されていることを、義兄から教えてもらいました。

義兄は、2010年に旅立ってしまいましたので、今は寺島さんと知床の思い出話を語りあっているかもしれませんね。

ご冥福をお祈りします。



知床五湖から望む羅臼岳 (石塚正雄提供)

日本百名山踏破

刊行委員会

小説家・随筆家で、登山家である深田久弥によって、1964年に『日本百名山』が新潮社より刊行された。この本が文庫本で1978年に刊行された時は、登山ブームの時に広く読まれるようになった。寺島和光さんは、その頃には米国から帰国し、神奈川県立こども医療センターに勤務しているが、この本をどこかで読まれ、勤務の休みを利用して、「百名山」の踏破に挑戦されたのであろう。全峰踏破したことをご本人から聞いたのは、ポリビアにゆく前年の探検部OB会でのことであった。

この百名山なかで、探査会・探検部時代に登った山は、羅臼岳（大雪山調査後と後年再度登頂）、大雪山（知床半島調査後と大雪山調査）、岩手山（生物野外実習）、那須山（山間湖沼調査）、燧岳（春山雪上訓練）、苗場山（春山雪上訓練）、奥白根山（山間湖沼調査）、丹沢山（新人合宿）であるが、登山技術訓練（20kgのキスリングを背負い体力訓練も兼ね）や雪上登山訓練が、後年の百名山を踏破する基礎を築いたといえよう。

深田久弥の選んだ日本百名山

番号	山名	標高 (m)	山系	都道府 県	備考	山容
1	利尻岳	1,721	利尻島	北海道	利尻礼文サロベツ国立公園	
2	羅臼岳	1,660	知床半島	北海道	知床（世界遺産） 知床国立公園	
3	斜里岳	1,547	知床半島	北海道	斜里岳道立自然公園	
4	阿寒岳	1,499	独立峰	北海道	阿寒国立公園	
5	大雪山	2,291	大雪山系	北海道	大雪山国立公園 北海道の最高峰	
6	トムラウシ	2,141	大雪山系	北海道	大雪山国立公園	














番号	山名	標高 (m)	山系	都道府 県	備考	山容
7	十勝岳	2,077	大雪山系	北海道	大雪山国立公園	
8	幌尻岳	2,053	日高山脈	北海道	日高山脈襟裳国定公園	
9	後方羊蹄山	1,898	独立峰	北海道	支笏洞爺国立公園 蝦夷富士	
10	岩木山	1,625	独立峰	青森県	津軽国定公園 津軽富士 青森県の最高峰	
11	八甲田山	1,584	奥羽山脈	青森県	十和田八幡平国立公園	
12	八幡平	1,614	奥羽山脈	岩手県 秋田県	十和田八幡平国立公園	
13	岩手山	2,038	奥羽山脈	岩手県	十和田八幡平国立公園 岩手県の最高峰	
14	早池峰	1,917	北上山地	岩手県	早池峰国定公園	
15	鳥海山	2,236	出羽山地	秋田県 山形県	鳥海国定公園 山形県の最高峰	
16	月山	1,984	出羽山地	山形県	磐梯朝日国立公園	
17	朝日岳	1,870	朝日山地	山形県 新潟県	磐梯朝日国立公園	
18	蔵王山	1,841	奥羽山脈	宮城県 山形県	蔵王国定公園 宮城県の最高峰	

番号	山名	標高 (m)	山系	都道府 県	備考	山容
19	飯豊山	2,128	飯豊山地	山形県 福島県 新潟県	磐梯朝日国立公園	
20	吾妻山	2,035	奥羽山脈	山形県 福島県	磐梯朝日国立公園	
21	安達太良山	1,710	奥羽山脈	福島県	磐梯朝日国立公園	
22	磐梯山	1,816	奥羽山脈	福島県	磐梯朝日国立公園	
23	会津駒ヶ岳	2,133	越後山脈	福島県	尾瀬国立公園	
24	那須岳	1,917	那須連山	福島県 栃木県	日光国立公園	
25	魚沼駒ヶ岳	2,003	越後山脈	新潟県	越後三山只見国定公園	
26	平ヶ岳	2,141	三国山脈	新潟県 群馬県	越後三山只見国定公園	
27	巻機山	1,967	三国山脈	新潟県 群馬県	魚沼連峰県立自然公園	
28	燧岳	2,356	越後山脈	福島県	尾瀬国立公園 福島県の最高峰	
29	至仏山	2,228	越後山脈	群馬県	尾瀬国立公園	
30	谷川岳	1,977	三国山脈	新潟県 群馬県	上信越高原国立公園	

番号	山名	標高 (m)	山系	都道府 県	備考	山容
31	雨飾山	1,963	頸城山塊	新潟県 長野県	妙高戸隠連山国立公園	
32	苗場山	2,145	三国山脈	新潟県 長野県	上信越高原国立公園	
33	妙高山	2,454	頸城山塊	新潟県	妙高戸隠連山国立公園	
34	火打山	2,462	頸城山塊	新潟県	妙高戸隠連山国立公園	
35	高妻山	2,353	戸隠連峰	新潟県 長野県	妙高戸隠連山国立公園	
36	男体山	2,486	日光連山	栃木県	日光国立公園	
37	奥白根山	2,578	日光連山	栃木県 群馬県	日光国立公園 栃木県の最高峰 群馬県の最高峰	
38	皇海山	2,144	足尾山地	栃木県 群馬県	日光国立公園	
39	武尊山	2,158	越後山脈	群馬県		
40	赤城山	1,828	独立峰	群馬県	県立赤城公園	
41	草津白根山	2,171	独立峰	群馬県	上信越高原国立公園	
42	四阿山	2,354	菅平高原	群馬県 長野県	上信越高原国立公園	

番号	山名	標高 (m)	山系	都道府 県	備考	山容
43	浅間山	2,568	浅間山系	群馬県 長野県	上信越高原国立公園	
44	筑波山	877	八溝山地	茨城県	水郷筑波国定公園	
45	白馬岳	2,932	後立山連峰	長野県 富山県	中部山岳国立公園	
46	五竜岳	2,814	後立山連峰	長野県 富山県	中部山岳国立公園	
47	鹿島槍岳	2,889	後立山連峰	長野県 富山県	中部山岳国立公園	
48	劔岳	2,999	立山連峰	富山県	中部山岳国立公園 氷河が現存	
49	立山	3,015	立山連峰	富山県	中部山岳国立公園 氷河が現存 富山県の最高峰	
50	薬師岳	2,926	飛騨山脈	富山県	中部山岳国立公園	
51	黒部五郎岳	2,840	飛騨山脈	富山県 岐阜県	中部山岳国立公園	
52	黒岳	2,986	飛騨山脈	富山県	中部山岳国立公園	
53	鷲羽岳	2,924	飛騨山脈	長野県 富山県	中部山岳国立公園	
54	槍ヶ岳	3,180	飛騨山脈	長野県 岐阜県	中部山岳国立公園	
55	穂高岳	3,190	飛騨山脈	長野県 岐阜県	中部山岳国立公園 長野県の最高峰 岐阜県の最高峰	

番号	山名	標高 (m)	山系	都道府 県	備考	山容
56	常念岳	2,857	常念山脈	長野県	中部山岳国立公園	
57	笠ヶ岳	2,897	飛騨山脈	岐阜県	中部山岳国立公園	
58	焼岳	2,455	飛騨山脈	長野県 岐阜県	中部山岳国立公園	
59	乗鞍岳	3,026	飛騨山脈	長野県 岐阜県	中部山岳国立公園	
60	御嶽山	3,067	独立峰	長野県 岐阜県	御岳県立自然公園(長野 県) 御嶽山県立自然公園(岐 阜県)	
61	美ヶ原	2,034	中信高原	長野県	八ヶ岳中信高原国定公園	
62	霧ヶ峰	1,925	中信高原	長野県	八ヶ岳中信高原国定公園	
63	蓼科山	2,530	八ヶ岳連峰	長野県	八ヶ岳中信高原国定公園	
64	八ヶ岳	2,899	八ヶ岳連峰	長野県 山梨県	八ヶ岳中信高原国定公園	
65	両神山	1,723	奥秩父山塊	埼玉県	秩父多摩甲斐国立公園	
66	雲取山	2,017	奥秩父山塊	埼玉県 東京都 山梨県	秩父多摩甲斐国立公園 東京都の最高峰	
67	甲武信岳	2,475	奥秩父山塊	埼玉県 長野県 山梨県	秩父多摩甲斐国立公園	

番号	山名	標高 (m)	山系	都道府 県	備考	山容
68	金峰山	2,599	奥秩父山塊	長野県 山梨県	秩父多摩甲斐国立公園	
69	瑞牆山	2,230	奥秩父山塊	山梨県	秩父多摩甲斐国立公園	
70	大菩薩岳	2,057	奥秩父山塊	山梨県	秩父多摩甲斐国立公園	
71	丹沢山	1,673	丹沢山地	神奈川県	丹沢大山国定公園	
72	富士山	3,776	独立峰	山梨県 静岡県	富士箱根伊豆国立公園 山梨県の最高峰 静岡県の最高峰	
73	天城山	1,405	伊豆半島	静岡県	富士箱根伊豆国立公園	
74	木曾駒ヶ岳	2,956	木曾山脈	長野県	中央アルプス県立自然公園	
75	空木岳	2,864	木曾山脈	長野県	中央アルプス県立自然公園	
76	恵那山	2,191	木曾山脈	長野県 岐阜県	中央アルプス県立自然公園(長野県) 胞山県立自然公園(岐阜県)	
77	甲斐駒ヶ岳	2,967	赤石山脈	山梨県 長野県	南アルプス国立公園	
78	仙丈岳	3,033	赤石山脈	山梨県 長野県	南アルプス国立公園	
79	鳳凰山	2,840	赤石山脈	山梨県	南アルプス国立公園	
80	北岳	3,193	赤石山脈	山梨県	南アルプス国立公園	

番号	山名	標高 (m)	山系	都道府 県	備考	山容
81	間ノ岳	3,189	赤石山脈	山梨県 静岡県	南アルプス国立公園	
82	塩見岳	3,052	赤石山脈	長野県 静岡県	南アルプス国立公園	
83	悪沢岳	3,141	赤石山脈	長野県 静岡県	南アルプス国立公園	
84	赤石岳	3,120	赤石山脈	長野県 静岡県	南アルプス国立公園	
85	聖岳	3,013	赤石山脈	長野県 静岡県	南アルプス国立公園	
86	光岳	2,591	赤石山脈	長野県 静岡県	南アルプス国立公園	
87	白山	2,702	両白山地	岐阜県 石川県	白山国立公園	
88	荒島岳	1,523	越美山地	福井県	奥越高原県立自然公園	
89	伊吹山	1,377	伊吹山地	岐阜県 滋賀県	琵琶湖国定公園 滋賀県の最高峰	
90	大台ヶ原山	1,695	台高山脈	三重県 奈良県	吉野熊野国立公園 三重県の最高峰	
91	大峰山	1,915	紀伊山地	奈良県	吉野熊野国立公園 奈良県の最高峰	
92	大山	1,729	中国山地	鳥取県	大山隠岐国立公園 鳥取県の最高峰	
93	剣山	1,955	四国山地	徳島県	剣山国定公園 徳島県の最高峰	

番号	山名	標高 (m)	山系	都道府 県	備考	山容
94	石鎚山	1,982	四国山地	愛媛県	石鎚国立公園 愛媛県の最高峰	
95	九重山	1,791	九重火山群	大分県	阿蘇くじゅう国立公園 大分県の最高峰	
96	祖母山	1,756	九州山地	大分県 宮崎県	祖母傾国立公園 宮崎県の最高峰	
97	阿蘇山	1,592	阿蘇カルデラ	熊本県	阿蘇くじゅう国立公園	
98	霧島山	1,700	えびの高原	宮崎県 鹿児島県	霧島錦江湾国立公園	
99	開聞岳	924	南薩火山群	鹿児島県	霧島錦江湾国立公園	
100	宮ノ浦岳	1,936	屋久島	鹿児島県	屋久島国立公園 鹿児島県の最高峰	

ウィキペディア（フリー百科事典）より

付記：

寺島さんは百名山踏破とは別に、学生時代から日本野鳥の会・神奈川支部会員として、仲間ともに丹沢山系や秩父山系など関東周辺の山へ探鳥に出かけていた。また、健脚を保つために、休暇には友人や横浜の山友達と、北アルプス山系などに好んで登っていた。ボリビアに行く前年の夏には、単独で槍ヶ岳に登頂したと聞く。ボリビアトレッキングの準備だったかもしれない。

里見泌尿器科クリニック・スタッフの年 1 回の主に北海道ツアー（ハイキングを兼ね）には、欠かさず参加されたという。

海外トレッキング報告

刊行委員会

寺島和光さんは、多くの海外トレッキングを行った。ネパール・ヒマラヤ地方、南アフリカケープタウン、アフリカのキリマンジャロ登頂、マレーシアのキナバル山登頂、ペルーのアンデス山脈、生物観察の宝庫のガラパゴス、中国の天山山系などのことを伺っているが、多くの海外トレッキングは 1990 年代後半からの 20 年間である。

2003 年 3 月に、神奈川県立こども医療センターを定年退職され、2004 年より 11 年間の間には、ボリビア・トレッキングを実施したアルパインツアー・サービス株式会社のツアーに参加した。どのツアーも、特徴は太古の自然が残っている秘境と言われるもので、彼が長年行きたかったところと推察される。彼は時間を充分に取れる機会を待っていて、これらのツアーに参加した。アルパインツアーサービス（株）の資料から、彼が参加した 4 つのトレッキングの内容を紹介する。

2004 年 9 月 パキスタン・K2 バルトロ氷河のトレッキング

2006 年 4 月 ネパール・エベレスト展望・カラパタール登頂のトレッキング

2007 年 7 月 幻の湖・イシク・ク湖中央アジア・キルギスのトレッキング

2011 年 6 月 ペルーアンデス・ブランカ山群のトレッキング

パキスタン・K2 バルトロ氷河トレッキング 25 日間

2004 年 9 月

カラコルムはもとより地球上高峻山岳の魅力を集約したバルトロ氷河、王者 K2、輝く壁ガッシャーブルム I～V I 峰、広い頂ブロードピーク、麗峰マッシャーブルム、花嫁の峰チョコゴリザ、黄金の王座バルトロカンリ、怪峰ムスターグタワー、秀峰パイユ、鋭峰マイターピーク、岩の城窟ランゴタワーなど名だたる高峰峻峰がこの氷河を取り囲んでキラ星のごとく立ち並んでいる。中でもハイライトは大自然の壮麗な“円形劇場”コンコルディア。

道中は氷河上を歩き、道の両側に高山植物が咲き乱れる。長いテント生活で仲間の絆ができて、おいしい食事を戴く。

ここは世界の 17 の高峰のうち 6 座がひしめいており、世界で最も豪勢山岳景観を誇っている。山好きの方なら生涯一度は訪れたい、地球上のトレッキングの極致というべきコースである。



コンコルディアからの K2 峰 (左) を展望

日 程

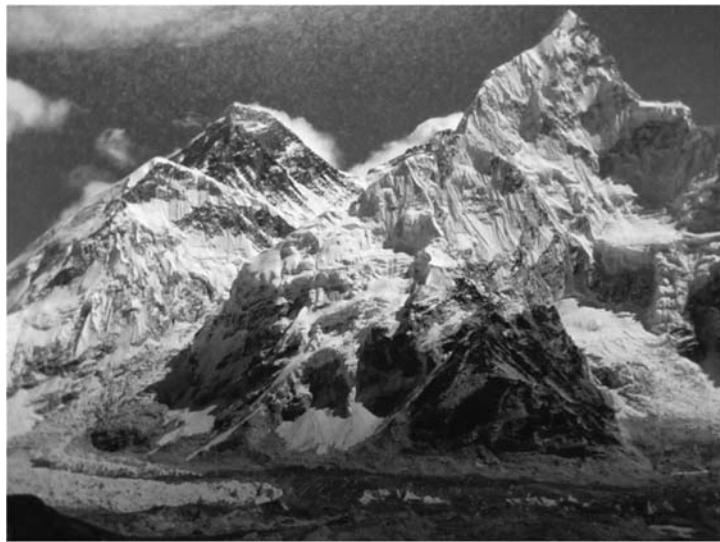
- 1 日 東京発 パキスタン・イスラマバード着
- 2 日 イスラマバード滞在
- 3 日 イスラマバード発 スカルド着 国内線山岳飛行機で、ナンガパルバット、ラカボシを眺めてスカルド着
- 4 日 スカルド滞在。デオサイ高原往復
- 5 日 ジープでシガール川に沿って砂漠地帯をダーソーを経てアスコレーへ、泊。
- 6～20 日 トレッキング
6 日ピアフォ氷河のガラ場を横切ってジョラへ。7 日渡渉してバルヂマルへ。
8 日パイユへ。9 日パイユ滞在。10 日バルトロ氷河へ登りリリゴへ。11 日緑のある最奥の地ウルドカへ。12 日雄大なパノラマのなかをゴレへ。13 日クライマックス！コンコルディアから K2 とブロードピークを眺める。14 日 コンコルディア滞在。15～20 日往路をアスコレーへ下山。この期間テント泊
- 21 日 ジープでアスコレー発 スカルド着、泊
- 22 日 スカルド発 空路 イスラマバード着
- 23 日 イスラマバード滞在
- 24 日 イスラマバード発 北京着、泊
- 25 日 北京発 東京

ネパール・エベレスト展望・カラパタール (5,545m) 登頂

トレッキング、20 日間、2006 年 4 月

エベレスト街道を歩きカラパタール (5,545m) 登頂。ここはトレッキングで訪れる場所のなかで、最も間近に世界最高峰のエベレストをのぞむ展望ピークで、周囲に展開する巨峰群のパノラマはまさに圧巻である。街道沿いに住むシェルパの生活に触れながら、ゆっくりと時間をかけて高度に順応しながらのトレッキングである。

カラパタールは、ネパール語で「黒い岩」を意味するが、その名の通り、氷河に囲まれた黒い岩の丘である。至近距離のエベレスト展望に加えてローツエ、ヌプツエ、プモリ、チェンツエ、リントレン、アマダブラム、カンテガなどの名峰、そして眼下には、クーンブ氷河と、360 度の大展望を堪能できる。



カラパタール山頂からエベレスト (右) とヌプツエを望む

日程

- 1 日 東京発 ネパールの首都カトマンズ着
- 2 日 カトマンズ発 空路 30 分 ルクラ (2,840m) 着 終日 高所順応のため散策
- 3 日 ルクラ発、シェルパ達とともに、トレッキング開始。ドワードウ・コシ沿いの道をパクディン (2,610m) を経由し、モンジョ (2,835m) へ。モンジョ泊
- 4 日 モンジョ発、谷沿いの道をジョサレ (2,840m) へとたどり、世界遺産のザガルマータ (エベレスト) 国立公園に入る。高度差 600m の坂をゆっくりと登り、シェルパの里ナムチェ (3,440m) へ到着。(徒歩時間 4 時間)

- 5日 ナムチェ発 ホテル・エベレスト・ビュー (3,840m) を経て、キャンズマ (3,600m) へ。(徒歩時間 約5時間)
- 6日 キャンズマ発 プンキティンガ (3,250m) へ、いったん下って登りタンボチェ (3,870m) へ到達。(徒歩時間 4時間)
- 7日 タンボチェ発、最奥の定住村、パンボチェへ到着 (徒歩時間 3時間)
- 8日 パンボチェ発 広々とした河原のデインボチェ (4,343m) 到着 (徒歩時間 3時間)
- 9日 デインボチェ滞在、高所順応日。全ヒマラヤで最も美しいヒマラヤ、“ひだの山々”と言われるイムジャ・コーラのカンレヤムウなどを一望するビブレ (4,570m) を往復。(徒歩 4時間)
- 10日 トレッキング開始。河原からトウクラ (4,620m) を経て、クーンブ氷河末端の斜面をのぼりつめロブチェ (4,930m) へ到達。(徒歩時間 6時間)
- 11日 ロブチェ発。ゴラワシェップ (5,100m) を経て、カラパタール (5,545m) 登頂。(徒歩時間 7時間)
- 12日 ゴラワシェップ滞在
- 13日 ゴラワシェップ発、往路を下り、ペリチェ到着 (徒歩時間 5時間)
- 14日 ペリチェ発、往路を下り、サナサ (3,600m) に到着。(徒歩時間 6時間)
- 15日 サナサ発 ナムチェ到着 (午前中)。午後はナムチェ散策 (徒歩時間 2時間)
- 16日 ナムチェ発 ルクラ着、14日間のトレッキングの終了 (徒歩時間 7時間)
- 17日 ルクラ発 空路 カトマンズ着
- 18日 カトマンズ 自由行動
- 19日 カトマンズ 深夜まで自由行動 街の散策、カトマンズ発
- 20日 香港着発 東京着

幻の湖イシク・クル湖・中央アジアキルギスと

天山大氷河核心部へ、

ヘリコプター飛行、12日間、2007年7月

幻のイシク・クル湖

イシク・クル湖は、ソ連時代には外国人は一切立ち入り禁止であり、幻の湖と言われていた。中央アジアの真珠とも言われ、透明度、標高とも世界2番目の湖です。また湖中に集落跡があり現在もまだ解明されていない不思議な湖です。シルクロードに強い興味を抱いていた井上靖も訪れることができなかった場所です。

中央アジアのキルギス・天山山脈山麓のハイキング

イシク・クル湖の南側にテレスケイ・アラタウ天山山脈が広がっている。今回のハイキングで訪れる場所は、針葉樹の牧歌的な風景のなか、雪山や高山植物をゆっくりと眺めながらハイキングします。まるで、カナディアンロッキーをハイキングしている光景です。また、このあたりは、まだ日本人にはほとんど知られていない場所であるが、手つかずの自然と素朴な遊牧民の暮らしが残っている。天山テレスケイ山脈は緯度が高いため、標高のわりには発達した氷河も迫力がある。

なお、ハイキング道は、ほぼ平坦であり、行程時間も短く、標高も 2,800m 前後での行動となるため、トレッキング初心者にもよい。

花に囲まれた快適なカルカラキャンプ地

滞在中は、エーデルワイスをはじめ、ヒナゲシ、パンジー、フウロソウなどの多種多様な高山植物に囲まれたカルカラでは、周辺の丘陵地帯や湖などのハイキングを楽しめる。カルカラでは、夏の間だけ設営する快適な常設テントに宿泊する。共同シャワーやサウナなども完備されている。また、乗馬で周辺にあるキルギス族のユルタ（移動式テント）などを訪れることも可能である。

バルトロ氷河をしのぐ、全長 60 km におよぶ南イニリチェク大氷河のど真ん中に着陸
大型ヘリコプターにて、ハンテングリの北面および南面のベースキャンプを訪れる。
大迫力の雪山を仰ぎみることができる。

ハンテングリ峰とポベータダ峰

ハンテングリ峰 (7,010m) は、世界最北の 7,000m 峰であり、天山山脈中央部東寄りのキルギスとカザフスタン両共和国の国境に聳えたっている。ポベータダ峰 (7,439m) は天山山脈の最高峰で、キルギスの東側、中国との国境にあります。また、長さ 60 km を超える南イニリチェク氷河は天山山脈最大の氷河であり、氷河上の南ベースキャンプは、ハンテングリ峰とポベータダ峰を見渡すところに位置している。まさに氷河のど真ん中、神の領域である。また、北イニリチェク氷河上のベースキャンプは、ハンテングリ北壁から直線距離で約 2 km と超至近距離で仰ぎ見る絶景の場所に位置している。



イニリチェク氷河上のベースキャンプからの天山山脈群（左：ハンテングリ）

日程

- 7月27日 ソウル発 アルマテイ着、中央アジアのカザフスタン国の最大の都市、泊
- 7月28日 アルマテイ発 朝、専用車で、キルギス共和国の国境へ。キルギスに入国しチチカカ湖に次ぐ世界第二の高山湖、世界第二の透明度でもあるイシク・クル湖へ。到着後、ソ連時代の政府要人の避暑地であった湖のホテルで宿泊。
- 7月29日 イシク・クル湖から天山山脈への登山基地であるカラコルへ。カラコル着
- 7月30日 カラコル発、専用車でテレスケイ・アラタウ山脈の登山口（標高約2,500m）へ、トレッキング開始。天山山脈山麓の緑豊かな草原とカナディアンロッキーを思わせる風景のなか、キャンプ地まで、ほぼ平坦な道を歩く（標高約2,700m、徒歩約2時間）。キャンプ地は緑と花の快適な場所である。テント泊
- 7月31日 終日、草原キャンプ地に滞在。のんびりと周辺を散策し、カラコル峰（5,215m）の展望地付近まで往復（往復約2.5時間）。テント泊
- 8月 1日 草原キャンプ地発、徒歩約1時間その後、国境をこえ、カザフスタン側の中央天山山脈の玄関口カルカラ（2,200m）に到着。俊峰、天山の山並みがみられ花が咲き乱れる高原に位置する登山基地である。固定テント泊。
- 8月 2日 カルカラ発、ヘリコプターで、中央天山の核心部である北イニリチェク氷河のベースキャンプ地（3,980m）へ到着。ハンテングリ（7,010m）の北壁直下に位置する絶景のベースキャンプ地である。圧倒的な迫力のあるハンテングリがそびえ立つ。その後、南イニリチェク氷河へ。南のベースキャンプからハンテングリの南面と天山最高峰のポベータ（7,439m）のパノラマが広がる。その後、カルカラに戻る。固定テント泊。
- 「8月3～4日」 予備日 時間があれば、キルギス草原を散策し、キルギス

族の遊牧テント（ユルタ）訪問。

8月 5日 専用車でアルマテイに戻る。

8月 6日 アルマテイ市内見学、深夜便にてソウルへ。

8月 7日 ソウル着、帰国

付記：寺島和光さんは、学生時代に天山山脈踏査の計画に参画したが中止になった。1990年の横浜市立大学天山踏査の会（山岳部と探検部合同を核に）により、天山山脈未登頂・トムール峰の初登頂と学術調査が実施された。ボペーダ峰は中国名トムール峰という。この時は、雪崩に3人が巻き込まれて死亡した。この実施に際して、寺島さんは実施協力者として参画していた。

ペルーアンデス・ブランカ山群のトレッキング、11日間

2011年6月

ペルーのブランカ山群の二つの谷を三泊四日かけてトレッキングする。テント4泊の比較的短い行程であるが、美しい名峰が毎日目の前に次々に現れる。トレッキングの前には、ワラスをベースに高所順応を行い、標高4,750mの峠も越える。現地ガイド・コックもつく。



タウリラフ（5,830m）直下、トレッキングの最高地点のウニオン峠（4,750m）より展望

華やかなヤングヌコ谷から、美しいサンタクルス谷へ

ブランカ山群の核心部にある二つの谷を歩くトレッキングコース。有名なヤングヌコ谷周辺の高峰に加えて、美しいサンタクルス谷周辺の名峰アルパマヨ、キタヤラフ、タウリラフなど、毎日雪山の眺めが楽しめる。専用車を効率よく使い、高所順応を図る。

日 程

- 1日 東京発 ペルー・リマ着
- 2日 リマ発。専用車でハイウエイを北上。ユネスコ世界遺産に登録されたワスカラン国立公園の山並みを一望するコノコーチャ峠（4,050m）を超えて、ペルー最高峰ワスカランを望むワラス（3,050m）へ到着。（約8時間）
- 3日 ワラス発。高所順応を兼ねて、特別入域許可が必要な静寂のラフコルタ湖（4,250m）を、往復。名峰ワンツァンの大氷壁から氷塊が氷河湖に崩落する光景は圧巻であるその後、カワルス到着。
- 4日 カワルス発。カワルスから専用車でウルタ谷からウルタ峠（4,890m）を往復。氷雪が美しいコントライエルバス、鋭鋒ウルタ、チョピカルキなどの氷雪峰をのぞむ。広々としたウルタ谷をハイキング（徒歩約1時間）の後に、国立公園手前の好展望地ケウシュ（3,500m）へ到着。
- 5日 ケウシュ発。専用車でワスカラン、ワンドイなどをのぞむアンデス屈指の大パノラマが広がるヤングヌコ峠（4,767m）を越えて、チョピカルキを望むブアケリア（3,700m）へ。ロバのキャラバンとともにトレッキング開始。鋭いチャクララフ東峰を眺め、ゆるやかなワリパンバ谷を進み、ピラミデ、パロンを望むパリア谷の出会い（3,800m）へ徒歩5時間。パリア谷出会泊。
- 6日 パリア谷出会発、トレッキング、タウリラフを仰ぎながら谷をつめ、コースのハイライトのひとつ、ウニオン峠（4,750m）へ。タウリラフ、キタラフなどの雪山と氷河のパノラマが展開する。広い圏谷のタウリパンバ（4,100m）へ下る。徒歩8時間。
- 7日 タウリパンバ発、トレッキング、アルパマヨ、キタラフ、タウリラフなどを眺めながら、湖と草原と美しいサンタクルスのU字谷を歩きヤマコラル（3,600m）へ到着
- 8日 トレッキング、ヤマコラルよりカシャパンパ村（2,900m）に下りトレッキング終了。
- 9日 ワラス発 専用車でリマ到着（8時間）深夜リマ発
- 10日 北米経由で、機中泊
- 11日 東京着

ヒマラヤトレッキング

回想の旅—ヒマラヤ

寺島 和光

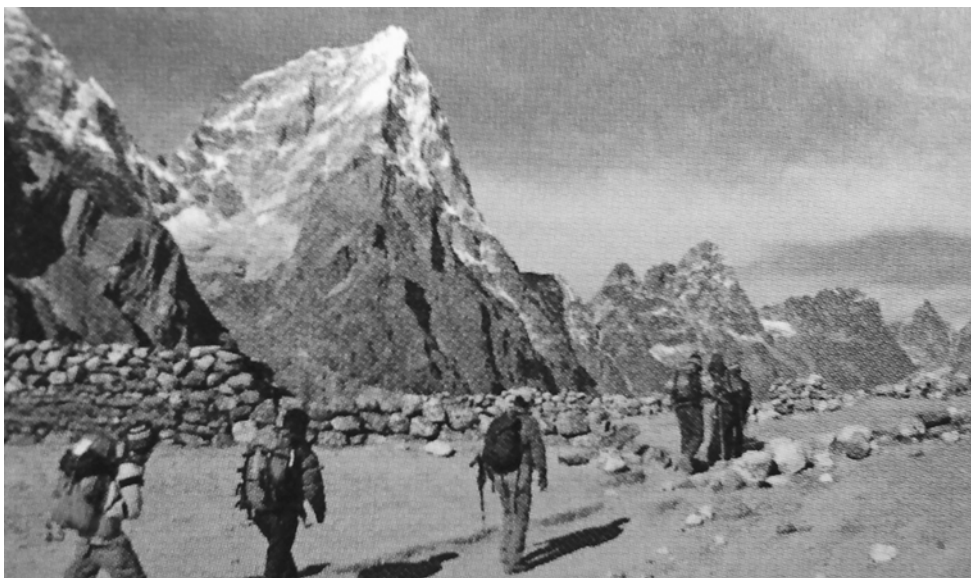
2006年秋、トレッキング開始3日目。テント場から息をきらして少し登り、小高い丘に立つ。ここは富士山頂より少し低い標高3,500mのヒマラヤ山中。それにしてもなんと迫力のある眺めか。6,000m以上の高峰群がわれわれを取り囲む。高度差は3,000m。東の空には真っ白な氷峰が屹立している。6,623mのタムセルクは、鋭い双耳峰と優美な「ヒマラヤひだ(襞)」をまとって見る者を圧倒する。頂上ははるか天空にあり、そこを見るには首をかなり後ろに曲げなければならない。それほど仰角が大きい。畏怖の念にうたれて、しばらくは言葉も出ない。タムセルクと並んで、カンテガ(6,779m)とクスムカングル(6,370m)が堂々とそびえている。名峰アマダブラム(6,856m)が優美な姿で迫ってくる。西には膨大な山容のコンデ・リ(6,187m)が朝日をあびて黄金色に輝いている。そして北にはヒマラヤの盟主エベレスト(8,848m)が、ローツエ(8,414m)ヌプツェ(7,861m)を従えて、その黒いピラミッドを紺碧の空に突き上げている。ここからエベレストまではまだかなり離れているが、その姿はすでに貫禄十分である。荘厳な神々の座を前にして、同行のトレッカーが皆興奮し、夢中になって写真を撮っている。ここが2度目の私でもこの眺めはいつまでも見飽きないが、同時に初めて来た時のことをしきりに思い出している。あの時一緒だった、今は亡き友は、きっと千の風となってヒマラヤの空を舞い、私を見守ってくれているにちがいないと。

ネパール・ヒマラヤやパキスタン・カラコルムへのトレッキングにはこれまで5回出かけているが、今回は私にとって特別であった。エベレスト街道と呼ばれるこのコースは、実は26年前(1980年)にも歩いているからである。長い休暇だったため同僚の北島直登先生に恨まれながら、横浜の山仲間3人と一緒にツアーに参加した。それまで日本の山やロッキー山脈しか知らなかった私にとって、ヒマラヤの高嶺はあまりにもスケールが大きく、素晴らしく、驚きの連続であった。しかし当時は高山病に対する知識や対策が不十分であり、途中で体調を崩して落伍する者が続出した。予防薬のダイアモックスはなく、救急用の酸素も携行しなかった。友人の一人は急性高山病になり、意識障害と呼吸困難な危険な状態に陥ったが、幸い無事回復した。結局この時は目的地のカラパタール(5,545m)の登頂は断念した。帰国後、この次は皆でぜひカラパタールまで行こうと話合っていた。しかし悲しいことに(別の)友人の一人が

癌で早世したために、この夢は永久にかなわなくなった。他の二人とも多忙で再びヒマラヤに行く機会がなかったため、今回は私がいわば代表して再度チャレンジすることになった。

毎日変わる景色に目を奪われながら、そして26年前の旅を回想しながら、薄い酸素の中をゆっくり歩き、6日目に前回の最終到達点のディンポチェ(4,343m)に着いた。ここまで来るとわずかに草や苔しか生えない荒涼とした土地になるが、近くにはヒマラヤひだの美しさでは山城随一の景観を誇る6,000m台の無名峰が連なり、マカルー(8,208m)、タウエツェ(6,542m)、チョラツォ(6,440m)などの峰々が眺められる別天地でもあった。ここからいっそう苦しくなったトレッキングをさらに3日間続け、ついにカラパタル(5,544m)に到達した。エベレストまでの距離はわずか10km、大気中の酸素濃度はすでに平地の半分しかなく、かがんで靴紐を縛るだけの動作でも息切れがした。頭がぼろっとして思考力が低下した中を最後の力をふりしぼって山々を撮影した。

この時のために大事に持ってきた26年前の集合写真を頂上に埋め、記念に小石2個拾った。1個は自分のために、もう1個は友の墓前に供えるために。私にとっては回想の旅であり、追悼の旅でもあったヒマラヤトレッキングはかくして終わった。(カラーグラビア参照)



トレッカーはチョラツォ(6,440m)を左手にヒマラヤ山系、バリチェ付近を進む。

アルパインツアーサービス(株)提供

寺島和光先生を悼む

村上 司郎

元 日本野鳥の会神奈川支部長
前 横浜植物会 会長

寺島先生が亡くなられた。それも南米の山地を旅行中とのこと、まったく思いがけない出来事で、驚きを禁じえない。

先生とは、私の所属する趣味の団体「日本野鳥の会神奈川支部」と「横浜植物会」でのお付き合いである。野鳥の会の方が長く、もうかれこれ 60 年を超えるだろう。横浜植物会の方は、私が横浜植物会の会員であることを知って入会されたのである。こちらも 30 年を超える。両会とも永い歴史を誇り、伝統ある立派な会である。

ただし先生は本業（医師）の仕事が主であり、なかなか会への参加が難しく、先生とご一緒できたのはそう多くはない。それでも毎年の年賀状には、どこを旅行したとか（特に外国）、どここの山に登ったとか、元気なお便りばかり、今回の訃報はほんとうにショックであった。

野鳥の会神奈川支部では、当初から野鳥の知識に秀でておられることもあって、幹事に就任していただいた。隔月 1 回の幹事会では、よくお会いした。始めは先生が医師であるとは知らず、随分頭脳明晰な方だと思っていたら、医師だと聞いて得心がいったことである。とにかく明るく爽やかな感じの方で、会の行事に参加されたときも常にこやかで、しかも熱心に勉強され、素晴らしい会員であった。

植物会の行事にもあまり参加された記憶がないが、外国旅行の折などにはよく参加されておられた。私の特に印象に残っているのは、中国の旧満州長白山の旅である。先生とご一緒に長白山の頂上に登った時の感激は忘れ難い。案内の担当、堀川委員が、「この旅はたいへん心強い方がご一緒だ。医者寺島先生だ」と紹介すると、先生は恐縮されながら、「私は泌尿器科の医者なので、どれだけ役に立つか」と答えられていた。謙虚な方である。私が虫に刺され、中国の医者に掛かった時も、ずっと付き添ってくださった。

野鳥の会でも横浜植物会でも、それぞれ野鳥や野外植物がお好きな方であれば、入会自由、年齢や職業などは問わない。したがって先生の医師としての能力や業績については、私にはまったく判らない。しかし医師としても素晴らしい方で、アメリカ留学もされ、最後に神奈川県立こども医療センターで要職に就かれている。といったようなことは仄聞している。今回の突然のご逝去で小児泌尿器科関係者にとっては、大きな損失であろう。

先生は福井県大野市のご出身と聞く。私はこの 6 月末、新しく開通した北陸新幹線の乗

車を兼ねて、かねてよりの希望、勝山市の恐竜博物館を訪れた。そのついでに寺島先生の故郷大野市にも寄ってみることにした。

駅を下り、ちょうど前を歩いていた年配の方に通りを尋ねながら、“実は横浜の医師の方に紹介されて、この地を訪問した”と話したら、即座に“それは寺島さんでしょう”と返されびっくりした。“その寺島さんのお父様は、この大野の市長さんで、立派なお邸にお住いだ”などとお話がはずんだ。

帰宅していくらか経たないうちに、先生の訃報に接し、先生とのなにか因縁めいたものを感じたことであった。

先生、永い間お付き合いをいただき、ご一緒に勉強もさせていただき、ほんとうにありがとうございました。感謝申し上げますながら、ご冥福をお祈り申し上げます。



横浜植物会 中国東北の旅 長白瀑にて 1987年7月27日
(前列右より3人目・寺島先生, 5人目・筆者)

寺島和光先生と横浜植物会の関わりについて

渡邊 重彦

横浜植物会事務局長

横浜植物会は、明治42年（1909）に設立された日本最初の植物同好会です。設立当初より、牧野富太郎を指導者とし、神奈川県立第一中学校教諭の松野重太郎が中心となり、原虎之助、福島亀太郎、岡 太郎、笠間忠一郎、鈴木長治郎の6名が発起人となって創立され、初期の会員には久内清孝、澤田武太郎、清水藤太郎、宮代周輔、靱山泰一、朝比奈貞一、岡田要之助、館脇 操など、そうそうたるメンバーが名を連ね、100年以上の歴史があります。寺島和光先生は会員番号293番ですので、1982（昭和57）年頃に入会されたと思われます。

会の活動記録誌「年報」で探した結果下記の例会に参加されていました。

- ・1982（昭和57）年7月例会 高山植物の宝庫“早池峯山”を訪ねて
- ・1986（昭和61）年5月例会 川崎市黒川植物観察会
- ・1987（昭和62）年7月海外 中国東北地方 原始境長白山観察会
- ・1988（昭和63）年4月例会 震生湖・渋沢丘陵の春を訪ねて
- ・1989（平成元）年1月例会 報告会・東シベリアの自然
- ・1990（平成2）年3月例会 報告会・中国四川省青いケシの咲くころ
- ・1994（平成6）年3月例会 報告会・大雪山の高山植物
- ・1995（平成7）年5月例会 横浜市・瀬谷、追分、矢指市民の森観察会
- ・1996（平成8）年1月例会 報告会・スイスアルプス高山植物花旅紀行
- ・1999（平成11）年1月例会 報告会・スライドで見る日本の高山植物
- ・2000（平成12）年1月例会 報告会・ニュージーランドの植物観察旅行
- ・2001（平成13）年9月海外 ワイルド・フラワー南西オーストラリア観察の旅
- ・2002（平成14）年1月例会 報告会・オーストラリア西部植物観察旅行
- ・2003（平成15）年1月例会 報告会・シッキム・ヒマラヤの植物報告
- ・2005（平成17）年2月例会 報告会・中国雲南省シャングリラ地方の植物報告
- ・2006（平成18）年2月例会 報告会・アンデスのヴィオラとチリの花報告
- ・2009（平成21）年10月 創立100周年記念式典・講演会

先生は主に海外の植物観察会や海外の植物観察報告会に多く参加されていました。

謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

横浜植物会における寺島先生

青木 清勝

元横浜植物会会長

寺島先生が横浜植物会にいつ頃、入会されたのかハッキリとは存じ上げないが、会員番号（293番）から推測すると1982（S57）年ころに入会されたと思われる。

前の植物会代表をしていた、村上司郎氏が日本野鳥の会の神奈川県支部長をされていた時に、野鳥にも関心を持っておられた寺島先生が、野鳥の会の幹事をされていて、その関係で植物会に入会されたようである。

先生は職業柄お忙しいので、植物会の例会には余り出席されていなかったが、何回か参加されている内に私と顔見知りとなり、親しくしていただき、話をするようになった。

先生は神奈川県立こども医療センターの小児泌尿器外科の部長をされていただけに、非常に温厚な方であった。

私の妹がこども医療センターでアルバイトをしていた時に、偶然にも先生の所に入出入りさせていただき、私が兄だと言うことを話してビックリされ、以前にもまして、親しくしていただき、例会にお出でになられた時には必ず話をするようになった。

先生が植物会における海外の観察会に参加されたのは、1987年7月24日から8月1日までの中国と北朝鮮の国境に位置する、長白山（別名、白頭山）が最初で、次にオーストラリアのパースを中心にした「オーストラリア南西部への観察会」に参加されている。“青木さんが、一緒に良かった”と言われていたが、私も幹事をしていたので、万が一病人が出て先生が居てくれる事により安心感が持てた。

成田からパースに直航便で飛び、すぐにパース市内に有るキングスパーク自然公園に行き、植物観察や市内を一望できる場所で参加者全員の記念写真を撮ったり、カンガルポーやドンキオーキットなど、日本では見られない美しい花などの写真を撮ったりしてオーストラリアの初日を過ごした。

ホテルでの部屋割りは二人一部屋であったが、先生はお一人で一部屋を希望されノンビリされていた。

パースを中心として、ピナクルやスターリングレンジ、アルバニー、マーガレットリバーなどへ行き、多くの珍しいランやオーストラリア特有の植物を観察して過ごした。

マーガレットリバーはワインの産地で、日本にも多く輸出しているとのことで、ワインテイastingと昼食を楽しみ先生と話をしながら過ごした。

この観察会最後の晩は、パース市内の中華レストラン龍園酒家で最後の食事をした。先生とは隣の席で、この旅行の様々な思い出を話し合えた。

国内の観察会には1982年7月の23日から二泊三日の高山植物の宝庫「早池峰山の観察

会」に参加されている。早池峰神社社務所に泊まり、頭垢離（こうべこうり）を通過して頂上に至り、小田越えコースを経由して河原坊からバスで鳴子温泉に泊まり翌日帰浜した。

室内例会では、1985年3月に当時、神奈川県立博物館の学芸員をしていた、高橋秀男氏の「秘境、中国雲南省、昆明シーサンパンナの植物を訪ねて」と言う講演会に出席されている。

その後、植物会でも同じ昆明シーサンパンナへ1985年8月23日から9日間の観察会を行ったが先生はお出でにならなかった。

このシーサンパンナはラオスとビルマに国境を接し、象や虎の出る秘境の地で、先生にも興味の有る場所だと思われるが、諸々のご事情がお有だったと思われ参加されなかった。

1994年3月20日に、本会顧問をされていた林辰雄氏の「大雪山の高山植物と栃木の雑木林ウオッチ」と言う講演会に出席された。2009（H21）年10月の横浜植物会創立100周年記念式典・講演会への出席が最後でした。

生前の先生を偲び心よりご冥福をお祈り申し上げます。

南西オーストラリアの植物観察会記録写真（青木）

期間：平成13（2001）年9月19日～26日の8日間



スターリングレンジ国立公園での記念撮影（9/22）

寺島先生は後列の左から5人目



インド洋をバックに記念撮影（9/24）
寺島先生は後列の左から2人目



最終日の晚餐スナップ「LEE GARDENS-龍園酒家」パース市内（9/24）
左：寺島和光先生 右：青木清勝

国際学会の設立に関わって

寺島 和光

昭和 39 年卒業

私は 1964 年（昭和 39 年）に市大を卒業し、当時座間市にあった在日米国陸軍病院で 1 年間インターンの研修を行ったが、その時に米国で臨床を行うのに必要な ECFMG の試験を受けて資格を取った。大学院修了後米国ヒューストンの Baylor 医大で 3 年間のレジデント生活を送った。この間、ローテーションで小児病院でも働いたが、先天性の泌尿器疾患を数多く経験し、小児泌尿器科学に興味を持った。1972 年に帰国し、幸い神奈川県立こども医療センターに勤めることができた。2003 年に退職したので、私は医師人生の大半を小児泌尿器科医として過ごしたことになる。

日本の小児泌尿器科学は、1970 年代にはまだ黎明期にあり研究会はあったものの、専門の学会はまだなかった。これに比べて米国では既に Society for Pediatric Urology が 1950 年代初めに設立されていて、この分野での日米の医学レベルの差は歴然としていた。泌尿器科に限ったことではないが、それぞれの専門分野における学会の存在は、意義が大きい。学会活動がその領域の進歩・発展に多大に貢献していることは明らかである。例えば、もし日本泌尿器科学会がなかったとしたら、と想像してみればよくわかる。

小児病院に医長として赴任したものの、当初はまだまだ経験に乏しく、国内では教えを乞えるような優れた指導者も少なかったので、私は機会をみて米国の小児泌尿器科関連の学会にカメラとテープレコーダーを持参してたびたび出席した。さらに著名な小児泌尿器科医を訪ねて 1~2 週間手術などを見学させてもらった。ある時は静岡県立こども病院の泌尿器科医長（当時）の臼田和正先生と一緒に、サンディエゴの UCSD の George Kaplan 教授のご自宅にしばらく泊めてもらって診療を見学したのも懐かしい思い出である。

1980 年代には日本の小児泌尿器科学の水準が徐々に高まってきた。1990 年に入ってやっと日本小児泌尿器科学会が設立された。その結果、この分野での進歩が目に見えて加速された。学会の存在の重要性を改めて認識したことで、私は国内学会だけでなく国際学会設立を構想するようになった。当時、米国には複数の小児泌尿器科関連の学会があり、ヨーロッパには欧州小児泌尿器科学会（European Society for Paediatric Urology）があったが、アジア地域の国際学会はなかった。国際泌尿器科学会やアジア小児外科学会があったが、ここで発表される小児泌尿器科関連の演題のレベルはけっして高いとはいえなかった。

1996 年に私は第 5 回日本小児泌尿器科学会総会を主催した。この時は佐野克行先生、中井川昇先生をはじめ同門会の多くの先生に大変お世話になった。国内学会ではあったが、国際学会設立構想を念頭に置いて、あらかじめアジア各国の小児泌尿器科医や小児外科医

に呼びかけて参加してもらった。そしてプログラムに「アジアセッション」を設けて英語で発表してもらった。バイリンガルドクターの宮井啓国先生や矢尾正祐先生には同時通訳をしていただいた。

学会終了後にアジア各国の主な医師と話し合い、そこでアジア地域をカバーする小児泌尿器科の国際学会設立を提案した。出席者の賛同を得たので、中国、香港、韓国、フィリピンの医師と私を中心になって設立準備委員会を立ち上げ、その後何回か会合を持った。最後の打ち合わせのために、1997年の12月末に北京に2泊3日で行ったこともある。学会の名称はいろいろ検討した結果、「アジア太平洋小児泌尿器科学会」(Asia Pacific Association of Pediatric Urologists, APAPU)とした。これはアジア地域だけでなく、環太平洋地域も含めたいと考えたからである。新しい学会設立のためには規約 (constitution and bylaws) が必要である。幸い香港とフィリピンの委員は英語を母国語と同程度に使うことができたので、面倒な事務仕事もスムーズに行われた。1998年にAPAPUは正式に発足し、1999年に第1回の学術集会在北京で開催された。その後集会は毎年開催されていて、開催国は日本、中国、韓国、台湾、フィリピン、シンガポール、アメリカ、オーストラリアなどに及ぶ。設立当初はまだ参加者数は少なく、発表内容のレベルも低かったが、学会は次第に発展し、参加国と参加者数は増加し、レベルも高まった。特に中国と韓国の躍進が目立った。

2014年の第16回学術集会は再び日本で開催されたが、この時は20か国以上から110の演題があった。アジア以外の地域との連携もこの学会の重要な活動の一つなので、欧米からも数名の小児泌尿器科医が招待された。多くの優れた発表や講演があり、集会は盛会裏に終わったが、設立に関わった私としてAPAPUがこのようにすばらしい発展を遂げたことに感慨深いものがある。

日本も含めてアジアの小児泌尿器科学のレベルはアメリカにはまだ遅れをとっているが、ヨーロッパとはほとんど肩を並べるまでになった。世界の人口の約5割を占め、しかも子供の数が多いアジアの多くの国では小児泌尿器科医、小児外科医の数がまだ絶対的に少ない(モンゴルとカンボジアは小児泌尿器科専門医がそれぞれ2人しかいない)。

この学会のさらなる発展が多くの国の医学レベルの向上に資するだけでなく、小児泌尿器科学に関心を持つ医師の増加につながる。

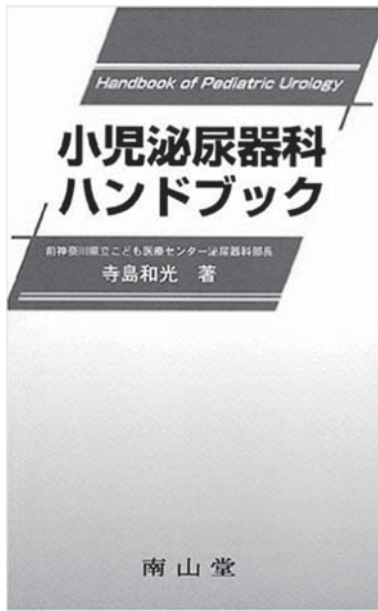
拙文をご覧の若い先生方で小児泌尿器科に関心があるか、興味ある小児疾患を経験したら、APAPUに参加・発表されたいかがだろうか。参加者のほとんどは英語が母国語ではないので、皆さんも気楽に英語で発表することができる。またアジアの国々の医師と知り合いになれることも楽しいものである。

(横浜市立大学医学部研究雑誌、転載)

医師：寺島和光が刊行した専門書

解説：里見佳昭

里見腎泌尿器科クリニック



小児泌尿器科ハンドブック

2014年12月3版、245頁 南山堂

小児泌尿器科は、停留精巣、膀胱尿管逆流など先天性疾患が7割を占め、手術が必要であるが、この本は写真や図が豊富に使われ詳細に説明された教科書となっている。性分化異常にも最近の考えがうかがえる。序文に、「患児にはこの先長い人生がある。一生闘い続けなければならない病気をもっていることもある。1歳で治療を受けた子供はこれから70年も80年もいけるのであり、治療の結果のわずかな違いが子供の運命を左右することさえある。医師は自分に課せられた責任の重さを肝に銘じて治療にあたらねばならない」と書かれている。この精神がにじみでる大変貴重な本である。



小児科医のための小児泌尿器疾患マニュアル

2015年10月 改定3版、133頁 診断と治療社

小児科医を対象とした小児泌尿器科の解説書である。先天性疾患が多いため写真が多く使用されてわかりやすく説明されている。特にわかりにくい性分化異常の解説は泌尿器科医にも一読の価値がある。

アマゾン購入者レビュー：旧版と比べると細かな部分より、より新しいデータが採用されているが、性分化異常については大幅に内容が新しくなっている。著者は出版前に永逝されているが、後継者による協力によって出版されたもの。

追悼文

里見佳昭（同級生）

里見腎泌尿器科クリニック院長

私の無二の親友である寺島和光君が急逝し、まだ全く信じられず、彼は今頃何をしているのだろうかと思いつつ、生活をしています。お悔やみなど言えません。まだ、この辺に生きているのですから。カルテのなかで、毎日彼のびっしり書いた几帳面な文字と論理的な文に出会い、その意見に従って診療しているのです。大学のクラスの友、友達から彼がクラスで最も長生きすると思われており、里見が亡くなったというなら納得するのだがというのが一致した感想です。彼は無駄な付き合いはしないくせに（合理主義者なのでしょうか）、なぜか愛され尊敬されていました。成績が優秀で誠実な人柄だからでしょうか。

彼とは大学入学以来 58 年もの長い付き合いで、特に最近 11 年間は私のクリニックを週 1 回手伝ってくれていましたから、山の話や学会の話をし、年 1 回の 3 日間の職員旅行も必ず参加してくれ、主に北海道でしたが楽しい酒を飲みました。

節徳お兄さんのお手紙によると「和光は、万事控えぎみで自慢らしいことは話さず」ということは全くの誤解で、私の医院の職員達に話すと「エー！」と驚きの声を上げています。細かいことを指示し、自分が正しいと思ったら絶対にゆずらず、かなり頑固な部分もありました。確かにあまり自慢話はしませんでした。控えめに静かに生きていたわけではありませんから安心して下さい。最近、他大学の小児科の教授と疾患名の英語の日本語訳についておかしいというやりとりをしていたようで、いくらいっても返事が来ないと、毎週のように、私に怒りをぶつけていました。確かに彼の言い分の方が正しいのですが、決着がつかず残念でしたでしょう。

今考えると彼は、長い人生の設計図を造り、それに沿って着実に進んでいったのだと思います。何の計画性もなく出たとこ勝負の私とは基本的に生き方が違っていました。間近の第一の目標は米国へ留学することだったと思います。学生時代から英会話を勉強し、横浜市立大学大学院へ入学しました。たぶん、学位を早く確実に取得するために。博士課程のテーマは、膀胱癌の細胞の発育に関する研究でした。その間にアメリカの医師国家試験に合格、アメリカでレジデントをするためには外科の研修が必要であったため聖路加国際病院外科で研修し、大学卒業後 5 年、1969 年にアメリカ、テキサス州ヒューストンのベイラ医科大学へ留学しました。泌尿器科レジデントとして働き、初めのうちは黒人たちの英語がわからず、会話ができなかったようですが、その後、急激にわかるようになったと聞いています。今、月に 1~2 名米国人が来院しますが、得意の英語で大変親切に説明していたようです（看護師さん談）。レジデント 3 年が終了の頃、神奈川県立こども医療センターの医長の席があき、急遽、横浜市立大学医局の要請で帰国しました。1972 年当時、まだ、日本では小児泌尿器科は、黎明期で、彼を含め 10 人くらいのひとで、日本小児泌尿器科学

会を築きあげたと思います。一般の泌尿器科が属する日本泌尿器科学会と小児泌尿器科学会（小児科の先生が多く入っているのですが）は異なりますので、残念ながら彼の学会での講演は直接には聴いたりしておりませんが、書いた論文はたくさんあり 250 編あまりと聞いております。小児の奇形に関するもの、特に尿道下裂の手術、膀胱尿道逆流現象の手術、性分化異常など広きにわたっていました。1996 年第 5 回日本小児泌尿器学会会長になっています。2004 年には聖マリアンナ医大の客員教授になり、今なお、聖マリアンナ医大で学生に講義をしていました。

私が横須賀共済病院に勤務していた時代は、小児の手術はほぼすべて彼を招へいしてやってもらおうか、指導してもらっていました。手術の手際のよさ、確実さ、丁寧さは驚きで、「皮膚縫合なんてどうだっていいんだよ」という粗雑な私の手術は、その後後輩に馬鹿にされるようになりました。

最近では、外国での顔の広さと得意の英語力で、太平洋小児泌尿器科学会を設立し、大きな喜びだったようです。寺島先生の名では、2 冊出版されています。ひとつは小児科の医師を対象とした「小児科医のための小児泌尿器科疾患マニュアル」（診断と治療社）、そして泌尿器科向けの小児泌尿器科ハンドブック」（南山堂）です。妥協を許さぬ彼の性格で、気に入らないところをなおし、第 3 版まで発行しており、大変だったと苦勞話を聞きました。医者、学者としての仕事はやり残すことなく十分にやりました。そして当院の看護師の「自分の好きな山で逝ったのだから本望では」という意見もありますが、日本百名山を踏破し、ヒマラヤのトレッキングには何度もでかけ、カザフスタンの登山、鳥を見にエルサバドルへでかけ、ガラパゴス諸島へも行きましたが、まだまだ山には心残りがあっただろうと思うのです。

ご冥福を祈ります。

付記：ここに掲載する追悼文は、里見佳昭先生が、寺島家の皆様で作られている「寺島会」の冊子に寄稿されたものですが、その時に、里見先生からいただいた手紙のなかで、寺島さんに関する印象的な文面を書き添えます。

「寺島さんがボリビアに行かれる前の 5 月 22 日に、「じゃー 行ってくるね！」と手を振って、5 階クリニックの階段を駆け下りていったばかりの訃報で、皆、啞然としました。今でも信じられません。私は寺島さんの生い立ちはあまり詳しく知りませんが、福井県大野市に、昔は大地主の 9 人兄弟の 8 番目として生まれ、本人は百姓の子と云っていましたが、裕福な家庭に育ったようです。大野市は豪雪地帯だったのでしょうか。スキーが下駄のかわりで、スキーで登校していたようです。10 年くらい前に日本百名山を踏破し、2 年ほど前に、槍ヶ岳単独登攀したと云っていました」。



里見腎泌尿器科クリニックのスタッフと寺島和光先生

寺島先生を偲んで

山崎 雄一郎

神奈川県立こども医療センター泌尿器科部長

こども医療センターへと上る坂の途中にお地蔵さんがいる。普段通るときは気にもとめない。でもその前でこうべを垂れたくなるときがある。昨日はこども医療センター泌尿器科の前部長、寺島和光先生のご葬儀でした。登山やバードウォッチングがお好きで、こども医療を辞められたあとも毎年登られていたようで、今回はボリビア、ウトゥルンコ山（6,008m）登頂直前で、突然倒れられたとのことでした。享年76歳。僕より20年近く先輩になられる。1972年、開設早々のこども医療センターに米国でトレーニングを受けて戻られすぐ赴任されました。生前、なんどもお話を伺う機会があったのに若かりし頃のお話を聞きそびれたことが悔やまれてならない。実質的な初代部長として2003年まで実に30年以上勤務され、こども医療センターをおとずれたお子さん達の診療に尽くされるとともに、日本の小児泌尿器科学の発展に寄与されたことはいままでもない。

僕自身は寺島先生のもとでご指導を受けたことはなく手術を見る機会もなかったが、古いカルテをみると手術時間も短く、合併症も本当に少ないことに感心する。僕がはじめてお話を伺う機会を得たのは1996年に日本小児泌尿器科学会の会長をされ横浜にアジア各国の若手小児泌尿器科医を呼ばれたときである。今やそれぞれの国やアジアのリーダーになったCK（香港）やSang Won（韓国）、Dante（フィリピン）などと中井先生、上岡先生をまじえてdiscussionしたのが忘れられない。それをきっかけに寺島先生はAPAPU（アジア太平洋小児泌尿器科学会）を創設された。僕が最初に参加した2000年マニラのAPAPUの前には直接お電話までかけてこられプレゼンの機会をいただいた。

今回のご葬儀でも直前までトレッキングされていたザックやウユニ塩湖の写真とともに昨年、中井先生が会長を務められた日光のAPAPU懇親会の集合写真が入りに飾られていた。自分が今日あるのは、多くの先輩達の様々な応援があつてであることは間違いない。トロントから戻った30歳代の頃は「俺が俺が…」と、自分の力ですべてを切り開くという焦りにも似た思いがいつも先走っていた。にもかかわらず寺島先生はじめ当時50歳代で中心にいらした小児病院や他大学の先生方が、同門でもなく、部下でもなかった僕を応援して下さいました。少なくとも僕にはそう思えた。今、その立場に立つ僕は、次の若手の世代に返していかなければならない。寺島先生、ザックは僕がかつぎますよ！



神奈川県立子ども医療センターへの道にあるお地蔵さん

（山崎雄一郎先生の部長ブログより転載）

深く自然を見つめた寺島和光さん

大野 正夫

生物学科昭和 38 年卒業

医師・寺島和光博士は、ボリビアトレッキングで、忽然と生涯を終えられた。多くの方は、高齢をおして、なぜ！ と驚かれたと思う。寺島さんは、日本の小児泌尿器科外科分野で素晴らしい業績を残されたが、一方、山登り、トレッキング、野鳥、野生植物への造詣が深く、ナチュラルリストとしても大きな足跡を残された。私は、学生時代から「寺島さん」と言わせていただいたので、そう呼ばせていただき、彼の専門の医療のお仕事とは別の、彼の若き日の足跡を中心に書かせてもらうことにした。

知床半島夏季縦走学術調査に参加した寺島さん

寺島さんは、横浜市立大学医学部医学進学課程 2 年の昭和 34 年（1959）7 月に、学内組織である山岳部と探査会の合同の夏季末縦走の知床半島の調査に参加した。当時は、日本が戦後の混乱からやっと豊かになりつつある時代で、南極地域観測隊、マナスル登頂、京都大学のネパール・カラコルム学術調査や東京大学の南米アンデス調査などが行われて、未知なところに多くの日本人が目向け始めた頃であった。学内でも、南極地域観測隊の第 3 次隊員であった生物学科の福島 博助教授が中心となり、学術調査を目的とする探査会が発足していた。知床半島夏季縦走学術調査はその翌年、初めて本格的な横浜市立大学の事業として行われた。朝日新聞社北海道支社が報道支援をしたほか、横浜市や多くの会社からの支援を受けた。夏季縦走は未踏であるので山岳部 OB、医学部山岳部 OB の医師も参加し、縦走体制が整った。医学部進学課程は金沢八景キャンパスで授業があったので、寺島さんは入学とともに生物部に入部していた。寺島さんが 2 年生の 5 月頃から知床半島の企画が立ち上がり、生物部のメンバーとして調査に参加した。調査には生物学科 2 年生の会沢勝夫、加藤賢三、蒔田徳太郎氏らも加わった。私は入学間もない生物科 1 年生で参加した。当時は学生みんなが北海道へ行くのさえ初めてであった。

調査隊は知床半島の根元にあたる羅臼に現地集合することになった。山岳部 OB で副隊長の大野迪朗さんが指揮をとり、物資機材を運ぶために、学生の多くとともに貨客船で東京・晴海から出航した。貨客船は船室が狭かったが、乗船した時から知床調査の隊員の絆が深まった。船窓から大海原を眺めていると、北海道は遠いところだと肌を感じた。寺島さんは、生物班学生のリーダー的な存在で、元気によく話し、仲間達をまとめていたと記憶している。私は最年少であり高校を出たばかりで、大学生の話し方や立ち振る舞いの違いに感動を覚えた。晴海から貨客船に乗り込み、団体行動をしながら釧路への船旅が寺島さんの人生を変えてしまったかもしれないと思うほど、私の印象的な思い出になっている。

釧路港着岸は早朝だった。まだ薄暗く霧も深い。夏とはいえ寒さを感じた。大野副隊長は、てきぱきと指揮を取り、荷物を釧路駅まで運び列車に乗り込んだ。羅臼へは一度乗り換えたので、ホームに大きな荷物の山ができた。集合地点の羅臼は寂しい町であった。

寺島さんは、知床半島の突端地域に上陸し、縦走隊の物資補給支援と知床半島湖沼群調査を担当した。そのため、知床半島最高峰の羅臼岳に登ることができなかった。後年、寺島さんから届いた手紙には、羅臼岳に登った時の写真と調査隊の基地としたお寺の写真が同封してあり、「大野君、羅臼山に登って来たぞ。羅臼の寺の境内は木立が多くて暗く、町も寂しかったという記憶があったが、今回、お寺の境内がこんなに明るかったかと驚いた。町も昔の思い出と違う」と書かれていた。吉野孝子さんが本書に寄稿した文でも、寺島さんは大雪山調査の後にも羅臼岳には登っている。

寺島さんは福島先生をリーダーとする隊に加わり、湖沼群調査などを行った。私の隊は、羅臼岳、硫黄山から知床岳へ、縦走隊を導くために尾根に目印をつける支援が任務だった。このため羅臼岳に登頂していた。羅臼岳は百名山の一つになっており、寺島さんにとって思い出の山であったか。手紙の「登って来たぞ」の一言に気持があふれている。

福島隊長は知床半島調査に関して長文のエッセイを書かれているが、寺島さんも、この知床半島調査の詳しい記録を生物部の部報に残しており本書に転載した。内容は苦労してハイマツ林の中をヒグマの恐怖におびえて歩いたこと、がれきの沢の登り、知床池畔で蚊の来襲に悩まされた事とともに、正確な動植物の観察など適切な表現で、彼の気持ちがひしひしと伝わってくる。彼が「自然」に真摯に向かい合う原点は、知床半島での経験ではないかと思う。

海岸を歩いて羅臼へ帰って来た寺島さんは「昆布を食べたが、うまかった。番屋（昆布採取小屋）の人達との話は楽しかった」と話された。毎日、飢えて過ごしたことは隊員の共通の話題であった。なにしろ、食料を暑い船倉に入れて運んだので、パンは黴びてしまい、野菜は腐らせてしまったからだ。

この調査では軽装で行動すると言われ、着替えは1組に制限された。幸い、2週間あまり、雨に遭わずにすんだ。羅臼で解散になり、生物班の学生達は一緒に川湯温泉に向かった。温泉の浴場で、驚くほど垢が出た。二人の思い出の笑い話になっている。知床での行動は、私は大学新生であり、人の後を歩いていたが、寺島さんは率先して楽しそうにてきぱきと行動していた。私は川湯から帰省したが、寺島さん達はそこから大雪山へむかった。寺島さんは、医学部3年の時に、大雪山扇ヶ原湖沼調査の隊長で、15人の部員を率いて調査している。知床半島の湖沼調査との比較をしたいとの思いがあったかもしれない。大雪山の秘境扇ヶ原調査の記録は、1年先輩の医学部4年の伊東芦一（蘆一）さんが、旅行雑誌「旅」（日本交通公社）に、エッセイ風に詳しく書かれている。この記事も本書に転載されているので、寺島さんの足跡を知ることができる。調査した湖沼のなかで、二週間テント・サイトにした沼を地元の上川町で、大学沼と改名してくれた。この原稿を書くに当たって、大学沼をインターネットで検索したら、今は大雪山系周辺湖沼群の名勝地ルートの一つと

して写真も掲載されて紹介されている。寺島さんはこのことを知っていたらどうか。秘境のままに残ることを期待していたのだが。

知床半島調査の縦走記録は、本多勝一記者が参加し、朝日新聞・北海道地方版に連載された。本多勝一氏は京都大学探検部出身であった。寺島さんは本多氏が5日間で知床岬から羅臼岳までザック一つでの縦走隊に加わるまでの間、福島先生とともに本多氏と行動を共にした。後年、本多氏は、「カナダ・エスキモー」、「ニューギニア高地人」やベトナム戦争取材した「戦場の村」などの多くの著書がある著名なジャーナリストになられたが、本多氏の「北海道探検記」の著書に知床半島縦走が転載されており、今でも読むことができる。

当時の羅臼は知られていない漁師町であったが、羅臼を一躍有名にしたのは、森繁久弥や加藤登紀子の歌う「知床旅情」である。その歌詞の最後に、「忘れちゃいやだよ、気まぐれカラスさん、私を泣かすな、白いカモメよ」というところがある。羅臼の町には、なぜか海鳥とカラスが多かった。それが縁でもないだろうが、寺島さんは知床から帰ると「日本野鳥の会」に入会した。寺島さんの生物部での思い出として、後輩の飯島君が、彼から「トリキチ」という、南方の島に派遣された部隊が野鳥を探索し、後日隊長は野鳥の会に関わったことを書いた本を勧められたと書いている。寺島さんは、1959年秋に日本野鳥の会神奈川支部に入会し、ボリビアで、フラミンゴの群生地を見るまで、50数年間、野鳥観察に関わり、その造詣の深さから神奈川支部の幹事にもなられた。

探査会学生部と探検部時代の寺島さん

知床から帰ると、山岳部と探査会合同の海外遠征プロジェクトが持ち上がった。中国の天山山脈への登頂であった。多くの秘境は、大きな大学が手がけていたが、シルクロードの背景にある天山山系には未登の山があり、生物地理学的にも興味深いところであった。

当時、生物学科を卒業して研究生をしていた丸山晃さんが、生物学科の1室におられ知床半島で調査された標本を整理していた。その部屋が天山山系プロジェクトの準備室にもなっており、寺島さんは資料集めに参画していた。生物科2年生のメンバーは、海外遠征の議論についていけず、探査会の活動から離れていった。寺島さんと私だけが秋から知床半島地池湖畔で採取したプランクトンや付着藻類標本を、授業の終わった後に福島研究室にある顕微鏡で種名を調べた。陸上植物と違って、微細藻類を調べる図鑑がなく、いくつかの本を読まなければならない作業であった。私は知床のルサ川で自分が採取した標本のなかから藻類を調べた。寺島さんは医進課程が終わるまで、知床ポロモイ台地の池沼のプランクトンを調べる作業を続けた。寺島さんは鳥と植物の名前をよく知っていたが、微細な動植物にも興味を持たれた。午後5時頃になると助手の小林艶子さんが、お茶を出して下さり、福島先生、丸山さんも交えて、いろいろな話題を話し合った。寺島さんも独特な語り口で自分の進みたい将来を語るなど、楽しそうであった。まだ医学部の専門授業が少ない時で、寺島さんの生涯を通じて、深い自然へ、生物への愛着は、この学生時代に、はぐ

くまれたのではなかろうか。

秋になると、医学部本科1年生の伊東さんが、天山山系への海外遠征に興味を持ち探査会に入った。彼は高校時代に山岳部にいて山登りの技術を習得していた。彼は議論ばかりしている探査会に不満を持ち、日常的なサークル活動をしたいと学生達のリーダー格になり、探査会のなかに探査会学生部を10月に発足させた。この時に、生物学科1年の松橋隆司君、横山宣雄君、早川紀信君、知床半島に参加した蒔田さん、山岳部の森下市朗さんが参加した。松橋君がサークル棟の中に空き室を見つけた。彼の政治力で、学生部は文化部連合会に加盟して部室として学校に認めさせて活動の拠点ができた。学生部の部長は横山君がなったが、暗黙のうちに伊東リーダー、寺島サブリーダー、大野・松橋事務局という5人の学生部体制が作られた。伊東さんは当時の石原裕次郎調の湘南言葉で、荒々しく統率し、寺島さんの言葉はその分優しく聞こえて、我々後輩を和ませてくれた。知床から帰って、探査会には夏用テントと一通りの炊事用具があった。山岳部の森下市朗さんが探査会の会員になったので、山岳部が所有する機材も借りることができた。そこで、早速、学生達だけの丹沢の沢登りを行った。伊東さん、寺島さん、森下さん、横山君、松橋君らとの最初の合宿であった。



訓練合宿の夕飯作り（左より伊東芦一、横山宣雄、松橋隆司、大岡忠正）

翌年、1960年1月には、天山山系調査遠征の冬山訓練として八方尾根で山岳部OBの指導で本格的な訓練が行われて、伊東さん、寺島さんと森下さんが参加した。寺島さんにとっては、初めての本格的な冬山登山の技術訓練ではなかったかと思う。それから、彼は幾度かの雪山訓練のリーダーをすることになった。

2月には、奥日光の湯元温泉に近い湯の湖の湖沼調査と白根山での雪山訓練を伊東・寺

島・松橋・横山・大野と福島先生が湖沼調査の指導に3日参加して下さった。どこの駅で撮ったか不明だが、福島先生が撮ってくれた5人の貴重な写真があるが、ピッケルを持ち大きなキスリングを背負っている。キスリングのなかには、湖沼調査の機材が入っていた。雪の上で採水器を持った寺島さんの貴重な写真もこの時に撮られた。この5名が探査会学生部（後に探検部）の歴史で初期活動の中核となった。奥日光合宿は冬用テントであったが寒さがこたえた。それでも、湖沼調査の基本を福島先生から学び、白根山で雪山訓練を行った。2014年の探検部のOB会の途中、横須賀で福島先生を囲む会をもったが、その時に、寺島さんから、「福島先生が湯元の温泉宿の湯に入ることを頼んでくれて、冷えた体を温められた」と話された。福島先生は記憶に残っていなかったようだが、毎日、寒さに凍えながら作業して、夕方、温泉につかるという面白い経験であった。この調査から、山岳湖沼調査活動は寺島さんが隊長であった大雪山扇ヶ原湖沼調査まで、探査会学生部の主要な活動となった。福島先生が横浜市大を去ったことから、山岳湖沼調査が行われなくなったのは残念であるが、これらの経験が、寺島さんを多くの秘境トレッキングへと導いたのかもしれない。

寺島さんは医学部1年になってからも探査会学生部の合宿に多く参加した。秋的那須山脈・茶臼山にある小さい湖の調査に参加した。その時、岩場が多くテントを張る場所がなくて岩場で野宿をすることになった。澄んだ夜空の下で寝袋を並べて横になった。動く星があると、「あれは人工衛星かな」という話題や星座を探した。この合宿だったと思うが、横にいた寺島さんが、「大野、ネパールのお花畑から寝ながら、ヒマラヤをみたいな」と言われたことが、なんとなく記憶に残っていた。後年、寺島さんから、「ヒマラヤ山塊」の絵はがきが届いた。そこに、「ネパールに行ってきたよ！」と書かれていた。この頃から、海外トレッキングの帰国後、いくつかの絵はがきが届くようになった。

寺島さんが医学部2年の5月、連休に出かけた新人合宿も思い出が多い。この年には、生物科の宮崎捷二君、河合武臣君、木村努君の1年生が入ってきた。行動する時は経験者の寺島さんがトップに立ち、その後に新人を入れ、最後尾は伊東さんとなった。3人の新人は仲がよく、歩きながらよく話し、よく歌った。のどが渴けば、給水休憩を要求した。当時の山登りでは水を多く飲むのは、よくないということになっていて、登山中の給水要求は今までにないことであった。現在の登山では、登山中でも少しずつ給水することになっている。彼らの要求は妥当であった。

その日、テント場に到着した寺島さんの一声は「新緑の丹沢はきれいだな」だった。そして途中でみた鳥の名前をいくつか挙げたことが印象に残っている。彼はいつも小さい望遠鏡を持参していた。後輩の河合君も寺島さんの記憶のなかで、双眼鏡でなく筒型望遠鏡であったことを思い出すという。

当時、新人達が食料を買い付けていた。3人の新人が入る前は、果物は粉末ジュースであった。肉はほとんどソーセージであった。新人達はリンゴを買い、キャベツや生肉を買い付けてメニューが豊かになったことが思いだされる。寺島さんは料理が得意で、先輩なが

ら率先して、「田舎育ちでよく手伝った」といいながら料理していた姿が印象に残っている。

食事が終わると、テントのなかで3人は歌を歌い始めた。今までの合宿では、食事が終わると寝るまでの1~2時間は、当時60年安保の時代で、政治や社会問題を論じていた。能弁な横山君や松橋君が主役になって伊東さんや寺島さんは聞き役になることが多かったが、寺島さんは植物、鳥から星座などの話をし、「自然保護の寺島」と言われていた。医学部3年の時に、探査会会報に「自然保護と探査会」を執筆している。本書にその論文を転載した。

合宿のテントのなかで歌を歌い始めたのは、安保闘争が終焉した後、「歌声喫茶」が盛んになったことにもよる。寺島さんは3人の新人達に負けずに、よく歌っていた。彼は新宿の「歌声喫茶」で配っている手帳のような小さい歌集を持参しており、ロシヤ民謡が好きであったが、中国民謡と言われる「草原情歌」を幾度か聞かされた。哀愁の響きのある歌で、この原稿を書くために、ネットで聞き直すと、中国大陸の大草原の光景が浮かぶ。寺島さんは、「天山にも行って来た」と探検部のOB会で話されたが、あるいはその時に、この「草原情歌」を、口ずさんだかもしれない。

医学部2年の夏の北上川調査では、医学班として伊東さんとサワガニの採取とその内臓の中の寄生虫の有無を調べた。北上川調査の前に岩手山で生物学科の系統植物学の野外実習があり、寺島さんはその実習に特別参加をした後に調査に合流した。横山君、松橋君と私は単位になる実習であったが、北上川調査のために参加しなかった。野外実習は高山植物を中心とした植物の名前を学ぶことであった。寺島さんの意欲的な行動には感服させられた。

寺島さんが訓練のサブリーダーとして参加したのは、医学部3年の5月の尾瀬合宿である。この年は、生物科の女子学生2名や商学部からの新入部員が多く、合宿は15名の参加となった。本格的な雪山訓練としても初めての合宿で、山岳部から冬用テント二張り、ピッケル、ワカン、ラジウス（コンロ）などを借りた。この合宿は、2年生になった宮崎君が詳しい記録を残し、本書に転載している。隊編成は伊東・松橋隊と寺島・大野隊の2班に分かれて行動した。寺島さんは女子部員のいる隊を指揮した。私は女子部員をテントのなかでどのように扱うか戸惑った。また、後に探査会学生部から探検部へ名前を変えて初代部長になった松本芳樹君や奥田耕造君、三橋孝子さんらの元気な新人達もいたが、うまくまとめた。我々の班には、雪山のベテランは寺島さんしかいなかったが、雪山の歩き方やピッケルを使ったグリセード（下降）の仕方などを教えた。テントでは、「僕はこんな雪深い福井県の田舎で雪靴を履いて学校に通った」などと、話されたことが思い出される。

大雪山扇ヶ原調査隊長などの寺島さん

寺島さんは、医学部3年の夏の大雪山調査の隊長になり、準備の打ち合わせに医学部のある黄金町から金沢八景の部室によく来られた。大雪山調査報告書には隊長としての総括が書かれているが、伊東さんが書かれた扇ヶ原湖沼群の報告エッセイに、寺島さんが個人

的に手記を書き残していると書かれているが、その手記をみることができない。伊東さんのエッセイのなかで、寺島さんの手記の一節として、「以前、見立沼と呼ばれていた沼のほとりに「高原沼」という真新しい立札が、たった一枚の立札だが、いかに甚大な影響をこの自然の景観に与えていることか！ 昨日まで、山道以外には、全く人工的な産物が見られず、すべて太古のままの姿をとどめたというのに、この一枚の立札はこの素晴らしい自然に対して、なんと不釣合で俗っぽいことか！」と紹介している。寺島さんの自然に対する見方を知ることができる。

寺島さんは、学生時代の最後の夏に、部活動の伊豆七島新島の無人島調査に参加している。隊員として鵜渡根島に滞在した。そこで彼は海鳥のオオミズナギドリを見たはずである。彼は5年間の部活動で、秘境とされる山、川、湖沼、島に足を運んだことになる。

医学部の授業は大変厳しいと聞かされていたが、伊東さんと寺島さんは多忙な授業や実習をこなして、探査会・探検部活動に情熱を注がれた。しかもお二人は、医学部学生としても優秀な成績で卒業されている。

学生時代を終えて留学まで

伊東さん、寺島さん、横山君と私は大学院に進み、松橋君は生物学科卒業後、数学科に学士入学し、それぞれの道に進んだ。それでも、伊東さんと寺島さんが米国に留学するまでの数年間は、8月お盆が過ぎる頃より、仲間を誘って、北アルプス連山を踏破していた。部活動と違って軽装備の山小屋泊まりの短い期間の山行だった。この時代に多くの山に登ったが、軽装備で楽だし、テントを張って食事を作る苦労もないせい記憶が定かでない。私は伊東さんと行動を共にすることが多かったが、寺島さんと伊東さんと学生の4人で、長野県白馬村にあるスキー小屋「白い小屋」に泊まったことも。小屋の主人・大野迪朗さんは知床半島調査の副隊長であった。小屋は、大野さんと画家の奥様・榎（かや）さんが建てたものだが、そこに一泊して白馬岳に登った記憶がある。お盆明けの北アルプスは、意外に天候に恵まれたが、この時は、あいにく雨で、連泊することになった。榎さんが留守番しながら我々のお世話をしてくさったが、彼女の描かれた絵や絵はがきをみた記憶がある。白馬の大雪渓は、まだ残っており、翌日好天に恵まれて、夏山で雪を踏む快適さを味わった。寺島さんは、医学部の友人や野鳥の会の仲間と山行を楽しんでいた。松橋君は伊東さん、寺島さんと3人で、道志山塊に行った記憶があり、寝袋しかないので、小さな小学校の教員用か用務員の部屋を交渉して泊めてもらったという。

寺島さんはその後3年間、米国に留学。近くに山のないところで、多忙な日々を送っているとの便りが届いた。

日本野鳥の会と日本百名山踏破

米国から帰国され、神奈川県立こども医療センターに着任し、新しい分野の治療を開拓されていたので、多忙な日々であったと思うが、1974年に届いて手元にある手紙には、

医療センターのスタッフと、関東周辺の山歩きをしている。1976年の夏には、北アルプスに行ったと便りがあり、1977年6月の便りでは、「6月5日に、久しぶりに西丹沢（コーミン、檜洞丸一中川温泉）に行きました。ツツジの最盛期で、なかなか良かったです。しかし、昔みたいな無理はきかないという感じです。それでも、がんばって今年の夏も北アルプスに登るつもりです。」と書かれていた。この便りは、たぶん、野鳥の会の仲間と探鳥会に参加した後ではなかったかと思う。

私は、その頃より熱帯地域の調査に参加することが多くなり、持って行く薬などで、寺島さんに電話で相談することがあり、その都度、山の話などをされた。「お医者さんは、忙しいのではないですか？」という質問をしたら、「いや、僕のところはそんなに忙しくないよ。ただ、全国から患者がくるけどね」と言われたのが印象に残っている。きちっと本業と趣味・休暇のスケジュールを組み立てていたのを感じた。この頃は、休日は探鳥会などに参加されたのではなかろうか。鳥に疎い私には、探鳥会の話をするとはなかった。

寺島さんが、再び、山登りに挑戦を始めたのは、1978年に文庫本で、随筆家で登山家である深田久弥氏が、「日本百名山」を刊行し、全国的な登山ブームが起きた頃からはなかろうか。1982年に知床の羅臼岳、1985年に屋久島の宮の浦岳に登頂した絵葉書をもって。その後、毎年届く年賀状に、登頂した山名の添え書きがあった。本書に書かれている元日本野鳥の会の神奈川支部長、村上司郎さんの文にも同じようなことが述べられている。100山の完登がいつだったか聞くことがなかったが、この本書の刊行でお世話になった同級生の里見佳昭先生にお聞きしたら、10年ぐらい前ではと話された。約20数年の間に100山完登は、多忙なお仕事と同じくらいの目標を立てて、一つ一つ登頂し山名を塗りつぶしていったのだろう。寺島さんらしい几帳面さと強い意志がうかがえる。

海外トレッキングと横浜植物会

ネパールからの山々の絵はがきが届いたのが、最初の海外からの絵はがきであったが、本書にある寺島さんのヒマラヤ・エッセイで、1980年とわかった。その後、南アフリカの国立公園、アンデスの山々やアフリカ・キリマンジャロ峰の絵はがきが届いた。

野鳥の会神奈川支部の会長さんの勧めで、1982年に横浜植物会に入られているが、海外の植物観察報告がある例会に多く参加されている。寺島さんは太古の自然が残っているところ、美しい野生植物や鳥が観察できる場所を求めて、海外に目が向き始めたのだろう。

定年退職されてからも山歩きされていて、時間の余裕ができてから、本格的な海外トレッキングのツアーに参加され、私が行きたかった南米のガラパゴス諸島にも行かれた。

最後の別れになった二つの会合で

松橋隆司 大野正夫
昭和 38 年卒業

横須賀の京浜急行三崎口にあるリゾートホテル「マホロバマイズ三浦」で 2014 年 12 月 7 日夕、横浜市立大学探査会・探検部の OB 会を開いた。連絡の取れる者の多くに呼びかけ、1 泊での OB 会は初めてであった。

福島先生を囲んで

会合に先立って、横須賀にお住まいの福島 博先生を囲む昼食会を横須賀中央駅近くで開いた。多くは福島先生の教え子であったが寺島さんのほか松橋も参加した。寺島さんは、学生時代に特別参加した生物学科の植物野外実習や知床半島調査、奥日光の湖沼調査訓練など、福島先生と行動を共にした思い出を語られた。「福島先生といっしょに歩きながら、高山植物の名前をいろいろ教えていただいたのが役立ってよかった。奥日光は実に寒かったが、先生が旅館と交渉して温泉にいれてもらったことが忘れられない」などと楽しそうに話された。



福島博先生を囲む会

左より、大野正夫、吉武左紀子、福島博先生、寺島和光、河合武臣、松橋隆司、宮崎捷二



左より、寺島和光、河合武臣、松橋隆司

寺島さんは、知床半島調査では、福島先生と多くのところで一緒に行動しただけでなく、知床池沼のプランクトンを福島研究室で調べたこともあり、先生と親しく交流していた。生物学科の野外実習は、探査会学生部の北上川水系調査の直近におこなわれており、私たちの北上水系の生物調査班が、松尾鉦山から流れる支流の調査をしている時に、福島先生が立ち寄られた記憶がある。寺島さんは実習後、探査会学生部の調査地点へ向かい、医学班の伊東蘆一さんと合流している。その時の調査結果は本書で収録している。

大野が寺島さんに、福島先生を囲む会に参加しないかとお誘いしたら、「ぜひ参加したい」という返事だった。たぶん、福島先生との再会は学生時代以来で、福島先生と寺島さんの双方から、「会えてうれしかった」と、後日、連絡をいただいた。福島先生との会食後、探査会・探検部 OB 会の会場へ向かった。

OB 会の寺島さんの話に驚き

会場に着くと寺島さんは、医師、医学者としての足跡、山行の話など学生時代と変わらない語り口でよく話された。大野の記憶によると、寺島さんの手術例は、腎臓手術 1,500 例もあり、日本ではそれが最高例だが、米国では 2,000 例の記録があり、「日本はまだ、まだ」などと謙虚に話された。「今、聖マリアンナ医大で教えており、診察もあるので、結構忙しいんだよ」と微笑まれた。

印象深かったのは、「ガラパゴスにも行ってきたよ!」と言われたこと。ガラパゴス諸島は、南米のエクアドルからかなり離れた島々だが、生物研究者なら行ってみたいダーウィン進化論の原点の地である。だが、私たちのほとんどは行ったことがない。寺島さんの医療以外の行動は、博物学の視点から出発している。ボリビアのトレッキングの目的の一つはフラミンゴの群生をみることではなかったかと今、思う。トレッキングを企画したツアー会

社の報告によるとフラミンゴを熱心に観察されていたという。最後にフラミンゴを観察できたことはきっと本人も本望であっただろうが、私たちにとってもせめてもの慰めである。



寺島さん（写真中央左）の話を聞く（OB会の会合で）



探査会・探検部OB会懇親会（横須賀、マホロバマインズ三浦）

後列左から川尻哲夫、水尾寛己、松本芳樹、名和裕美、中列左から寺島和光、高松康夫、小澤幸重 松橋隆司
前列左から河合武臣 斉藤 淳 宮崎捷二 遠藤紘一郎 大野正夫 山口由則

寺島さんは自己紹介で、「話が少し長くなるが」と断ってから、ざっと次のようにはなした。「私は、神奈川県立こども医療センターに勤めていたが、日本野鳥の会と横浜植物会の会員なので、その両方の観察会によく出かけていた。深田久弥の「日本百名山」を読んでから、その踏破をめざし、全山を踏破した」と話した。初めて聞く話に感嘆の声があがった。ついでネパール・ヒマラヤや中央アジアでのトレッキング、アフリカのキリマンジャロにも登ったと話が続いた。このなかで「感動した」と強調したのは、多くの美しい高山植物に出会ったことだと語った。

一息ついて、中国の天山山系のトレッキングにも行って来たという話に。天山は、彼の学生時代から調査プロジェクトが企画されていた因縁の山だ。後に探査会と山岳部が合同登山隊を組み、天山山系のトムール峰プロジェクトが実行された。これに参加した宮崎、河合、高松君らもこの会合の席におり、思い出を共感し合った。

寺島さんは、美しい山や鳥、植物との出会いを求めて世界を歩いた。もう思い残すことはないように思うが、「そんなことはないよ。見たいものはまだまだある」と「寺島弁」で反論する声も聞こえるようだ。



左より山口由則、大野正夫、寺島和光

寺島さんはその日の宿泊をしないで、「明日もまだ診察の仕事がある」と、後輩の齊藤敦君（神経科医）とともに帰られた。私たちにとっては、これが寺島さんにお会いした最後であった。それはたった1日の会合であったが、学生時代と変わらない、うらやましいほどの情熱を持って、自然を愛してやまなかった姿が、私たちの心に強く残った。

あとがき

昨年秋、探査会・探検部 OB 会で寺島和光さんの追悼文集を出そうと決めてから半年が過ぎました。なんとか御命日に間に合わせることができ、刊行委員会としてはほっとしているところです。

ご遺族、ご兄弟をはじめとして、医師のご友人、植物や鳥の観察のお仲間、海外のトレッキングや登山で行動を共にした人たち、そして学生時代に一緒に活動した人たちのご協力にあらためて感謝を申し上げます。そのおかげで「寺島さんとはこんな人だった」と語るに足るだけの足跡をご紹介することができたと思っております。その足跡から大きく見えてきたものがあります。

医師・医学者として患者と向き合う高い献身性、その結果としての大きな業績、そして好奇心、鳥や植物を見ると心が躍り、山に親しみ山で亡くなった優しくて激しいナチュラルリストの生き様…。そんな愛すべき寺島像が私たちの胸に深く刻まれたのではないのでしょうか。

私たちは、学生時代の足跡を掘り起こすことからはじめました。といっても半世紀も前のことであり、あちこちに資料が散逸し、OB の押し入れや探検部の部室に埃をかぶり、虫に食われるままになっていました。これらの資料を、埃をはたいてお目にかけることができました。それは、はからずも探査会・探検部の草創期の活動記録を再現することにもなりました。

本書の刊行には、ご夫人の寺島ユキ子さん、お嬢さんの山田香織さん、ご兄弟の寺島節徳さん、大学時代の同僚医師の里見佳昭さん、神奈川県立こども医療センターの山崎雄一郎さん、日本野鳥の会神奈川支部の村上司郎さん、横浜植物会の青木清勝さん、渡邊重彦さん、アルパイン・ツアーサービス株式会社の山田 勝さん、本多直也さん、写真転載の本多勝一さん、生物部後輩の飯島春雄さんらが、原稿の執筆や写真の手配などご協力くださいました。心より感謝申し上げます。

本書の編集は大野、松橋のほか、松本芳樹、宮崎捷二、名和裕美が担当しました。

横浜市立大学探査会・探検部 OB 会 刊行委員会

追悼 自然を愛した医師・寺島和光

非売品

発行日 2016年 5月 30日

発行者 横浜市立大学探査会・探検部OB会

世話人代表 大野正夫 松橋隆司

印刷 有限会社 西村謄写堂

連絡先：781-1164 土佐市宇佐町井尻 226-2 大野正夫

